は固より控馭し易からしむる所以にして怪しむに足る者無けれども蒙人悟らず反て札薩克を受くるを以て家門の榮と爲す蓋し統撫馭の材に乏しきに因るのみ此よりして喀爾喀遂に清廷の羈絆を脱すること能はざるに至れるは亦自然の理數のみ

科爾沁親王をして示さしめたる內地の法度とは康熙二十七年九月初八日の上諭に喀爾喀等、雜處我邊汛內外、應嚴禁屬下、不許劫奪盜竊爲亂、如有違犯、照內地律例正法、至放火小偷、亦照我律、從重治罪、其令喀爾喀該管屬下、嚴如曉諭とある是にして由來蒙古人等は何等法則の下に立たず劫奪盜竊は其の常事にして人を殺し財を奪ふも供佛施僧の用に供する者は視て作善と爲すが如き者あり之に檢束を加ふること無くんば害を被むる者其れ幾何ぞや今既に近く內地に接す此の禁令無き能はざるなり

二十八年、土謝圖汗の部人岱青諾顏洪果爾、七百餘戶を携へて至る同族齊巴克額爾克、達什敦多卜等亦相繼て至る皆察琿多爾濟をして之を領せしむ車臣汗の部人額爾克綽克圖、包爾呼巴特瑪達噜噶、索諾木達噜噶等亦至る烏默客をして之を領せしむ車臣汗の族人阿南達本と克魯倫河の北、索和尼に駐牧す此に至て其子貢楚克及び台吉札布伊勒登を率て亦至る其の携ふる所の戶口は錫喇什寶台及び烏珠穆沁界內の都什多羅特、浩齊特界內の固都哩呼等の地に分牧せしめ阿南達をして留りて阿噜科爾沁界內の呼噜蘇台に駐牧し往來防護せしむ土謝圖汗の部人、食に乏し清廷、內大臣費楊古を遣り張家口の

聖祖多倫諾爾に會閱の禮を行ふ

食粟を發して之を賑恤せしむ二十九年、札薩克圖汗沙喇の子巴朗、阿爾泰山陽より逃げ來り台吉卓特巴と偕に內附す之を歸化城に置く繼て同族台吉喇布坦、納木札勒鄂齊爾、氷圖岱青等も亦至る皆巴朗に命じて之を管せしめ所屬の貧戶に賑恤す托多額爾德尼は賽因諾顏の部人なり噶爾丹の來り侵すに當りて所部潰走す托多額爾德尼獨り拒戰し殺傷相當る賊勢稍〻衰ふ噶爾丹、車臣汗部を掠め巴顏烏蘭を佔踞す托多額爾德尼、族人素泰伊勒登と兵三千を率て圖拉河に赴き其の歸路を扼す此に至て亦入覲す清廷之を優賞す三十年、噶爾丹罪を謝し降を請ふ清廷其詐ならんことを慮り賽因諾顏部長善巴に命し侍郎瓦岱に隨ひ圖拉河に赴て偵察せしむ路、克魯倫河に由て土謝圖汗の從弟錫布推哈坦巴圖魯、諸弟を率ゐ瓦岱を迎て降る噶爾丹の來り侵しゝや錫布推哈坦逆て之を擊つ時に和託輝特の二台吉あり相勠力せんと誓ひ既にして皆約に背く錫布推哈坦怒て之を拘す噶爾丹、人をして來て誘ひ降さしむ又其人を執へ避て克魯倫河邊に走る此に至て善巴に就て來歸す清廷之を嘉し仍ほ巴顏烏蘭に歸牧せしむ尋て圖拉河に移る清廷、其地の噶爾丹か往來必由の途に當れるを以て嚴に敕して防禦せしむ是時に當りて喀爾喀の內附せる者、數十萬に上り未だ封爵を頒たず且つ是より前、喀爾喀の通貢せる者、皆子弟をして入朝せしめしのみ未だ汗の親から詣れる者あらず清廷以爲らく宜しく此機に乘りて之が法制を立て永く遵行せしむべしと聖祖乃ち多倫諾爾に巡幸し親しく會閱の禮を行ふ期に先だち豫め三汗及び賽因諾顏部長等に命し四十九旗內札薩克の例に隨ひ先つ集まりて以て俟たしめ尙書馬齊をして命を奉じ

て往き禮を議せしめ賞格九等、坐次七行を定め察琿多爾濟を以て首位と爲す四月、車駕、多倫諾爾に至る軍容最も莊重を極む喀爾喀部の汗、濟農、諾顏、台吉等三十五人、次を以て朝見し始て跪拜の禮を行ふ是に於て諸部の濟農、諾顏等の號を改め王公貝勒子等の爵を賜ひ仍ほ汗號を留めて三汗をして之を襲はしめ各々札薩克を授け佐領を編むこと內札薩克の例の如くならしむ喀爾喀部是より全く清廷に臣屬す

案ずるに當時朝見せし者三十五人、皆封爵を受く汗二人、親王一人、郡主七人、貝勒三人、貝子六人、輔國公五人、鎭國公二人、頭等台吉九人、之を各部に分てば土謝圖汗部十六爵（內賽因諾顏部に屬する者七爵を含む）車臣汗部十爵、札薩克圖汗部九爵、但當時三汗の名ありて三汗の實無く札薩克圖汗沙喇の子幼弱にして未だ汗號を嗣ぐこと能はず暫く沙喇の弟策旺札布に親王を授けて代て其衆を領せしむ後、策旺札布をして汗號を襲はしめも亦雍正十年に罪を以て其爵を削られ其の族弟郡王格埒克延不勒をして之を襲はしめ汗號絕えずと雖、是より永く郡王の兼銜となり九白の貢を出すの資格を失ひ今に至て九白の貢は三汗の献する所と稱すと雖、其實は土謝圖、車臣の兩汗と哲尊丹巴胡圖克圖の出す所となる然れども遠く其の本源を探れば札薩克圖汗は實に喀爾喀三汗の本宗たり故に清廷の初て八札薩克を設けられしにも其の四札薩克は札薩克圖汗一部の內より出でたり札薩克圖汗部尙ほ未だ衰へず而るに額琳沁の亂に部人、多く土謝圖汗に依り土謝圖汗擄て還さず是より內訌紛糾し遂に噶爾丹の侵入を致す禍、額琳沁に始まりて土謝圖汗に成れりと謂つべし清廷、土謝圖汗の內附を喜び其の禍亂の因て起りし所を正さず土謝圖汗を欵接し先入既に主となる後に札薩克圖汗の部人も亦至ると雖、既に第二着に屬す之を土謝圖汗より重くすること能はず亦已むことを得ざるの勢なり是に於て策旺札布僅に親王に封せられ位、二汗の後に墜つ但座次は一時、特命を以て車臣汗烏默客の前に置かれたりと雖、札克薩圖汗是より遂に微弱にして復た他兩汗と比肩すること能はず後來賽因諾顏部の盛大なるに及び其の故地半は其の有に歸し杭愛山陰の地は賽因諾顏部に入り札薩克圖汗は其の一隅に僻在するに過ぎざるに至る喀爾喀部古今の情形蓋し是に於て一大變せり

三十一年、賽因諾顏部長善巴の再從弟策凌、其弟恭格喇布坦と俱に其の祖母に從ひ塔米爾より至る策凌の父は納木札勒、丹津喇嘛が子たり清廷、丹津喇嘛が故を以て善く之を遇し且つ其の尙ほ幼なるを以て內廷に教養し授くるに三等輕車都尉を以てし其の部屬を察哈爾の鑲黃旂に附牧せしむ善巴の從子阿哩雅、衆を携へて亦至る之に一札薩克を授け其の舊屬阿爾薩蘭衞宰桑に命して旅務を協理せしむ是より前、阿爾薩蘭、噶爾丹の烏蘭布通に敗れて遁げ歸れるを偵ひ之を邀擊して其の台吉丹津哈什哈、阿玉奇等を擒にす是に至りて之を献せし功に因れるなり札薩克圖汗部の人納瑪琳藏布、西藏より來歸す納瑪琳藏布は和托輝特の額琳沁が孫なり額琳沁、額魯特に奔り既にして又噶爾丹と隙あり避けて西

土謝圖汗の部人露國より來歸す

藏に入る納瑪琳藏布從ふ是に至て來歸す清廷、其の舊札薩克に係れるを以て輔國公に封じ歸化城に置く三十二年、土謝圖汗の部人車棱札布、其屬六百を率ゐ露國より來歸す既にして錫布推哈坦巴圖魯が巴顏烏蘭に遊牧せるを聞き往て之に附せんことを請ふ之を許す初、札薩克圖汗の部人根敦は額琳沁が族なり庫倫伯勒濟爾の盟に札薩克を授けられ額琳沁に代りて和託輝特の衆を領す噶爾丹侵入し其の阻する所となりて未だ内附を得ず噶爾丹の敗れて歸りしや之を追て阿爾泰に及び其將察罕台吉、烏爾袞等を斬て還り達爾漢諾顏をして其捷を献せしむ故に清廷久しく之を念ふて忘れず三十三年、根敦、錫布推哈坦巴圖魯と偕に至る清廷喜び封して多羅貝勒と爲す三十四年、是より前、車臣汗の部人洪俄爾岱青、達賴宰桑等、噶爾丹に掠められて歸ることを得ず額魯特の内に在り洪俄爾岱青の兄の子罕篤代て其衆を領し肆に内地を劫す清廷、尙書阿喇尼に命じ罕篤をして衆を携て科爾沁部界に入り親王沙津に附して遊牧せしむ罕篤、科爾沁部に往き又劫掠を行ふ乃ち放て界外に出でしむ其兄重布登留り牧せんことを請ふ因て車布登を戒しめて盜を爲さゞらしむ是に至りて額爾克阿海の子錫喇布、又罕篤が其の所部瑚爾拉特の衆を誘奪せるを訴ふ清廷、官を遣りて鞫問せしむ罕篤詭て言ふ車臣汗碩壘曾て瑚爾拉特の人を以て我が祖噶爾瑪に與ふ哲卜尊丹巴之を識ると之を哲卜尊丹巴に質す曰く額爾克阿海に與へしを知るも噶爾瑪に與へしを聞かずと罕篤之を恨み益〻人をして錫喇布が屬を誘奪せしむ適〻噶爾丹再たび巴顏烏闌を掠む清廷、郎中音札納を遣り罕篤に諭して界内に移らしむ罕篤從はず且つ錫喇布

露人罕篤を擒にして至る

が屬を盜めるを以て討を懼れ音札納を執へ台吉札木巴拉等を脅かし將に進て露國に投せんとし車布登に勸めて偕に去らしむ車布登肯はず且つ其の清廷の恩に背けるを責む罕篤も亦聽かず遂に阿南達が屬數十戶を掠めて進る車布登其子圖巴をして馳せて郡王納木札勒に告げしめ自から兵を率て之を追ひ大に之を敗りて其の妻子を得、人をして往て罕篤を招かしむ雪に阻せられて果さず清廷之を聞き郎中阿必達、員外郎伯什喜を遣り納木札勒と俱に喀爾喀河より追て賊衆を降し烏默客亦諸札薩克に檄して會緝せしむ札木巴拉等罕篤を擒にせんことを謀りて成らず衆を携て返り途にして追兵に追ふ之に罕篤已に博爾濟より敖嫩河に進ると告ぐ追兵乃ち還る是に於て車布登、阿南達等皆琿圖塔什海より阿嚕科爾沁界内に移りて遊牧す既にして露人、罕篤を擒にして至る乃ち罕篤が鎮國公の爵を削り之を車布登に與へ罕篤を誅す三十五年、聖祖親から噶爾丹を征す喀爾喀諸札薩克皆從はんことを請ふ許さず其の從征を許しゝ者は土謝圖汗部に在ては多羅郡王車木楚克納木札勒、輔國公錫布推哈坦巴圖魯、多羅貝勒西第什哩、車臣汗部に在ては汗烏默客、多羅郡王朋素克、札薩克圖汗部に在ては多羅貝勒根敦、輔國公索諾木伊斯札布、袞占、札薩克烏爾占、哈瑪爾岱青、羅卜藏台吉額琳沁、賽因諾顏部に在ては多羅郡王善巴袞布、輔國公旺舒克、阿玉什、札薩克阿哩雅、台吉納木札勒、鎮國公烏巴達等のみ諸軍、克魯倫河に會す噶爾丹懼れて宵遁る大將軍費揚古の軍、之に昭摩多に遇ひ大に之を敗り大軍凱旋す土謝圖汗察琿多爾濟、諸札薩克を隨へ帝を迎へて覲見し捷を賀す明年又親征す未だ干戈を接せざるに噶爾丹

不叛不侵の臣となる

竄死し漠北悉く平く乃ち諸部をして皆其の舊牧に歸らしむ三十年以後、札薩克を授けられし者益〻多く是に至て又有功諸台吉を增封し爵を晉められし者も亦多く三部の札薩克積みて五十五旗に上る因て左右兩翼を改めて東西中の三路に分つ

案ずるに喀爾喀本と兩翼にして札薩克圖汗は杭愛の舊地に居れり蓋し今の賽因諾顏部の大半は札薩克圖汗の所部なるべし而るに土謝圖汗に其の一半を奪はれて右翼は喀爾喀三分の一を有するに過ぎず左右の權衡既に失し札薩克圖汗部遂に一隅に屏息せざるを得ざるに至る是より土謝圖汗中央にありて中路と稱し地域の大、東西兩路に倍せり後日賽因諾顏部大に起り勢力之に移り其の一半を割きて別部と爲すに至るまでの間は實に土謝土圖汗部全盛の時代たり蓋し清廷の之を寵榮する此に至れる者は其の露國に奔らずして兩部に先だち救援を清廷に求めしに因れるなり

是より喀爾喀全部、終に不叛不侵の使となり九白の貢缺くること無くして年班、園班、時を以て必ず至り以て內札薩克に異なること無し而して察琿多爾濟の孫敦多布多爾濟は和碩恪靖公主(康熙帝の女)を尙して和碩額駙を授けられ繼で和碩親王に晉封せられ察琿多爾濟死して敦多布多爾濟、汗位を襲ひ札薩克圖汗策旺札布は縣主を尙し多羅額駙を授けられ亦繼て和碩額駙に晉封せられ三等經車都尉策凌も亦和碩純愨公主(亦康熙帝の女)を尙し和碩額駙を授けられ其弟恭格喇布坦、郡主を尙し固山額駙を授けらる喀爾喀益〻親しくして姻戚となれり然れども敦多爾濟は後、溺職を以て郡王の原爵に復せし

超勇親王

められ汗位は其叔父多爾濟額爾得尼阿海の承くる所となり策旺札布も亦罪を以て其爵を奪はる獨り策凌、從軍功あり寵榮を一身に荷ひ雍正元年、多羅郡王に晉められ恭格喇布坦も亦貝勒に封せらる尋て策凌所部の副將軍を授けられ三年、命じて其の近族親王達什敦多布、貝勒納木札勒、齊素嚕、貝子策旺諾爾布、輔國公阿努理敦多布、額琳沁、札木禪旺札勒、台格木丕勒、齊旺、錫喇札布、達爾濟雅、根敦、車布敦、巴朗、延達博第、泥瑪特、克什、諾爾布札布等凡て十九札薩克を分て別に一部たらしめ復た土謝圖汗部に隷屬せず冠するに其祖賽因諾顏の號を以てし此を喀爾喀中路と稱せしめ前の中路土謝圖汗部を以て北路と稱せしむ喀爾喀此より分れて四大部落となれり九年、策凌、準噶爾を敗り和碩親王に晉められ黃帶を賜ひ喀爾喀大札薩克を授けられ明年、固倫額駙を授けられ超勇親王と號す又明年、定邊左副副軍の印を賜ひ盟長に任じ進みて科布多に屯せしむ後、定邊將軍の軍を撤するに及び策凌獨り副將軍を以て猶ほ烏里雅蘇台に駐す烏里雅蘇台將軍の今に至て定邊左副將軍と稱せらるゝ者は實に此に起因す乾隆十五年、策凌死して太廟に配享せらる蒙古人の太廟配享の典に預る者、前に其例無し而して其の長子成袞札布繼て定邊左副將軍となり次子車登札布亦繼て定邊左副將軍となる清廷、一時、北邊の重任を以て專ら此家に繫ぐ故に其の寵榮、他部の未だ曾て有らざる所たり成袞札布の子拉旺多爾濟、亦固倫和靖公主(乾隆帝の女)を尙し勳戚の隆なる喀爾喀に冠絕す故に今に至りて清廷の重んずる所、內蒙古に在ては科沁爾部たり外蒙古に在りては賽因諾顏部たり此の二者の右に出づる者あらざるなり

私に露國と互市す

案ずるに此外、喀爾喀王公の公主を尙せる者、土謝圖汗部の西第什哩の孫多爾濟色布騰、乾隆中、和碩和惠公主を尙し世子に封せられ桑齋多爾濟を生む乾隆二十年、桑齋多爾濟、親王に晉封せらるる然れども三十年、私に露國と互市せるを以て事發覺し其爵を削られ仍ほ郡王の舊に復す但和惠公主は實は怡親王の女にして乾隆帝の女に非ず

第十七章　昭摩多及び額爾德尼昭の役

（ヘヘヘヘ）新興の活佛

四衛拉特は準噶爾部を以て最も强しとす台吉噶爾丹原と伊犂に居り和碩特の鄂齊爾圖汗を西套に襲殺し其の汗號を奪ひ威名、天山南北兩路に振ふ（事は第四編に詳なり）是に於て帳を阿爾泰山下に移し將に又喀爾喀に事あらんとす然れども未だ際あらざるなり時に喀爾喀唯々喇嘛に心醉し念經拜佛の外、復た弓馬を事とせず噶爾丹是に於て喇嘛千人を放ちて喀爾喀部內に遊牧せしめ以て其間を伺ふ而して喀爾喀曾て意に介せざるなり既にして庫倫伯勒濟爾の盟に哲卜尊丹巴胡圖克圖之に預り達賴喇嘛の大弟子噶爾旦西勒圖と相抗禮す哲卜尊丹巴は喀爾喀斯出の活佛なり噶爾丹幼にして達賴に就き喇嘛の法を修め達賴を尊奉し頗る哲卜尊丹巴を輕視す故に其の不遜を怒り且つ此に藉りて端を發せんと欲し人をして先づ土謝圖汗を詰らしめ故さらに之を嫚罵し以て其怒を激す土謝圖汗察せず大に怒りて其使を殺す噶爾丹是に於て口に藉き事を舉ぐることを得たり因て先づ揚言すらく將に俄羅斯の兵を借りて喀

露兵を藉りて喀爾喀を伐たんとす

南奔して急を清廷に告ぐ

爾喀を攻めんとすと土謝圖汗之を聞き偵探するに竟に其事無し守備益々懈る然れども噶爾丹之を言ふこと已まず喀爾喀詛て問はざるなり噶爾丹乃ち突如として勁騎三萬、杭愛山を踰えて入り直に土謝圖汗部を衝き又哲卜尊巴を額爾德尼昭に襲ふ（此時未だ今の庫倫あらざりしなり）噶爾丹放つ所の游牧喇嘛亦中より起て之に應ず土謝圖汗支ふること能はず倉皇として皆潰ゆ或は露國に走らんと欲す議決せず土謝圖汗其の往く所に惑ひ哲卜尊丹巴が言を聽き（事は既に第一編喇嘛教項下に詳なり）遂に南奔して急を清廷に告ぐ時に聖祖の康熙二十七年（我元祿元年、西一六八八年）なり清廷適々露國と界事を定めんと欲し內大臣索額圖等をして兵を率て色稜格河に赴き露官に會せしむ之に途に遇ふ喀爾喀乃ち聲言す大國の援兵至ると噶丹爾敢て進まず喀爾喀因て漠を渡りて內札薩克界に入ることを得たり而して索額圖等も亦未諭旨を奉せざるを以て亦敢て進まず噶爾丹、其の救援の爲めにして來らざるを知り遂に圖拉河を渡り車臣汗部を侵す清廷、尙書阿喇尼をして歸化城及び獨石、張家二口の倉儲を發し先づ喀爾喀の衆に賑恤し尋て水草佳なる處を視、之を內札薩克界に附牧せしむ噶爾丹使を遣はし印文を齎し好を清廷に通じ併て喀爾喀の衆を逐遣せんことを請ふ清廷因て之を諭して衆を率て西に歸らしめ且つ喀爾喀の侵地を還さしむ是時に當り噶爾丹既に西、回部を收め南、青海を壓し北、哈爾克を服し東、新に喀爾喀を併呑し意氣最も昂れり故に嘗々に清廷の諭に聽かざるのみならず反て喀爾喀の王庭を佔踞し控弦の士十萬を諸屬部より徵し四出して傍近諸部を劫掠す二十九年、露國の使人吉里伊法尼齊等、北京に至る

烏蘭布通の戰

清廷、露人の喀爾喀を助けんことを懼れ之に諭して曰く喀爾喀常に揚言す汝が國の兵を借り來りて喀爾喀を攻めんとすと今、喀爾喀已に我に順服す汝が國誤て喀爾喀が言を聽き同く來りて喀爾喀を攻めば此れ信誓に背きて兵端を開くなり汝等速に善く馳する者二人を遣り急に歸りて尼布楚の頭目に告げ徧く汝が國の衆に諭して之を知らしめよと時に露清新に尼布楚の界約(即ち黑龍江界約)あり露國も亦噶爾丹を助けざりしなり噶爾丹更に銳を盡して東侵し喀爾喀を追ふを以て名と爲し遂に烏爾會河(烏珠穆沁界内)に及ぶ適〻尙書阿喇尼、兵を率ゐて邊に備へ其の喀爾喀の人畜を掠めて過ぐるに遇ひ内蒙古の兵をして之を擊ち喀爾喀をして其の人畜を奪回せしむ喀爾喀利を貪り爭ひ進み陣遂に亂れ反て其の敗る所となる噶爾丹勢に乘りて遂に進み内札薩克界内に入る是時に當りて清廷も亦既に三藩の亂を平げ隴蜀を定め臺灣を收め又露國と結ぶ天下他に患ふ可き者無きなり聖祖是に於て親征を議し撫遠大將軍福全をして左翼軍に將たらしめ皇子允禔を以て之に副とし古北口より出でしめ安北大將軍恭親王常寧をして右翼軍に將たらしめ簡親王雅布、信郡王鄂札を之に副とし喜峰口より出でしむ右翼の兵先づ噶爾丹に烏珠穆沁に遇ひ戰、利あらず噶爾丹益〻深く入り烏蘭布通(克什克騰界内)に至る北京を距ると僅に七百里、乃て右翼の軍を停め別に康親王傑書をして出でゝ歸化城に屯せしめ其の歸路を邀擊せしむ左翼軍、噶爾丹に烏蘭布通に遇ふ噶爾丹、使をして來り言はしむらく我、喀爾喀を追て此に至れるのみ敢て妄に侵略を行へるに非ず請ふ土謝圖汗及び噶卜尊丹巴を執へて我に與へよ我輙ち師を返さんと時に濟隆胡圖克圖も亦使を遣はして來り請はしむること噶爾丹の請の如し濟隆は達賴の遣はす所にして噶爾丹に諭して兵を罷めしめし者なり既に至りて但に噶爾丹を諭止せざるのみならず反て之が爲めに戰日を擇び又專て邊に至らしむ是に由て噶爾丹愈〻恃む所あり險に倚りて營を結び旗を祭り經を誦し勢甚だ猖獗なり八月朔日、裕親王等、兵を列して徐に進む噶爾丹、山下に陣し駱駝萬隻、足を縛して地に臥せ背に箱垜を加へ蒙ふに濕氈を以てし環列すること柵の如くし、士卒、垜際より矢銃を發し又鉤距に備ふ裕親王等、河を隔てゝ陣し火器を以て前列と爲し遙に中堅を攻む交戰晡より暮に至る駱駝多く礮火に斃れ陣斷えて二となる裕親王乃ち軍を分て左右兩翼と爲し右翼は直に前み左翼は山を繞りて横に擊ち遂に大に之を敗る明日、伊拉古克三胡圖克圖、噶爾丹の所より還り亦土謝圖汗及び哲卜尊丹巴を以て之に與へんことを請ふ伊拉古克三は清廷の遣りて噶爾丹に諭して兵を罷めしめし者なり濟隆も亦弟子七十餘人を率て出で此が爲めに講解す噶爾丹因て間を得、營を拔て宵遁れ錫喇穆楞(遼河の西源)を渡り大磧山を越え過ぐる所、草を燒て追崎を絶つ裕親王の軍之を追はんと欲すれども馬力已に疲れ追へども及ばず乃ち濟隆をして往て噶爾丹に諭さしむ噶爾丹、營を設け罪を謝す裕親王頗る此が爲めに說く而して聖祖偶〻少しく不豫なり乃ち博洛河屯より回る信郡王、裕親王が勝に乘りて追剿せず反て蘇爾達等を檄止し邀擊を得ざらしめしを劾奏す然れども聖祖も亦其の功過相兼ぬるを以て其罰を薄くす是歲、達賴喇嘛、唐古特、青海の諸台吉及び噶爾丹を率て尊號を上らんことを請ふ聖

清廷と哲布尊丹巴との關係

祖卻けて允さず

案ずるに噶爾丹の喀爾喀侵略は清廷よりして之を言へば其の貪婪厭くこと無きの慾より出づ然れども深く其源を探るに事多く喇嘛と相關す決して故無くして釁を開きしに非るなり蓋し噶爾丹固より喀爾喀の地を得るに意ありと雖、其の事を擧げし口實は唯〻哲卜尊丹巴が達賴喇嘛に無禮なりしに在り其の口實たるは人々皆之を知る而も濟隆胡圖克圖、達賴が罷兵使と稱せられつゝ啻〻に噶爾丹に說て罷兵せしめざるのみならず反て噶爾丹が爲めに哲卜尊丹巴を執へて送らんことを請ひ清廷の罷兵使たる伊拉古克三胡圖克圖に至るまで亦清廷の爲めに噶爾丹に說かずして反て噶爾丹が爲めに清廷に說き復た一人の哲卜尊丹巴を助くるの口吻を爲す者無かりしは抑〻何ぞや此に於てか知る此役、清廷より之を言へば弱を扶け强を挫ぐの義戰たりと雖、喇嘛の徒より之を視れば直或は噶爾丹に在りて曲恐くは哲卜尊丹巴に在りしことを哲卜尊丹巴今や庫倫活佛の名、蒙古に高く達賴、班禪に伯仲すと雖、當時に在ては猶ほ新出の胡圖克圖たり名位未た然く甚だ高からず而して蒙古人其の地に出でたるを以て貴と爲し尊奉漸く將に隆盛ならんとす由來宗敎は獨尊を以て信念を一に收むるを以て妙と爲し最も異派を生ずるを忌む故に新舊敎派の爭は同敎と雖、往々にして血を流すを見る今哲卜尊丹巴、名位未だ高からざるの新佛を以て名位最高の舊佛と光を爭はんとす其の憎惡を受けしは固より其所なり況や額魯特人は今に至りて入藏熬茶を以て畢生の至願と爲し實に達賴無二の信徒

たるをや殊に噶爾丹が如きは幼にして達賴に就きて喇嘛たりし者、其の達賴に於ける尊奉固より至らざること無かるべくして達賴と對峙する者を忌むことも亦至らざること無かるべきをや其の兵を擧げて之を襲ふも亦故無きに非るなり且つ此時、第五輩達賴、實は已に死して其の第巴桑結、獨り威福を擅にし達賴の名を借りて其の勢を張らんと欲す因て窃に噶爾丹を煽動し哲卜尊丹巴に甘心せんとせし形蹟無きに非ず濟隆胡圖克圖、達賴の使と稱すと雖、其實、第巴桑結が達賴の旨を借りて遣しゝ所たるに過ぎず其の噶爾丹を助けて哲卜尊丹巴を得んと欲せしは此が爲めのみ伊拉古克三に至ては既に胡圖克圖と稱せらる亦一活佛たり多く哲卜尊丹巴に讓る者に非ず而して達賴に於ては其の頂禮する所、清廷の罷兵使たりと雖、哲卜尊丹巴が達賴と抗禮せんとするを聞くに及びては反て其の不遜を咎めて噶爾丹が言に聽かざるを得ざりし者あらん濟隆、伊拉古克三と哲卜尊丹巴とは俱に黃敎の胡圖克圖たり而も相助けざるの意蓋し此の如し故に當時の喇嘛は蒙古喇嘛を除く外、皆哲卜尊丹巴に左袒せずして殆ど噶爾丹を庇護するの勢あり噶爾丹が罪を免かれしを喜び西藏、青海の諸喇嘛に至るまでを均しく聖祖に尊號を上らんと欲せしが如き此れ以て當時の狀を概見すべきなり然りと雖、噶爾丹をして一毫も私心を挾むこと無からしめて然して後に始て哲卜尊丹巴が罪を問ふ可きのみ則ち清廷も亦哲卜尊丹巴を助くるに辭無けん而るに噶爾丹因て以て喀爾喀に估據せんとす此時若し清廷をして其の言ふ所に聽き土謝圖汗及び哲卜尊丹巴を執へて之に與へしめば此れ乃ち豺

狼の腹を肥す者のみ故に之に聽て輙ち與ふること能はず而も喇嘛已に中に居る故に又之を究追すること能はずして其の遠颺に任せ信郡王の効奏ありと雖、功過相兼ぬるを以て辭と爲し裕親王を罰責せず此れ亦已むことを得ざりし時局なり是より前、喀爾喀、好を清廷に通じたりと雖、固より其の心服に非ず是に至て哲卜尊丹巴一言して喀爾喀の去就決し噶爾丹の難、清廷に因て以て之を脱することを得たり是より喀爾喀人の哲卜尊丹巴を尊信する蓋し一倍を加へ其の清廷に結ぶこと益々鞏固なるを致す喀爾喀、益々清廷に結ぶこと益々鞏固にして清廷の哲卜尊丹巴を優禮するも亦益々隆厚至らざること莫し蓋し喀爾喀の清廷に結ぶは準噶爾の侵略を恐るゝが爲めなり清廷の哲卜尊丹巴を優禮するは其の露國に向はずして內附の途を指導せんが爲めなり而も其事相因り以て哲卜尊丹巴が名を成すに至る何とならば清廷の同敎依る可きの實は益々蒙古人をして活佛先見の明を感せしめ清廷優異の禮は又蒙古人をして哲卜尊丹巴と達賴、班禪と殆ど伯仲の間に在り自餘胡圖克圖の遠く及ぶ所に非るを思はしむ是に於て哲卜尊丹巴が聲名、一時に喧聒し無知の輩をして一犬虛に吠えて萬犬之に應ぜしむ其の崇敬を受け俄に達賴、班禪と隆を比するに至れる者は主として此に由る始より今日の如く盛なることを得し者にあらざりしなり是を之れ察せずして此役の情形を視ば疑を當時の事に致さゞる者少からん故に今聊か當時の情形を論じ以て讀者の參考に資す

噶爾丹既に遁る然れども多く軍士を失ひ悉く輜重を棄て沿途飢渴し能く科布多に還れる者は僅に數千

人のみ故を以て數年出でず三十四年に及び始て復た喀爾喀を侵し巴顏烏蘭に至り秋より冬に至り之に踞して去らず遂に過冬の計を爲し屢々清廷に向て土謝圖汗を逐て故土に遣還せんことを請ひ又書を內蒙古各部に貽り誘て已に歸せしめんとす科爾沁親王沙津、園場に來觀し具に其の已に勸めて內應を爲さしめ將に又入寇せんとするの狀を言ふ聖祖乃ち沙津に命じ僞て此と內應を約し其兵を誘致し以て一舉に之を斃さんことを欲し豫め士馬芻糧を調して待つ然れども噶爾丹既に前敗に懲り敢て深く入らず是年、內大臣費揚古に右衞將軍を授け兼て歸化城を管せしめ繼て又撫遠大將軍を授け將に明年大に出でゝ歸蕩を行はんと欲し之を召して入覲せしめ親しく方略を授く三十五年三月、聖祖躬から大軍を統べ獨石口より中路を出で黑龍江將軍薩布素に命じ東三省の兵を率ゐ東路より出でゝ其衝を遏めしめ撫遠大將軍費揚古に命じ振武將軍孫思克、西安將軍博濟等をして陝甘二省の兵を率ゐ西路寧夏より出て歸化城に會し其の歸路を要せしめ期を剋して之を夾攻せんとす途にして噶爾丹の騎三萬、俄羅斯の兵六萬を借りて至ると傳ふる者あり內大臣索額圖、大學士伊桑阿等、回鑾を奏請す聖祖聽かず四月下旬、中路の軍已の西巴爾台に及ぶ噶爾丹時に克魯倫河に在り相距ること僅に五日程のみ而して西路の軍未だ至らず初、出師を議せし時、西路の兵は西安の滿兵三千、漢軍千、河西提督及び四鎭の兵六千を與し旗營は將軍博濟之を領し副都統四人之に佐とし綠營は將軍孫思克之を領し涼州總兵董天成、肅州總兵潘育龍之に佐とし別に騎卒三千、寧夏鎭の總兵殷化行之を率ゐ三月中旬を以て肅州の鎭彛鎭より出

て黒河に循ひ昆都倫一路より進發せしめんとす而して孫思克以爲らく二月朔漠猶ほ寒く青草未だ生せず馬を飼ふに由無し請ふ緩めて四月に至らんと殷化行は云ふ甘州より昆都倫に趨かば恐くは西に偏して噶爾丹と相逢ふこと能はじと議上る清廷改めて寧夏より出でしむ但四月進發は期太だ遲し當に三月初旬を以て兵を出すべしと令す既にして諭旨重ねて至る云く大將軍費揚古將に二月二十日を以て京師を發せんとす孫思克等も亦應に相前後して寧夏を發し途にして之に會すべしと師期俄に迫りて遠鎭の兵未悉く至らず芻糧の物亦未だ多く集まらず辦備頗る苦しむ期至る博濟、滿漢軍三千、孫思克所部一千八百先づ發し、董天成が一千二百、潘育龍が一千相繼て發す二十五日、殷化行、將校三十五員、騎卒三千、餘丁千五百、廝養數百を率ゐ四營に分れ後より進む四月四日、郭多里に至れば太將軍已に前に之を過ぎたり乃ち道を倍して行く才壁、水に乏しく青草未だ生せず馬相繼で踣る會々大風雨あり己に一連數日、寒くして且つ飢え士卒も亦道に斃るゝ者相枕藉す孫思克乃ち精卒を選び糧と馬とを減じて行く麾下僅に四百人、凉肅二鎭の兵共に三百人のみ又殷化行に檄して其の兵の半を減せしめ五百騎を留め滿兵五百人と俱に甕金河に屯して軍糧を守らしむ故を以て期に後れて會す議者或は云ふ宜しく西路の兵至るを待て會勦すべしと內大臣富善隨て軍中に在り奏して曰く西路の兵至る尙ほ時日を需つ賊如し風を聞て奔らば恐くは及ぶこと無からん宜く速に出でゝ其の不備に乘ずべしと聖祖之に從ふ車木楚克納木札勒所部の卒齊旺朋素克、阿玉什の屬齊旺齊呼蘭等を選びて敎導とし以て進む五月、克魯倫

施諾山

昭摩多の會戰

河に及ぶ對岸は則ち噶爾丹が營なり聖祖其の必ず遁れんとするを慮り朋素克及び錫布推哈坦巴圖魯等を遣り巴爾岱哈山麓より往て之を誘はしむ至れば則ち河化已に一帳無し聖祖親から前鋒を率て之を追ふ三日、施諾山に至る既に遠く去れり乃ち大旆を回し別に內大臣馬思哈を遣りて速に追はしめ明珠をして中路の糧を轉じて以て西路に接濟せしむ噶爾丹、聖祖の軍容の盛なるを望み懼れて逃れ奔馳すること五晝夜、將に施諾山に據て一戰せんと欲す何如ともする無し衆奔りて止まず沿途、老弱輜重を棄てゝ走る噶爾丹已むことを得ず將に科布多に歸らんとす而して西路の軍、正に之に昭摩多に遇ふ昭摩多の地は土謝圖汗部界、汗山の東、土拉の邊に在り西路寧夏の軍既に行くこと數日にして始て大將軍に會し五月四日、土拉河に至り十三日、昭摩多に至る時に噶爾丹が兵は特勒爾濟に在り相距ること二十里、其軍一萬に逾えず然れども皆百戰精銳の士なり而して西路の軍は遠行新に至り士馬困頓、徒步せる者多し大將軍費揚古以爲らく今馬力既に疲れ馳擊すること能はず客を轉じて主と爲し佚を以て勞を待つに非るよりは與に强を爭ひ難しと乃ち止まりて營す其地、北に大山あり壁立千仞山、下は平川廣さ數里、林木森鬱、河水其間を流れ曲折環繞す其南は山差々北より低く小山ありて前に橫はれり高さ凡そ二十仞、西より上れば三層にして頂に達し東より上れば崖僅に一層、費揚古乃ち前鋒統領碩岱をして兵四百を以て戰を挑ましめ且つ戰ひ且つ卻き以て之を誘ひ孫思克は東に陣して高阜に據り總兵康調元は土拉河に沿て西に陣し步列して以て待つ噶爾丹果して勝を恃みて前み衆を率て將に小山を

爭はんとす適々礮未だ至らず費揚古、孫思克將に來日を以て戰はんとす殷化行後れて至り問て曰く敵何くにか在ると孫思克鞭を擧げ指して曰く前山を踰えれば則ち敵なりと殷化行、大將軍に謂て曰く明日を待ちて此山如し賊の據る所とならば我、其下に營せざるを得ず而も可ならんや大將軍の曰く敵甚だ近し爾能く夜此山を守らんか曰く願くは之を守らんと鞭を回らして一麾すれば其衆皆上る始て山頂に達すれば敵も亦將に登り爭はんとす然れども既に殷化行に先んぜられ遂に東崖の下に在り崖を以て蔽と爲し礮を發して上擊し銳きこと甚し殷化行士卒をして皆馬を下らしめ一卒、五馬を併せて之を牽き餘卒は皆出て〻戰はしむ孫思克、綠營の兵を率ゐ專ら其鋒を迎へ子母礮を發して下擊す此役、橫に戈壁を度る故に巨礮を運すること能はず獨り子母礮を備ふ既にして烏槍弓矢齊く發し薛犀之に次ぎ進む每に拒馬木を前に列て自から固む而して噶爾丹善く戰ひ其妻阿哈屯と矢礮を冒して屢戰し未より酉に至る殺傷相當り勝敗俄に決せず費揚古命して角を鳴らさしむ士皆馬に上り一は柳林を出で〻橫に其脇を衝き一は繞りて其背を襲ひ其の輜重を劫す敵顧て擾動す因て大呼して進む敵遂に大に亂れ伏屍麻の如し日暮る月下追擊三十里、天明て軍を收む斬首數千級、生擒數百人、牛二萬餘、羊四萬餘、馬駝軍資等無し阿努哈屯、亂軍の中に斃れ台吉、宰桑の陣歿せる者、勝て計ふ可らず而して費揚古が軍に投じて降れる者二千餘人、馬思哈が軍に投せる者五百餘人、噶爾丹僅に數十騎と偕に遁し去る乃ち索諾木伊斯札布、哈瑪爾岱青、烏巴達、阿哩雅等をして昆都倫、額濟納河等の處に赴き分路追緝せしめ

大軍凱旋す聖祖旆を回して二十八台に至り捷報方に達す乃ち侍衞を遣りて將帥を迎勞せしめ軍遂に歸化城を過ぎり親しく西路の將帥を犒て還る內外諸札薩克皆迎て捷を賀し諸部の衆、沿途膜拜泥首せざる者莫し此を昭摩多の役と爲す

案ずるに此役、噶爾丹、兵を出すに名無し故に喇嘛も亦口を噤みて此が爲めに說くこと能はず而して噶爾丹が襲くこと無きの慾、終に掩ふ可らず聖祖の軍、是に於てか始て其名の正を得たり勝使を得たる所以も亦此に由らずんばあらず

因に云ふ此役、中路の軍は獨石口より出で其の糧道は古北口より台站を設けて轉運す然れども其の台站は回旆の後廢撤して幾台を設けたりしか詳ならず唯々其の十八台以北は積沙、山の如くにして糧車、沙に入こと尺餘、細柳を伐り束ねて地に敷き以て推輓に便にしたりと云ふ又西路は歸化城より推河に至る二千餘里の間に三十餘驛を置く此も亦後來阿爾軍泰路の開くると偕に廢し今唯々其の名を知るべきのみ

第一台 昆都倫　第二台 克楚　第三台 愛畢哈
第四台 齊吉爾罕　第五台 特穆爾　第六台 布爾哈蘇台
第七台 烏浪額魯吉　第八台 固爾班哈沙圖察罕　第九台 蝦蟆爾
第十台 烏尼圖　第十一台 波羅蘇海　第十二台 察罕額爾吉

第十三台　馬　尼　圖　第十四台　鄂　什　喜　第十五台　家　哈
第十六台　巴　爾　哈　遜　第十七台　搜　吉　第十八台　察　布　雀　爾
第十九台　格　得　爾　固　第廿台　郭　多　里　第廿一台　奔　巴　圖
第廿二台　額　爾　伊　圖　第廿三台　奎　騰　第廿四台　巴　札　爾
第廿五台　泥　楚　滾　第廿六台　庫　爾　奇　勒　第廿七台　圖格里克達罕
第廿八台　哈　喇　尼　屯　第廿九台　烏　納　格　烏　蘇　第卅台　昏　鄂
第卅一台　空　兀　勒　第卅二台　塔　奇　第卅三台　西　拉　布　里　都
第卅四台　阿　爾　博　爾　濟　第卅五台　博　濟　和　碩

故に聖祖の回施廿八台に至るとは哈喇尼屯に至れるを云ふ哈喇尼屯は即ち今の阿爾泰軍台路の哈喇尼敦なり

噶爾丹西走し塔米爾に至る諸台吉來り及ぶ然れども牲畜皆失し食を取る所無し是に於て僧に往く所を議す噶爾丹は翁金河に往んと欲し丹濟拉は阿爾泰に往んと欲し阿拉布坦、丹津俄木布等は露境に奔らんと欲し議終に成らず適〻丹津俄木布の屬、噶爾丹部下の羊馬を盜む噶爾丹之を責む因て丹津俄木布と相好からず丹津俄木布叛き去る唯〻丹濟拉、阿拉布坦兩人之に隨ふ然れども所屬多きも千人に過ぎず少きは僅に數百人のみ大軍既に回りし後、翁金河に猶ほ餘糧あり噶爾丹之を聞き丹濟拉をして來り

策妄阿拉布坦

掠めしめ以て冬を度るの計を爲さんとす副都統祖良璧、護糧兵千餘人を率ゐ之を夾擊す丹濟拉路を奪て遁げ去る聖祖之を聞き勢に乘りて遂に之を滅さんと欲し九月、再たび歸化城に幸し議政大臣馬思哈等之に隨ひ其事を經理し青海の諸台吉及び策妄阿拉布坦等に檄諭し協力して噶爾丹を擒にせしむ策妄阿拉布坦は噶爾丹か兄僧格の長子なり初、僧格死す噶爾丹、西藏より歸りて自立し策妄阿拉布坦が聘定の女を奪ひ又其弟を殺す策妄阿拉布坦之を怨めども敵すること能はず其父の舊臣七人と部衆を率て遠く額琳哈畢爾噶に徙り後、博羅塔拉に移る噶爾丹か喀爾喀を敗りしや漠北の地を戀て久しく其帳に歸らず策妄阿拉布坦間に乘りて七人と潛に科布多に入り其帳を襲ひ牲畜妻孥を掠めて去る故を以て交〻惡し噶爾丹の昭摩多に敗れしや精銳皆盡き牲畜悉く失し回部青海諸屬部の衆、亦皆叛き散す是に於て噶爾丹阿爾泰に歸らんと欲すれば策妄阿拉布坦が逼らんことを畏れ喀爾喀を掠めんと欲すれは備あり て敢てせず其子を遣りて達賴に使せしむれば途にして副都統阿南達に擒せらる而して台吉阿玉奇、額爾克巴圖等皆清廷の檄を承け策妄阿拉布坦と僧に之を執へて以て功と爲さんと欲す噶爾丹窮蹙して往く所を知らず遂に白格爾の西に向て去る明年、聖祖又寧夏に幸し復た費揚古、馬思哈等に命し將に再たび兩路より出てて之を征せしめんとす四月、寧夏より塞を出て人毎に四月の糧を裹ましめ深入して噶爾丹を捕へ必す得て而後に止むを期す時に噶爾丹、薩克薩呼里克に在り野獸を獲て食に供す野獸盡きて給を取る所無きも終に降意無し左右親信の者皆怨言を出す而して大軍又至ると聞き前後風を望

て欵附し甚しきは密に教導を爲さんと欲する者あるに至る是に於て阿拉布坦、丹津俄木布は往て策妄阿拉布坦に投し丹濟拉は遂に降を清廷に乞ふ噶爾丹爲す所を知らず藥を仰て死す丹濟拉、其屍及ひ其女鍾濟海を携へ將に來り献せんとす策妄阿拉布坦之を途に奪ふ丹濟拉衆を率て降り阿拉布坦も亦繼て降る大軍行て郭多里に至り噶爾丹か死を聞き遂に悉く其の餘衆を降す是に於て漠北悉く定まりて喀爾喀部以て舊牧に歸ることを得、哲卜尊丹巴是より汗山の下に移り木城を建てゝ居る即ち今の庫倫なり、而して阿泰爾以東、喀爾喀舊遊牧の至らざる所に及ぶまで士倫の内に入り西境計らずして拓くること千餘里、是より喀爾喀、事無きを得し者、三十餘年にして又額爾德尼昭の役あり

噶爾丹死して準噶爾、主無し策妄阿拉布坦坐なからにして之を奄有し外、恭順を示し内大に爲すこと有らんとするの志あり然れども清廷、其の曠遠なるを以て暫く之を度外に置き因て之を撫馭して恩賚加はることあり而して策妄阿拉布坦一意、餘燼を收拾し完聚補繕、數年にして又西陲の一大部となれり是に於てか漸動くいて復た邊境を騷擾す清廷も亦此が爲めに備を設けざるを得ず康熙五十六年、内大臣傅爾丹に振武將軍を授けて阿爾泰に駐せしめ尚書富寧安に靖逆將軍を授けて巴里坤に駐せしめ散秩大臣祁里德に協理將軍を授け西路に在て策應せしむ是より前、宗室費揚古（曾て撫遠大將軍たりし人に非す費揚古は滿洲語季子に義にして滿人に此名多し相混ず可らず）奏す烏蘭古木等の地、以て喀爾喀の屯田を興す可しと既にして都統穆賽も亦奏す烏蘭古木は新設汛界の外に在り耕種に便ならず科布多、布延圖郭勒等の處、耕種收獲甚た多し應に粁糧田器を預備し之を傅爾丹に給ひ土默特人一千及ひ出征歸化城の土默特兵一千を率て往て耕種せしむべしと乃ち傅爾丹をして往て屯種せしむ遂に是命あり明年、傅爾丹に命し科布多、烏蘭古木兩處に城を築き驛を設けしむ既にして傅爾丹以爲らく科布多の地は大河に隔てられ木材を得ること難し唯〻鄂勒錐圖郭勒及ひ察罕庚爾の兩地、最も築城に適すと奏請して改めて鄂勒錐圖郭勒、察罕庚爾に各一城を築き兩城の間に十一站を設く然れども策妄阿拉布坦が一世、復た敢て阿爾泰以東を侵さつりき雍正五年、策妄阿拉布坦死し其子噶爾丹策零嗣く準噶爾部、噶爾丹以來皆善く兵を用ゐ桀猾にして四方を侵略す噶爾丹策零に至りて兇狡、亂を好むこと其父に過ぎたり常に兵を集めて以て邊疆を伺ふ七年、清廷復た傅爾丹を以て靖遠大將軍と爲して阿爾泰に駐せしめ岳鍾琪を以て寧遠大將軍と爲して巴里坤に駐せしむ初、聖祖準噶爾を滅さんと欲して果さず世宗位に即て復た先緒を繼がんと欲す而して噶爾丹策零新に立つ世宗其の新立、未た固からざるに乘りて之を覆さんことを計る諸臣多く以て時未た至らずと爲す獨り張廷玉、帝を慫恿し爲めに傅爾丹を薦む傅爾丹美鬚髯、容儀頗る古名將の風あり世宗悅ひ大將壇を築て之を拜し纛を堂子に祭て出づ從征せる者は副將軍查弼納、巴賽、副都統豪、海蘭、西彌賴、定壽、蘇圖、瑪爾濟、侍郎永國、塔爾岱滿洲及ひ綠營の兵五萬、諸蒙古、鞚を執て之に從ふ八年、傅爾丹、前鋒統領定壽、副都統瑪爾齊等を遣りて兵を伊克斯諾爾に屯せしめ以て準噶爾の衝を遏めしめ札薩克圖郡王格勒克延丕勒、輔國公通謨克

和通泊の敗

をして兵千人を以て塔爾弼阿嚕諾に赴き之を助けしむ清廷、別に滿洲蒙古の軍一萬一千を調して瀚海に赴き以て內蒙古の遊牧を衞らしむ九年四月、傅爾丹進て城を科布多に築く噶爾丹策零に二將あり皆策零敦多卜と名づく故に大小を以て之を分つ大策零敦多卜善く謀り小策零敦多卜善く戰ふ六月、噶爾丹策零大小策零敦多卜をして兵三萬を率て來り犯さしむ先つ諜者をして來り伺はしめ佯て俘となり因て詭言せしむ準噶爾の兵大末た至らず唯〻先鋒千餘、駝馬二萬のみ已に至りて博克托嶺に在りと程を計るに相距ること僅に二日行のみ傅爾丹之を信し兵四千を遣り迎へて之を襲はしむ大小策零故さらに兵を少くして之を誘ひ二萬の衆を谷中に伏せ高きに乘りて突出す傅爾丹が軍、和通呼爾哈諾爾に陷る（諾爾は科布多城の西二百里に在り）敵進て之を圍む傅爾丹之を聞き兵六千を發して往て援けしむ兵既に接して風沙、日を蔽ひ降雹大さ牛首の如し定壽矢に中りて死し蘇圖、西賴彌皆陣歿す參贊陳泰先つ逃れ敵追て直に大營に迫る傅爾丹、蒙古兵をして之を禦がしむ定制、科爾沁部は紅纛を樹て土默特部は白纛を樹てゝ幟と爲す時に科爾沁王、纛を假せて先つ遁れ土默特公沙津達賴身を奮て敵に入る衆、白纛の敵中に在るを望見し驚て曰く土默特兵敵に陷ると遂に大に潰ゆ傅爾丹擧止、措を失ひ唯〻滿洲の士卒を勵まして曰く愼て家聲を墜すこと勿れと故を以て滿洲兵四千、輜重を護衞し且つ戰ひ且つ退く哈爾納河を渡る敵追り至る永國、戴豪、海蘭皆戰て死し傅爾丹、士伍に雜りて遁る査弼納、巴賽等、傅爾丹を索むれども得ず以爲らく傅爾丹已に死すと皆敵に赴て死し達福も亦軍に殿して退き追兵の殺す所となる達福は初、戰を諫めし者なり唯〻塔爾岱一人、鋒鏑を冒し從容として獨り返れるあるのみ世宗之を聞き傅爾丹を降して振武將軍と爲し仍ほ留りて科布多に駐せしめ順承郡王錫保をして代て大將軍たらしめ陳泰を斬りて其罪を正し科布多の大營を移して察罕廋爾に置き土謝圖親王丹津多爾濟に命し錫保に隨て察罕廋爾を防護し科布多軍の後援たらしめ又馬爾賽に撫遠大將軍を授け出てゝ歸化城に駐し遙に聲勢を張らしむ十月、額駙策凌、察罕廋爾より進み準噶爾を擊つ時に大策零は華額爾濟斯に在り小策零は喀喇額爾濟斯に在り俱に喀爾喀を掠みんことを謀る然れども錫保、傅爾丹が猶ほ重兵を擁するを聞き敢て輕々しく進まず潛に海倫曼濟等をして道を河爾泰以東に取り精騎六千を以て徑ち克魯倫河及ひ鄂爾海喀喇烏蘇を分掠せしめ大策零自から二萬餘騎を擁し蘇克阿勒達呼より繼て進む額駙策凌、丹津多爾濟等と兵を合て迎擊し鄂登楚勒に至り台吉巴海に兵六百を授け宵、敵營に入らしめ三人を擒にして還り豫め兵を伏せて待つ敵將貢楚克札布、喀喇巴圖魯等果して騎三千を率て來り追ふ伏兵發して之を擊ち其の驍將喀喇巴圖魯を斬る餘衆皆潰ゆ大策零及ひ海倫曼濟等皆遁れ去る時論以爲らく推河、翁金河、拜達里拉河三處、皆要地たり宜しく各〻一城を築き大營と相掎角せしむべしと十一月、三處の城垣を修めしめ馬爾賽をして兵を率ゐ移りて拜達里克を守り以て山南の衝を扼せしむ

案するに推河は賽因諾顏部中右旗界に出で翁金河は其右翼中左旗界に出て拜達里拉河は其右翼右後旗界に出て俱に抗愛山南に在りて南流す推河は昭摩多の役に設くる所の台站の盡處、翁金河は當時

軍糧の收貯地而して拜塔里克河は庫倫伯勒濟爾會盟の所たり俱に喀爾喀部の要地にして是時拜塔里克にも屯田を置かれなるべし雍正十年錫保の奏に既に鄂爾昆、札克拜塔里克等處屯田、收穫大小麥、蔾子九千四百石有奇とあり鄂爾昆屯田は土謝圖汗部に在り科布多屯田と同時に設けられ均しく振武將軍の策下に屬す但三處の城、翁金は土少く沙多くして城を築き難きに因て遂に其工を停むと云ふ

十年六月、小策零又三萬の衆を糾合し奇蘭より入りて額爾德畢喇色欽に至り潛に哲卜尊丹巴胡圖克圖の地を掠む是より前哲卜尊丹巴は已に避けて漠南多倫諾爾に在り故を以て得る所無し額駙策零、將軍塔爾岱と俱に之を禦きて本博圖山に赴く未た至らざるに敵突として策凌の帳を塔米爾河に衝き盡く其の畜產を掠めて去り其の一妾二子も亦得る所となる策凌、中途にして之を聞き急に馳せ返る至れば則ち妻孥畜產既に一空にして帳廬洗ふが如し倉卒の間、計の出てん所を知らず適〻理藩院の侍郎綽爾鐸、兵餉を運して至る策凌告くるに故を以てし且つ奔りて清廷に訟へんと欲す綽爾鐸笑て曰く余素と豪傑を以て王を待つ今何ぞ此の下策に出でんとするや朝廷方に王を恃みて以て賊を辦ず今妻孥盡く失すと雖、勁卒尙ほ在り王若し諸部を統率して力を竭して敵に向ひ其の歸路を遏めば一戰、功を成て妻孥全くすべく封疆復す可し而るに大計を顧みず單騎朝に歸せば知らざる者必す王を以て敗績すと爲し收めて廷尉に付し律を按し科を定めば吾恐くは漠北は復た王の者に非じと策凌大に之を然りとして曰く男兒一腔血應に諸顏が爲めに傾倒すべきのみと諸顏は長上の稱なり乃ち決然復讎を以て念と爲し急に大

將軍に報じ馬に策し間道より繞りて敵の背後に出づ時に小策零飽くまで劫掠し意滿ち心驕り酣飲作樂復た備を設けず策凌は黎明之に乘りて迫り擊つ然れども孤軍にして後聯無し克爾森齊老圖に至り相拒くこと二日、援軍至らば轉戰十餘次にして遂に額爾德尼昭に至る此地や西爾哈阿濟爾罕山の西麓、鄂爾昆河の側に在り右は山に阻し左は水に偪り道狹くして大衆を容れず而して額爾德尼昭（即ち大喇嘛廟、哲卜尊丹巴の舊居、昭は西藏語寺廟の義）其間に横はり敵、走路無し策凌衆を麾て右山より馳せ下り疾きこと風の如し帽を地に擲て曰く賊を破らずんば復た冠せじと衆之に隨ひ一、十に當らざること無し敵、倉皇として人馬踏踐し爭て河を渡り擠排して溺死する者半、小策零夜に乘り山を繞り推河に出て輜重牲畜を棄てゝ遁る策凌又急に馬爾賽に檄し之を拜達里に邀擊せしむ時に拜達里克城中、兵一萬三千、僅に數千を發して其の歸路を遮るも猶ほ敵をして殆と一騎も返ることを得ざらしむべし而して馬爾賽檄を信せず日に置酒高會し復た軍事を理せず副將軍達爾濟兵を整へて命を請へども許さず副都統傅鼐跪求すれども亦應せず將士城に登て之を望めば敵騎の過くる者、亂鴉の林に投ずるが如く復た行列無し將士皆功名を思ひ慷慨して刀を拔き柱を斫り甚しきは涕泣する者あり然れども都統李杖馬爾賽の意を承け鞭を揮て曰く堅く關を閉ぢよ敢て越えん者は斬らんと明日、將士自から禁ずをこと能はず命を禀けずして門を開き出でて敵を追ふ馬爾賽已むことを得ず始めて追賊の令を下す然れども小策零已に前隊より過ぎ去り尾追せし所の者は僅に其の零騎のみ唯〻札薩克圖汗部の格埒克延丕勒の

み兵を引て拜達里克より追て哈琳城に至り復た布克哈喇より追て烏蘭布拉克に至り斬馘數百、其纛を奪ひ又其の庫爾圖勒に走るを偵ひ夜之を攻て四百餘級を得たり賽因諾顏部の札薩克格木丕勒、克爾森齊老圖の役に力戰して創を被むり察罕廋爾の大營に歸り創少く癒え輙ち敵を擊たんことを請ふ大將軍之を壯とし兵三千を授く格木丕勒乃ち喀喇阿濟爾罕より餘寇を追て阿爾泰を越え畢濟嶺に至り及ばずして歸る此れ額爾德尼昭役の梗概なり

是役や大將軍始より備無し奏して萬人を調して烏孫珠勒に赴て邀擊せしむと稱するも其の實は三千に過ぎず又兵を領せる將軍傅爾丹を大營の中に留めて出さず敵をして險を踰えて東に趨かしむるを致し策凌が報を得るに及び始て丹津多爾濟をして克爾森齊老圖に赴援せしむ而して丹津多爾濟も亦吝且逡循、行くこと未た十里ならずして兵を駐めて進まず故を以て策凌をして久しく後繼の兵無きに苦しましむ額爾德尼昭に戰ふに及び丹津多爾濟二萬の衆を擁すれども之を夾攻せず敵、杭愛山陰より繞りて遁去すれども亦之を尾擊せず反て山陽より迂回し敵の已に遠く颺れるを偵知し始て馳せて大に敵衆を敗りしを以て入奏し濫りに智勇親王の榮號を盜み黃帶を賜はり盟長を授けらる又、傅爾丹札薩克圖汗策旺札布に檄して協擊せしむれば策旺札布初て敵と相合て風を望て潰奔し復た軍營に歸らず匆遽、內地に移入し反て屬下の衆を縱て運糧を劫取せせしめ賽因諾顏部長親王喇嘛札布も亦故に託して私に游牧に歸り敢て赴き戰はず既にして事皆發覺す世宗怒りて馬爾賽、李杖を斬り順承親王（前に郡王たり

舊阿爾泰軍路

此時親王に陞封せらる）及び傅爾丹を貶黜し策旺札布、喇嘛札布の爵を削りて永遠に監禁し丹津多爾濟は爵を貶し賜號及び黃帶を褫奪せらる獨り策凌のみ大功を以て固倫額駙を授けられ又超勇の榮號を賜ひ其の轉戰、牧地を離れ多く畜產を失へるを以て馬二千、牛千、羊五千、銀五萬兩を賜ひ且つ命じて城を塔米爾の牧地に築かしめ瓦屋を建てゝ之に居らしむ皆諸蒙古の未だ曾て有らざる所の寵遇なり是より前、察罕廋爾の地、柴草に乏しく大軍を駐し難きを以て既に大營を阿勒達爾托羅海に移せり是に至りて更に烏里雅蘇台に移し明年、平郡王福彭を以て定邊大將軍と爲し順承親王錫保に代りて烏里雅蘇台に駐せしめ城垣を修め倉庫を設け察罕廋爾の米糧錢穀、軍裝火藥を運して之に充實せしめ策凌に定邊左則將軍の印綬を授け進で科布多に屯せしむ是より準噶爾復た敢て喀爾喀を侵さず尋て來て和議を請ふ然れども淸廷も亦敢て輙く守備を弛めず十三年七月、鄂爾昆河、額爾德尼昭以北に一城を築き之を阿爾泰新城と稱す張家口より鄂爾昆に至るまで大站二十九、腰站十六を置き以て阿爾泰新城に達す此を舊阿爾泰軍台路とす

案ずるに此軍台路と驛站甚だ異なり其の二十一台以南は較〻相似たれど二十二台以北は全く相同からず蓋し驛站は水草を得るに便なる處に置くを以て時に移轉あるを免れず且つ二十二台以北は少しく東折して阿爾泰新城に向ふが故に今の烏里雅蘇台に向ふ者と同一なること能はざるは理の當に然るべき所たり其の驛名は口北三廳志に見ゆ今其の二十二台以北の驛名を擧げて之を示

喀爾喀四部の統率

喀爾喀と清廷との接近は準噶爾戰爭に原因す

さん

第二十二台桃里　第二十三台哈桃圖里克

第二十四台哈拉託落海喀淳　腰站察罕烏蘇

第二十五台哈拉哈什圖　腰站柴達木

第二十六台狐吉爾圖狐都克　第二十七台木狐爾土魯

第二十八台庫克賽爾　第二十九台狐克深鄂爾坤

阿爾泰新城

此の軍台路は張家口上堡より阿爾泰新城に至るまで計程二千二百七十六里なりきと云ふ

明年即ち乾隆元年、遂に大軍を撤回し獨り策凌を留めて猶ほ喀爾喀兵一千五百を統べ烏里雅蘇台、鄂爾坤兩城を總管せしむ定邊左副將軍の烏里雅蘇台に駐紮し喀爾喀四部落の兵を統率すること此に始まる後數年、使命往返屢次にして而して後に準噶爾の和議成り(事は第四編に詳なり)喀爾喀復た北路の患無く哲卜尊丹巴胡圖克圖も亦是に於て始て多倫諾爾より庫倫に歸ることを得たり

案ずるに北路の役、其の因て起る所、大抵準噶爾の貪婪厭くことを知らざるに出づと雖、一面又其の尊奉する所の相異なれるに由らずんばあらず故に其の喀爾喀を襲ふや必ず哲卜尊丹巴が帳を劫す者は啻々に其の蓄積の財を奪はんが爲めのみならず其の新出の活佛を以て獨り覇を漠北に稱し雄を

西藏諸佛に競ふを憎みてなり故に前の哲卜尊丹巴已に死して新哲卜尊丹巴之に代ると雖、準噶爾の此心終に少くも變せず蓋し其人を憎むに非ず其の別に一派を立つるを憎めばなり而して哲卜尊丹巴之を懼るゝと虎の如く前の哲卜尊丹巴が再たび舊牧に歸るや復た額爾德尼昭に居らず汗山の下に移り木城を建てゝ居り(即ち所謂る庫倫)新哲卜尊丹巴に至りても亦準噶爾の侵來を聞きて先づ奔り其の多倫諾爾に居るや清廷爲めに獨石口協營の把總を派遣し兵を率て汛地を警衛せしむ此れ皆準噶爾に備へし所以にして準噶爾來侵の必しも劫掠の爲めのみならざりし證左なり故に準噶爾の和議成りて哲卜尊丹巴始て庫倫に復すること得しのみ蓋し清廷の活佛に於けるは達賴班禪と哲卜尊丹巴とを擇ぶこと無く來る者は皆之を優禮す要は唯々此を以て諸屬邦を羈縻せんと欲するに在るなり哲卜尊丹巴、心を清廷に寄せて喀爾喀も亦心を清廷に寄せ哲卜尊丹巴は心を清廷に寄するに因て其身を安んずることを得、清廷も亦此に因て喀爾喀を撫有することを得、故に準噶爾の侵入ある毎に哲卜尊丹巴必ず奔りて清廷に歸し清廷も亦此が爲めに兵を出して之を保護し其の安全を得せしむ哲卜尊丹巴安全にして喀爾喀の外に走るは絶無の事なり清廷の哲卜尊丹巴を優禮し力を喀爾喀に致しし所以の者は一に此に在り昭摩多、額爾德尼昭の二役事端多しと雖、其歸を要するに此の如きに過ぎず若し哲卜尊丹巴をして嚮きに心を清廷に寄せずして馳て他方に向はしめば余恐くは喀爾喀は決して清廷の屬邦たらず早く已に强鄰の版圖に入りしを見んことをそも〳〵喀爾喀は本と滿洲と相下らず而

して其の俄羅斯と交通せしは何れの時より始れるを知らず故に噶爾丹來侵の初に當りては喀爾喀、齊に事へんか楚に事へんかの心未だ定まらず噶爾丹をして恐すに俄羅斯の兵を借りて至るの言を以てせざらしめば未だ必しも其の南に奔るを期す可らず夫れ俄羅斯兵を借りて至るは恫喝の言のみ然れども其の曾て久しく相交通せるは疑を容れざるの事實たり哲卜尊丹巴が言無しと雖、人々皆俄羅斯は身を托すべきの地に非るを知らん哲卜尊丹巴を信奉せざる者と雖、必ず南歸の安全の計たるを思はん何に況や哲卜尊丹巴之を云々し喀爾喀又一人の哲卜尊丹巴を信奉せざるの人無きをや即ち已に俄羅斯に奔りし者に至ても亦皆踵を旋して更に救を清廷に求む是に至りて清廷も亦勢其の内附を拒むこと能はずして此が爲めに力を竭し心を致して計らざることを得ず而して出師の名始て正しきこと得て喀爾喀清廷に結ぶの心、牢として拔く可からざるに至る余以爲らく此の二役は實に清廷の喀爾喀の撫有せし所以の關鍵なりと故に特に此の二役の爲めに別に一章を立て以て其の關係の在る所を明にすと云爾

第十八章　科布多、烏梁海の内屬

一、科布多内屬、三車凌來歸、札哈沁降服

杭愛山は喀爾喀適中の地に在りて山の四圍、皆喀爾喀の遊牧する所たる阿爾泰山は喀爾喀界外に在り

て山陽は衛喇特諸部之に居り山陰は烏梁海之に居る科布多は阿爾泰山梁の東に在り蓋し古の乃蠻部たり乃蠻、克烈部を滅して東、土拉河に移る元の太祖、乃蠻を滅し乃蠻王西走し其地悉く蒙古に入る然れども之を諸王に分給し曾て汗の鄂拓克たらず而して其の東北一帶は乞兒吉思の地たり叛王海都の亂に乞兒吉思西に徙り其地、主無し是に於て烏梁海漸く移りて之に居る明以後、或は衛喇特に屬し或は喀爾喀に屬す

案ずるに乞兒吉思の名、清朝には殆と之を稱する者無く皆之を哈薩克と稱し露國は今に至りて猶ほ乞兒吉思と稱す今其地、科布多界外に在り然れども當初、界内に在りしことは科布多城の東北に奇勒稽思湖あるに徵して知るべく乞兒奇思、奇勒稽思は相同し（此外、証す可き者猶ほ多し下に詳なり）

準噶爾の噶爾丹が侵略を謀るに及ぶ其の定主無きに因りて帳を移して之に據り科布多、烏蘭古木の間に在り以て漸く喀爾喀に逼近す是に於て一時、阿爾泰の左右均しく準噶爾の有に歸す噶爾丹死して其衆或は策妄阿拉布坦に歸し或は清廷に降る是時策妄阿拉布坦新に噶爾丹が故地を得て未だ手を阿爾泰山梁の東に着くるに暇あらず清廷、勢に乘り進で卡倫を阿爾泰の博濟特に設け科布多、烏蘭古木皆自から卡倫の内に入る然れども甚だ隔遠の境に在り喀爾喀と雖、亦曾て其間に游牧する者あらず故に其地空曠にして人無く唯〻烏梁海の時に出沒して打牲するあるのみ策妄阿拉布坦既に噶爾丹の餘燼を收め

科布多屯田の創始

漸く强大を致し再たび此地に垂涎し噶爾丹が故業を復せんと欲す是に於てか清廷も亦永く之を度外に置くこと能はざるなり康熙五十四年（我正德五年、西一七一五年）四月、散秩大臣祁里德に命じて推河に前往せしめ尋いて又右衛將軍宗室費揚古に命じ右衛、察哈爾、歸化城、黑龍江の索倫、達呼爾、喀喇沁、鄂爾多斯諸兵を率ゐ推河に赴て駐紮せしむ駐軍甚だ多くし兵餉繼がず費揚古之を憂へ以て爲らく宜しく屯田を興し以て軍食を裕にすべしと之を土謝圖汗に謀る土謝圖汗是に於て可耕の地を踏査し蘇勒圖喀喇烏蘇拜達里克、明愛察罕格爾、庫爾奇勒、札卜罕河、察罕度爾、布拉罕口、烏蘭古木及び額爾德尼昭（即ち鄂爾坤）等の十餘處を以て答ふ費揚古乃ち喀爾喀、科布多各處の屯田を興さんことを奏請し廷議之を從ふ既にして都統穆賽又傅爾丹をして土默特人一千及び出征歸化城の土默兵一千を率て科布多、布延圖郭勒等の地に往て耕種せしめんことを奏請す清廷亦之を許す是に於て明年二月、清廷穆賽をして牛種田器を買て傅爾丹に與へしめ又軍前發遣、効力贖罪の廢員にして屯田に從事せんことを願へる者あれば之を發して耕種せしめ其の收獲の多少に隨ひ其罪を免し或は其功を叙せしむ此を科布多屯田の創始とす

案するに喀爾喀の屯田は其後廢したれども科布多の屯田は今に至りて猶ほ存す其地異なりと雖、其の創始せる所は此に在り故に科布多の屯田は後世に至るまで宣化、大同兩府の兵に因りて敎授せられ喀爾喀兵、耕種の事に當る是より前、歸化城より推河に至れの驛路開け歸化城と喀爾喀との通路往來漸く繁く此に至て歸化城兵多く往き商人も亦出でゝ之に赴く此れ今に至りて歸化城商人の烏里雅蘇台、科布多地方に赴く者多き所以の原因なり

初、噶爾丹の科布多に移りしや杜爾伯特族も亦隨て此に在り其敗るゝや又去りて故地に復す是に至りて唯〻杜爾伯特台吉丹津獨り阿爾泰山陰に遊牧す其戶一千餘、和托輝特台吉博貝の遊牧、此と相近し故に博貝親から丹津の處に赴て之を招降し聽かずんば擊て之を取らんと請ふ清廷、丹津の從弟車棱に命じ使をして書を齎して博貝と偕に往き之を諭さしむ車棱は是より前、清廷に降附せる者なり丹津聽かず遂に策妄阿拉布坦の牧に徙る是に於て科布多一帶、復た噶爾丹の餘類無し五十六年、清廷、傅爾丹に命して振武將軍と爲し阿爾泰一路より進て準噶爾を襲擊せしむ七月、傅爾丹、兵を派して博羅布爾哈蘇に至り額魯特五人を追斬し四人を生擒し人を遣りて分路尋探せしむれとも一の敵蹤無し兵を阿爾泰に返す五十七年閏八月、傅爾丹をして科布多、烏蘭古木兩處に於て各々一城を築き益々屯田を興し房舍を建て驛站を設けしむ明年八月、傅爾丹の請に從ひ茂岱察罕度爾、鄂齊圖果爾二處にも亦城垣を築き屯田を興し尋て兵を派して駐防せしむ五十九年、祁里德時に征西將軍たり奏請すらく阿爾泰駐防の兵、臣をして七千人を率て布婁爾より進み傅爾丹をして八千人を領して布喇罕より進み齊く出てゝ準噶爾を襲擊せしめよと清廷之を許す九月、祁里德、鑑額爾河より前進し額魯特宰桑色布騰を擊破す色布騰、二千餘人を率て降る傅爾丹進て格爾額格に至る額魯特等帳房を委棄して走る之を追て二百餘

人を斬り宰桑貝坤以下百餘人を擒にし三百餘人を降し兵を督して烏蘭呼濟爾の田畝を蹂躙し其の蓄積せる芻糧を焚て還る明年、再たび進擊を謀り將に祁里所屬の兵二千を派して策妄阿拉布坦及ひ烏梁海の逃衆を收めしめ其の内變を待ちて三路齊く進み以て策妄阿拉布坦か巢窟を掃はんとす適々大將軍允禵密奏する所あり事遂に寢む是歲（即ち康熙六十年）祁里德奏す烏蘭古木、特里河邊等の處、地暖に土肥え麥種一斗にして收穫二石有餘あり請ふ明年更に多く墾耕せん大收望むべきなりと之に從ふ明年、祁里德、都統圖喇に移牒し總理屯種事蘇永祖に命し烏蘭古木、特里等の地に赴き溝渠を開き灌漑に便にし以て益々田畝闢かしめ前鋒統領卜柱、札薩克根敦等をして兵一千を領し營を立てゝ屯田を防守せしむ是歲又大收あり而して茂岱察罕廋爾は常に歉收に苦しむ乃ち其の人力を移して悉く科布多、烏蘭古木に集む後、雍正二年十月に至り傅爾丹奏すらく烏蘭古木屯田の收麥四千一百七十石有奇と而して北路の軍、是歲を以て撤し獨り喀爾喀兵二千を留めて仍ほ阿爾泰に駐せしむ四年、青海定まり策妄阿拉布坦の子噶爾丹策凌、和を請ふ清廷、額駙策凌、散秩大臣四格等をして阿爾泰の境界を勘せしむ（此間の情形、下の烏梁海條下に詳なり）是歲、策妄阿拉布坦死して噶爾丹策零嗣く七年三月、傅爾丹靖邊大將軍となり再たび北路の軍を督す八年、傅爾丹進て科布多に屯す土謝圖汗部の札薩克をして額爾德尼昭屯田の穀を督運し烏里雅蘇台の軍營に赴かしめ又科布多築城需用の鐵を解送せしむ九年四月、科布多城を修築す九月、噶爾丹策零、大小策凌敦多布等をして來り犯さしむ傅爾丹迎て之を和通諸爾に

擊て利あらず退て科布多を守る是に於て科布多の大營を察罕廋爾に移し順承郡王錫保をして代て大將軍たらしめ傅爾丹を降して振武將軍とし仍ほ科布多に駐せしめ土謝圖汗部の親王丹津多爾濟に命し錫保に隨て察罕廋爾防護し科布多の後援たらしむ明年六月、大小策凌敦多布杭愛山を繞りて直に喀爾喀を襲ふ額駙策凌擊て之を額爾德尼昭に敗る順承親王錫保及ひ傅爾丹皆罪獲て貶黜せらる明年、平郡王福彭代りて定邊大將軍となり大軍を統て烏里雅蘇台に駐し額駙策凌、定邊左副將軍を以て科布多に駐す明年二月、烏里雅蘇台は科布多を距る甚た遠きを以て進剿の機宜は悉く策凌の總理に聽かしめ五月策凌を召して軍務を義せしめ今年の進兵を停め七月、遂に科布多の軍を撤し察罕廋爾に駐紮せしむ八月、侍郎傅鼐、額外内閣學士阿克敦、副都統羅密等を遣りて準噶爾に赴き利害を宣示し以て和議を謀らしむ

案するに清人は和義の清廷より出でしを愧てや諸書多く其始を曖昧にし傅鼐等を遣りしことを略し噶爾丹策凌より和を請へるが如く記せり然れとも諸書を參照するに清廷より出でたるもの跡遂に掩ふ可らず當時の事を記せる者は禮親王の嘯亭雜錄、阿克敦の德蔭堂集より詳なるは莫し嘯亭雜錄に傅閣峰諱鼐、號爽齋、姓富察氏云々、公在上前、論準噶爾形勢、上不以爲然、用兵數年、所言驗云々、十年春、命公監馬爾賽軍云々、會賊有求降意、而盈廷諸臣皆欲能兵、上問公、公叩首曰、此社稷之福也、上意遂定、即命公偕都統羅密、侍郎阿克敦往云々と此れ傅鼐は本と準噶爾征

伐を以て不可と爲し人にして此人にして使となる使命の在る所推して知るべきなり而して德蔭堂集初次使に準噶爾に奏に噶爾丹策凌問、來使何事至り此、臣等言、我聖上軫念群生に不り忍に復用に兵戈に欲り使に中外一體休養に此欽に奉諭旨に前來之意也とあり使命の在る所、明々白々、和議の清廷より起れることを爭ふ可らす滿洲名臣傳(阿克敦)も亦云ふ十二年七月、西路北路將軍皆言に兵力有り餘、賊勢窮蹙可り勦狀に上特遣に阿克敦に偕に侍郎傅鼐、副都統羅密、往に準噶爾に諭に噶爾丹策凌に以に寬大之恩に開に其迷誤に盡に清邊界に不り得り踰り越と此れ決して準噶爾より和を請ひしに非す特に清廷より此等の使人を遣はして和議を講したりしなり今其顚末を考ふるに康熙の末年、聖祖既に媾和の意あり人をして其意を準噶爾に達せしむ而して往復數年の間に聖祖崩し世宗嗣て立ち時に策妄阿拉布坦も亦既に老いて其子噶爾丹策凌、清廷和を納るゝに意あるを聞て和を求む而るに策妄阿拉布坦繼て死せしかば清廷俄に和意を翻し噶爾丹策凌が新立未だ固からざるに乘りて其の巢穴を覆さんと欲し達福、傅鼐等諫れども從はず進擊して科布多の敗となる額駙策凌の額爾德尼昭一役、準噶爾侵略の衝を折きしと雖、未だ以て噶爾丹策凌が本據を剿するに足らず是に於て群言訕々、皆兵を罷めんと欲す西北兩路將軍は兵力餘ありと稱すと雖、此れ其の將軍たるの職掌上、和の一字を題し難きのみ是に至りて世宗も蓋し其の輕忽、兵を擧げしを悔い其の曾て以て然りと爲さゞりし傅鼐が言に耳を傾け遂に此人をして此の使命を齎して準噶爾に赴かしむるに至る當時の情形、大抵此を以て推知すべきなり（猶は第四編に詳なり）

明年三月、傅鼐等還る噶爾丹策凌、其臣垂納穆喀(或は吹那木喀に作る)をして偕に來らしめ克木克木齊克より起り哲爾格西喇呼魯蘇より一直に南に向ひ以て噶斯口に到る一帶の地を以て空間の地（即ち中立地帶）と爲し額魯特は阿爾泰山梁を踰えず喀爾喀は哲爾格西喇呼魯蘇を踰えず以て各〻其界を守らんことを請ふ清廷之を北路の將軍策凌に質す策凌奏すらく應に請ふ所の如くなるべし但喀爾喀の汗地は哲爾格西喇呼魯蘇の界外に在り本と仁宗皇帝(康熙帝)の置く所なれば此獨り應に故の如くなるべく準噶爾遊牧に至ては自から應に額爾濟斯及び阿爾泰を以て界と爲すべしと清廷之に從ふ六月、垂納穆喀去る明年即ち乾隆元年遂に西北兩路の大軍を撤し北路は烏里雅蘇台及び鄂爾坤に屯す二年、噶爾丹策凌、書を額駙策凌に致し仍ほ阿爾泰に遊牧せんことを願ふ策凌敢て私に答へず其書を獻ず清廷、策凌をして其私意を以て之に答へしめ台吉額墨根を遣りて之に報ぜしむ十二月、噶爾丹策凌其宰桑哈柳をして來り請はしむ其意、現在に照して界と爲すに在り清廷、策凌及び額墨根を召して其議を主持せしむ明年、哈柳をして先づ還らしめ三月、阿克敦を以て正使とし御前侍衛旺札爾、頭等台吉額墨根を以て副とし勅旨を齎して準噶爾に使せしむ四月塔米爾を發し七月、伊犂に至り更に地界を議す爭ふ所は阿爾泰を以て界と爲すと否とに在るのみ然れども議未だ決せず十二月、噶爾丹策凌復た哈柳をして阿克敦と偕に來り請はしむ清廷聽かず唯〻噶爾丹策凌をして年々二三十人を出して邊境を巡視し卡

準噶爾復た科布多を爭はず

倫内に城垣を築き屯田を興す等の事ありや否やを察知せしめ以て其疑を釋くことを許す明年二月、哈柳還り十月、復た至り遂に原議の如くにして和成る是より準噶爾復た來りて科布多を爭はず然れども喀爾喀も亦科布多に入るを許さず唯〻烏梁海の時に遊獵せるを見るのみ

案ずるに此時、準噶爾に於ては大小策凌敦多布既に死して噶爾丹策凌復た戰意無し故に前後往復數年にして議する所、唯〻阿爾泰山梁を以て界と爲すと否とに過ぎず而も其議終に清廷の原議の如し是に至ては噶爾丹策凌が戰を欲せざること知るべし蓋し噶爾丹策凌が阿爾泰を以て界と爲すを欲せざるは清廷の其の界内に在て軍備を充實せんことを懼れしが故にして清廷の阿爾泰を以て界と爲しことを欲せしは噶爾丹が經界を慢にして他日侵入の地歩と爲んことを懼れしが故なり故に界内に城垣を設け屯田を起し及び歸化城人等の多く來りて貿易を行ふ等の事無きを誓ひ又入藏熬茶の路を塞がず及び往來貿易を許し此に因りて原議の如く阿爾泰を以て界と爲すことを得以て和議成るに至れるなり當時論爭せし所は德蔭堂集に詳なり

噶爾丹策凌死して次子策妄多爾濟納木札勒嗣く童昏にして行跡修まらず國内大に亂る是に於て三車凌の投歸あり而して札哈沁も亦尋て内屬するに至れり

三車凌は皆杜爾伯特台吉にして一を車凌烏巴什と云ひ二を車凌蒙克と云ふ俱に額爾濟斯河畔に聚牧し巴約特部之に屬す杜爾伯特本と四衛拉持の一たり然れども準噶爾の盛なるや之に抗す

ること能はず暫く服屬して以て舊牧を保つ準噶爾の亂るゝや達瓦齊纂立して之を召ふ三車凌之を拒んと欲すれば力敵せず之に事へんと欲すれば從はん所を知らず時に額駙策凌も亦既に死して其子成衮札布代りて定邊左副將軍たり三車凌乃ち其の舊牧を棄て奔りて降を成衮札布に諸ふ車凌の從者三千百七十戶、車凌烏巴什の從者千二百餘戶、車凌蒙克は兼て巴約特に長たり從者七百餘戶、成衮札布之を受け以て清廷に報ず三車凌、準噶爾の來て其後を追はんことを懼れ急に内汛に移入せんことを請ふ成衮札布暫く之を烏里雅蘇台に置き以て清廷の命を待つ時に乾隆十八年なり達瓦齊果して札哈沁宰桑禑木特をして兵二百を率て之を追はしむれども既に及ばず乃ち内汛に入りて三車凌を索む清廷、車木楚克札等に命じて卓克索に駐防せしめ巴圖蒙克等に命じて烏里雅蘇台に駐防せしめ以て杜爾伯特の降衆を防護し且つ命じて禑木特を執へしむ禑木特逸し去る杜爾伯特の風俗は少しく他蒙古と異なり游牧の傍兼て耕種を業とす故に明年正月、推河札克拜達里克、庫爾奇勒等可耕の地を視て之を置き其の穀種は之を歸化城に取らしむ又車凌及び車凌烏巴什に羊各五千、車凌蒙克に三千を賜ひ尋て札克拜達里克を定めて其の牧地とす色布騰と云ふ者あり三車凌の屬なり善く衆を約す三車凌以て視牧の大臣に告ぐ清廷乃ち色布騰に命じて軍務を參贊せしめ所部の兵二百を選び内大臣薩拉爾（本と達什達瓦の屬宰桑）と偕に往き烏梁海及び札哈沁の衆を招降せしむ札哈沁は準噶爾の哨卒なり禑木特宰桑を以て其衆を領す禑木特の逸し去るや副都統達青阿等罪を得たり是に至りて達青阿遂に禑木特以下從者三十五人を誘擒

す清廷其の誘擒を非とし其罪を宥して之を遣還す四月、内外札薩克の例に照し三車凌、諸台吉を率ゐ熱河の避暑山莊に入覲す車凌以下封領を置き左右翼を分ち正副盟長を設く五月、三車凌、諸札薩克を牧地に遣還し獨り車凌に命じ兵五百を爵を頒つこと差あり札薩克を設くること十三、清廷、諸台吉を率ゐ熱河の避暑山莊に入覲す車凌以下封選び薩拉爾の軍に赴き烏梁海を征せしむ車凌蒙克の子巴朗、其姪巴布勒、族人蒙克特穆爾等と屬衆二百餘を携へ庫克嶺を踰えて背き去る額布根は蒙克特穆爾の弟なり其兄の叛を聞き自から慚忿し大軍に從て達瓦齊を征し且つ叛黨を擒にして自から贖はんと請ふ乃ち之に札薩克台吉を授け將軍策楞及び色布騰等に命じ巴朗、蒙克特穆爾等を執へしむ巴朗、等聞て準噶爾界に竄る中途逃げ還る者あり皆其罪を宥し車凌蒙克をして之を管せしむ七月、將軍策楞、三車凌の牧を歸化城青山の東に徙し其の逃竄を防かんことを請ふ清廷其の疑懼を深くせんことを慮りて仍ほ舊牧に安置せしむ既にして三車凌の族台吉訥默庫、剛多爾濟、額爾德尼、巴圖博羅特等、輝特台吉阿睦爾撒納、和碩特台吉班珠爾等と偕に内附す清廷之に牧產を賜ひ塔楚に置き三車凌の牧に隣せしむ十月、訥默庫等、避暑山莊に入覲す爵を頒つ差あり札薩克を設くること十、佐領を編むこと三車凌の例の如し左右兩翼を分ち正副盟長各〻一人を置く初、禑木特の縱されて還りしや額魯特及び烏梁海の兵八千を以て達瓦齊が爲めに阿睦撒納の衆を掠む是に至て阿睦爾撒納、大軍に從て札哈沁を擊ち禑木特が掠むる所の衆を索回せんことを請ふ清廷も亦烏梁海及び札哈沁の内汛に近きを以て内大臣薩拉爾に命じ禑木特等を阿爾泰山梁の外に逐はしむ會〻

雪深くして行く可からざるを以て止む而るに禑木特、清廷遣歸の恩に感じ且つ達瓦齊が事ふるに足らざるを思ひ陰に來歸の志を抱く準噶爾宰桑通禑木特の游牧は諾克海克卜特爾に在り索勒畢嶺に近くして布拉罕察罕托輝(札哈沁遊牧地)の下游に在り禑木特乃ち其牧に赴き將に通禑木特を掠めて歸降の計と爲さんとす反て其の覺る所となり遂に誘執せらる薩拉爾謀して之を知り烏蘭山陰より兵を率て猝に至り通禑木特を擒にし因て索めて禑木特を得、忘恩の罪を責む禑木特乃ち情を以て薩拉爾に告げ因て内屬を請ひ自から札哈沁得木齊(得木齊は小頭目の稱なり)所部六百餘戸を招降す薩拉爾、是に於て禑木特を檻致す清廷之を釋して内大臣を授け遂に札哈沁を擊つ二十年、通禑木特死す清廷、禑木特をして善く其の戚屬を視せしむ烏梁海の降者察達克、準噶爾の包沁を招服し及ひ杜爾伯特屬を察獲して以て献す命して所部に給す包沁とは砲卒なり準噶爾、回々人を以て砲卒と爲し之を包沁と稱す二月、班第、定北將軍となり北路より出づ阿睦爾撒納之に副たり禑木特之に參贊たり以て達瓦齊を征す禑木特密に奏すらく阿睦爾撒納は犲狼なり降ると雖、命じて往かしむ可からずと而して阿睦爾撒納も亦參贊色布騰巴爾珠爾に告て曰く禑木特は心を傾けて降れる者に非ず信ず可らず今哨探兵、多く札哈沁を從ふ此輩恐くは師を漏さん後隊に在らしむるに若くは莫しと色布騰巴爾珠爾以聞す清廷命して相疑ふこと勿からしむ班第、札哈沁の衆を札布堪、庫克嶺諸地に置き其の逃亡を防がんと請ふ乃ち命じて之を齋拉罕に置き禑木特を以て之が總管とし額魯特人喀喇巴圖阿玉錫を以て翼領とす尋いて包沁宰桑阿克珠勒、

衆を率て降る禡木特の族を察獲し之を禡木特に給す準噶爾の制、札哈沁、包沁の納賦は毎年脯を献じ隔年に牲を供して喇嘛を贍し軍事に遇へば其をして役を助けしむ清廷仍ほ舊例に依らしめ阿克珠勒に命して包沁總管たらしめ禡木特をして之を兼領せしむ今、科布多に札哈沁旗あるは此に由れるなり

大軍の達瓦齊を征せるや清廷初、三車凌に命じ兵二千を選び車凌をして其一を領して北路に隷せしめ車凌蒙克、色布騰之に從ひ車凌烏巴什をして其一を領して西路に隷せしめ皆參贊大臣とす訥默庫等後れて至り亦從軍を請ふ命じて西路に隷せしむ然れども車凌烏巴什、訥默庫、年皆幼にして未だ事を經ざるを以て更に車凌蒙克を調して西路に隷せしむ阿睦爾撒納北路の副將軍たり訥默庫は其妻の弟なり因て奏請して北路に隷せしむ清廷、車凌に整裝銀二千兩を賜ひ車凌烏巴什、訥默庫には各、其の十分の二を減す車凌と車凌蒙克とに命し宰桑を遣はし善く耕す卒二百人を以て額爾濟斯河に赴かしめ又綠旗兵と喀爾喀兵とを遣り偕に往て屯耕せしめ三車凌が所部の水泉の處を識れる者を以て軍の敎導たらしむ將に功成るの日を俟て額爾濟斯の舊牧に遣還せんとするが爲めなり而して訥默庫自から拜達里克の北、札布堪河源博羅喀卜齊爾より鄂爾海喀喇烏蘇界に至るの地に移牧せんこと請ふ清廷之を允し努力、功を成し游牧を以て念と爲すこと勿からしむ大軍既に達瓦齊を征して還り青海の羅卜藏丹津を俘にして至る清廷、車凌及び阿睦爾撒納に親王の雙俸を賜ひ車凌蒙克を多郡王に晉封し車凌烏巴什を和碩親王に晉封し禡木特に三等公を授け信勇の號を賜ふ達瓦齊遁る車凌烏巴什、輔國公瑪什巴圖と偕に輕騎八百を率て追尾す定北將軍班第、車凌蒙克をして所部の兵を督して伊犂に駐防せしめ色布騰をして烏魯木齊より博羅塔拉に至るまでの郵務を管せしむ伊犂既に平き車凌、車凌烏巴什、訥默庫等、皆避暑山莊に入觀す清廷、車凌を以て杜爾伯特汗と爲し特古斯庫魯克達賴の號を賜ひ改て正副盟長各三を置き車凌に從て來れる者は車凌及び車凌烏巴什を盟長とし色布騰及び車凌蒙克を副盟長とし仍ほ左右兩翼に分ち訥默庫に從て來れる者は別に一盟とし訥默庫を以て盟長とし剛多爾濟を以て副盟長とす阿睦爾撒納將に熱河に朝せんとし途にして叛き去る色布騰之を聞き兵を率て之を剿せんことを請ふ清廷其の從軍甫て還れるを以て其の重く之を勞せんことを欲せず慰諭して歸牧せしむ既にして又其の阿睦爾撒納と夙怨あり且つ額魯特の情節に通せるを以て烏里雅蘇台に赴き駐防大臣等と偕に軍務を籌畫せしめ授くるに參贊大臣を以てす色布騰命を聞き馳て道に上り途次、病に嬰りて歿す是歲十二月、車凌等、牧產に乏しきを以て額克阿拉勒に徙らんことを請ふ清廷之を許し仍ほ阿睦爾撒納の平ぐを俟て額爾濟斯の舊牧に遣歸すべきを諭し之に粁糧六百石を給し且つ其の前に從軍の日、給する所の馬駝は期、二歲を緩めて交納することを許し又訥默庫に諭して偕に往て之に移らしむ而るに訥默庫、阿睦爾撒納に煽惑せられ陰に叛志を抱き將に竄れて之に就かんとす剛多爾濟之を知り阻止すれども從はず遂に叛き去る清廷乃ち剛多爾濟を以て盟長とし其の遺衆を鉗束せしむ既にして烏里雅蘇台辦事大臣阿蘭泰、車凌及び車凌烏巴什と偕に兵を率て訥默庫を追ひ訥默庫及び其の妻子を擒にして至る清廷之を論

伯什阿噶什

ずるを律の如くにして其屬を籍沒し以て車凌と車凌烏巴什とに分給し遂に車凌、車凌烏巴什、剛多爾濟を以て悉く額爾濟斯に移し以て同族完聚することを得せしむ車凌等既に同族完聚することを得て入覲年班を定めんことを清廷に請ふ清廷命じて三班と爲し乾隆二十一年を以て分班入覲の始と爲さしむ伯什阿噶什と云へる者あり亦杜爾伯特台吉たり遠く同族を離れ伊犂河西沙拉伯勒境に遊牧すること數世、達瓦齊の虐に遭ひ之を棄てゝ去らんと欲せしも其の襲はれんことを恐れて敢て發せず定北將軍班第の伊犂を平げしや使を遣り往て之を招かしむ伯什阿噶什乃ち三千餘戸を献じて降る未だ入覲するに暇あらざるに哈薩克の衆あり俄に來りて其牧を掠む伯什阿噶什の養子博東齊、其の宰桑諾斯海と偕に衆を携へて來り且つ其故を告ぐ清廷、博東齊に命じ兵を以て往き其父を迎へしめ暫く其衆を額爾濟斯に置く博東齊將に往き迎へんとす伯什阿噶什八百餘戸を率て適〻至り其の族人烏巴什も亦隨て至る乃ち伯什阿噶什を封じて和碩親王と爲し烏巴什を固山貝子とす此れ車凌未だ額爾濟斯に移牧せざるの前に在り既にして伯什阿噶什入覲し清廷之に馬七百、牛百五十、羊三千を賜ひ其衆を佐領に編むこと車凌の例の如くにし別に一盟と爲し伯什阿噶什を以て盟長とし烏巴什を以て之に副とす未だ幾くならざるに伯什阿噶什死す清廷是に於て其の兄の子丹巴都噶爾に固山貝子を授け弟達瓦濟特に札薩克公を授け以て伯什阿噶什の遺衆を分管せしめ且つ車凌の牧に歸するも内徙を欲するも均しく其便に隨ふことを聽す而るに丹巴都噶爾、佐領色布騰と互に畜産を掠み清廷、侍衛佛保を遣りて其牧に至らしむれば其の馬駝を掠む清廷乃ち前の恩命を撤し事の定まるを俟て必す車凌の牧に歸せしめんとす適々烏巴什死す其の襲爵を停む喀爾喀貝子車布登札布、佛保の馬駝を掠めし者を捕ふ清廷因て伯什阿噶什の屬戸を收めて喀爾喀に給し獨り博東齊等數人をして車凌の牧に附せしむ其の族人等、久しく索居せるを以て車凌の牧に就くことを欲せず乃ち移して之を黑龍江界呼倫貝爾に置く呼倫貝爾に額魯特あるは此に由れるなり是時、車凌既に額爾濟斯に徙る而して同族貝勒巴圖博羅特、輔國公含稜等も亦車凌に隨て移牧することを欲せず叛て阿睦爾撒納に應ず副都統瑚爾起乃ち之を輝巴朗山に擒にし悉く誅に伏す

初、札哈沁公禑木特、伊犂に在り定北將軍班第と準噶爾善後事宜を籌議し頗る裨益あり班第仍ほ禑木特を阿爾泰に置き以て喀爾喀の藩籬を厚くせんことを請ふ清廷之を許す而して大軍繼て撤し札哈沁兵三百も亦既に遣回せらる獨り禑木特、疾を以て留まりて伊犂に在り俄にして阿睦爾撒納叛し道路梗塞兵衛、人に乏しきを以て脱出することを得ず阿睦爾撒納の黨哈丹、禑木特を獲、之を脅かして降らしむ禑木特肯はず乃ち執へて阿睦爾撒納の處に致す阿睦爾撒納慰喻して己に從はしむ禑木特屈せず遂に其の縊殺する所となる清廷聞て之を憫み其孫札木禪をして三等信勇公を襲はしめ仍ほ札哈沁を領せしむ杜爾伯特既に舊牧に歸る清廷以爲らく札哈沁、杜爾伯特本と相比鄰す亦應に一體に辦理すべしと時に札木禪、將軍哈達哈に從ひ方に烏梁海を剿す乃ち其の凱旋を待ち札木禪に命じ屬を率て舊牧に歸らしむ禑木特歸順以來、札哈沁相繼て内附し佐領を置くこと九、大小人口二千餘、之が總管を補授すと

雖、未だ印信を給せず乾隆二十六年に至り理藩院議奏し始て札木禪に總管札哈沁一旗の印を給し以て其衆を轄せしむ其の子孫、今に至りて札哈沁公たり其の牧地は哲爾格西喇呼魯蘇に在り其域内に都蘭哈喇山あり鉛鑛を産す嘉慶中、開採の議あり札木禪の曾孫托克札巴圖其地を獻す然れども纔て之を罷め地を以て托克札巴圖に還せりと云ふ

車凌既に舊牧に歸る然れども諸額魯の邊を擾すを懼れ又徙て之を烏蘭古木に避けんことを請ふ清廷未だ許さず噶勒雜特宰桑哈薩克錫喇、其の得木齊巴圖濟爾噶爾をして來りて叛を勸めしむ車凌之を執へて科布多の軍に械致し遂に自から其衆を携へて和通呼爾哈諸爾に徙る適〻副都統唐喀祿至る車凌、卒七十を遣り以て唐喀祿を護し往て諸部に宣諭せしむ途にして車凌烏巴什が徙りて車凌に就くに遇ふ車凌烏巴什も亦護衛巴顏及び卒三十を遣りて之に從はしめ且つ曰く額爾濟斯、烏隆古の地、夏は蚊蛇多く殆ど行く可からず額琳哈畢噶、哈布塔克、拜塔克皆察罕郭勒を以て要汛とす請ふ往て賊を其地に禦げと唐喀祿以聞す清廷、車凌烏巴什が誠順を嘉し之に幣と佩飾とを賜ふ準噶爾既に滅びて其の遺衆多くは瑪哈沁となる瑪哈沁は人を劫掠して財物を奪ふ者なり宰桑色布騰と云ふ者あり瑪哈沁の首領たり貝勒巴桑、喀爾喀郡王車木楚克札布に隨ひ之を剿し其の露境に走れるを偵知し兵を鑑格爾圖喇に屯し使をして之を露官に求めしむ露官、色布騰及び其黨百餘を擒にして以て巴桑に與ふ清廷、巴桑に幣を賜ひ徧く其の從兵を賞す時に車凌既に死して其子索羅木袞布、汗位を嗣ぎ年少にして懦弱なり副管旗章京巴顏克什克其の哈屯（車凌の妻）を助けて牧務を管理す乾隆二十七年、杜爾伯特左右兩翼に各〻副將軍一人を置き右翼には正黃旗の纛を用ゐしめ左翼には正白旗の纛を用ゐしめ各〻勅印の軍符を給し車凌烏巴什に右翼副將軍を授け巴桑に左翼副將軍を授く杜爾伯特の兩翼に各〻副將軍を置くこと此に始まる

案ずるに杜爾伯特兩翼に異說あり大清會典は左翼三旗、右翼十一旗とし理藩院副例は右翼三旗、左翼十一旗とし正に相反せり蒙古遊牧記は大體、則例に依りながら猶ほ必有「一誤」と云ひて何れを誤てりとも指すこと能はず然れども車凌は汗にして又本宗なれば其の部屬の多かるべきは論を待たず而して車凌烏巴什既に右翼の副將軍たれば右翼たりしこと知るべく車凌烏巴什既に右翼に屬すれば車凌一派の左翼に屬すべきは自然の數なり果して然らば右翼三旗、左翼十一旗と云ふを當れりとす且つ會典、則例俱に少數なる者を前にし多數なる者を後にせるは旗分の前後に依れる者にして正黃旗を以て正白旗の上に置けるなり右翼既に正黃旗纛を賜へり故に前に在るのみ會典左右二字の互換せること益〻明かなり蓋し汗の爵位尊しと雖、當時索羅木袞布懦弱にして旗務を掌ること能はず巴桑代て副將軍たり勢、有功なる車凌烏巴什を以て上と爲さゞるを得ず此れ右翼の左翼に先だつ所以なり

初、杜爾伯特、烏梁海は額爾濟斯に錯牧す三車凌の内屬せしや始、札克拜達里克に置かれ後、額克阿

拉勒に徙り更に額爾濟斯の舊牧に復せらる烏梁海の撫に就けるや清廷之に烏蘭古木の地を給す車凌、額爾濟斯を以て便とせず遂に奏請して烏蘭古木に徙る清廷都統納穆札爾を遣り往て杜爾伯特、烏梁海兩牧の界を勘せしむ車凌因て又烏蘭古木を以て其の屯耕の地と爲し科布多、額克阿拉勒を以て其の遊牧の地と爲さんことを請ふ清廷之を許し唯〻其の所部を禁じて相侵攘することを得ざらしむ既にして錯牧、便ならざるを以て遂に烏蘭古木を定めて杜爾伯特の牧と爲し科布多を定めて烏梁海の牧と爲す而るに科布多、貂を產すること多からず烏梁海之に苦しみ額爾濟斯に徙らんことを請ふ時に車凌既に死せり清廷以て車凌烏巴什に詢す車凌烏巴什奏す此れ本と烏梁海の舊牧、且つ烏蘭古木の地、水草饒く臣等此に移り日既に久し請ふ永く徙ること勿くして額爾濟斯を以て烏梁海に給せんと乃ち請ふ所を許し烏梁海を額爾濟斯に置く故に今に至りて杜爾伯特、烏蘭古木に駐し烏蘭古木杜爾伯特と稱せらる烏蘭古木杜爾伯特に附牧せる者兩旗あり一は左翼に屬し一は右翼に屬す左翼に屬せる者を輝特下前旗とし右翼に屬せる者を輝特下後旗とす輝特、初、杜爾伯特の附庸たり土爾扈特の準噶爾を避けて俄羅斯に徙りしや輝特代りて出で四衛拉特の列に入る其の族人達瑪璘と云へる者あり杜爾伯特汗車凌の女壻なり準噶爾達瓦齊の亂に妻孥を携へて遠く徙り額琳哈畢爾噶に在り車凌の大軍に從て達瓦齊を征せしや道、額琳哈畢爾噶を過る達瑪璘が屬戶四十餘、出て〻降を乞ふ伊犁既に定まりて清廷、杜爾伯特諸台吉に牧地を賜ふ達瑪璘之を聞き間道より烏里雅蘇台に至り戶六十餘を携へ車凌の牧に附せんことを請ふ清廷之を許し別に札薩克を授けて之に隸せしむ此を輝特下前旗と爲す達瑪璘の從叔父を羅卜藏と曰ふ是より先、大軍の伊犁を平くるとき屬を率て內附す清廷之を杜爾伯特右翼に隸せしむ此を輝特下前旗と爲す故に今、烏蘭古木杜爾伯特左右翼合て十六旗、爵も亦旗の數の如しと云ふ

案ずるに十六旗の爵號、旗號、佐領の數、之を列記すれば左の如し

左翼十二旗	爵號	佐領
特固斯庫魯克達賴汗旗	札薩克汗	十
中旗	札薩克多羅郡王	一
中左旗	札薩克多羅貝勒	一
中上旗	札薩克固山貝子	一
中下旗	札薩克一等台吉	一
中前旗	札薩克輔國公	一

左翼十二旗	爵號	佐領
中前左旗	札薩克一等台吉	一
中前右旗	札薩克固山貝子	一
中後旗	札薩克輔國公	一
中後左旗	札薩克一等台吉	一
中後右旗	札薩克一等台吉	○
輝特下前旗	札薩克一等台吉	一

右翼四旗	爵號	佐領
前旗	札薩克和碩親王	十一
前右旗	札薩克多羅貝勒	二

右翼四旗	爵號	佐領
中右旗	札薩克固山貝子	二
輝特下後旗	札薩克一等台吉	一

二　烏梁海の招撫、青滾畢卜の變

林木中百姓

烏梁海は所謂る林木中百姓の一種にして打牲捕貂を以て業と爲し好んで山林に居り平野に遊特せず本と黑龍江源の北に在り今、阿爾泰、唐努諸山の間に住す遼代之を服屬し時に朝貢を通ず金代、韃靼に隔てられて來る者無し元の太祖即位の二年、長子朮赤を遣り西北諸部を討平せしむ烏梁海、奇爾吉斯皆其内に在り蒙古之を總稱して槐因亦而堅（或は火因亦而干に作る）と謂ふ乃ち林木中百姓なり蓋し其の種人是より常に元に服事す明初、黑龍江南に徙れる者あり後、漸く遼塞に蔓延す所謂る朶顏三衛の兀良哈是なり兀良哈即ち烏梁海にして蒙古と少異あり今化して蒙古と異なる所無し而して其の西に徙りて奇爾吉斯の故地に據れる者、今仍ほ烏梁海を以て稱せられ其俗を變ずる所無し

朶顏三衛の兀良哈

烏梁海兀良哈に關する考證

案ずるに遼史兵衛志屬國軍に斡朗改あり百官志に斡朗改國王府あり屬國表穆宗の應歷十三年五月に斡朗改國進花鹿生麋、視之、天祚の天慶三年六月に斡朗改國遣使、來献良犬などあり斡朗改、兀良哈、烏梁海は皆同一語音の異譯にして同一名稱なること論勿く其の鹿を献し犬を献せる皆打牲種族なりしを證明せり現時烏梁海は阿爾泰、唐努諸山の間に居れども此れ其の原生地に非ず康熙三十九年七月の上諭に尼布潮等處、原係布拉忒、吳郎海諸部落之地、彼皆林居、以捕貂爲業、人稱爲樹中人樹中人乃ち林木中百姓なり）とあり尼布潮は即ち黑龍江北の尼布潮にして吳郎海亦烏梁海と同じ此れ烏梁海は原と尼布楚地方に在りし者にして其の原生地たり元史譯文證補太祖本紀譯證に守墓者爲烏梁海人とあり元人は陵寢を起さゞるを習とし太祖の陵、今其の所在を失ひたれども其の鄂爾多斯地方に在る可からざるは洪鈞の辯ずる所の如くにして其の誕生地方面に在るべきこと蒙古源流に徵して知るべく其の誕生地迭里溫索勒答黑は敖嫩河附近に在りて今露領に入る蓋し尼布楚を距ること甚だ遠からざるべく近きに就て烏梁海人を守墓と定めたりし者なること知るべければ當時烏梁海が此の地方に棲息せしこと明かなり元の太祖が朮赤をして平げしめたりし林木中百姓は大抵今の露領貝加爾州地方に居りし者にして烏梁海實に其一たりしなり然れども烏梁海は此時始元と相往來せしに非ず元朝祕史（卷一）一日、朶奔篾兒干往脫豁察黑溫都兒名字的山上、捕獸去、於樹林内、遇著兀良哈部落的人と見え元史譯文證補には朶奔篾兒干を朶奔巴延に作り朶奔巴延居斡難、克魯倫、土拉三河發源之地、不兒罕哈勒敦山と云へり脫豁察黑溫都兒山は今何處に在るを知らざれども斡難附近に在りしこと論なく元の祖先は此輩と相近くして常に相接したりし者なり又祕史（卷一）に孛端察兒哨到那裏、將他一個懷孕的婦人孥住、問他、爾是甚麼人氏、有那婦人回道、我是札兒赤兀惕阿當罕、兀良合眞的人氏とあり兀良合眞或は兀良合歹とも云ひ皆兀良哈なり孛端察兒は太祖十世の祖にして遂に此の婦人を妻とせり又（卷三）帖木眞自那裡回著到家、有札兒赤兀歹老人、自不兒罕山前、背著打鐵的風匣、引著著勒篾名字的兒子來、說道、倆當初在迭里溫孛勒答合地面生時、我與子倆一個貂鼠裏兒袱有來とあり札兒赤兀歹は即ち札兒赤兀惕なれば此の老人亦

兀良哈なり不兒罕山即ち不兒罕哈勒敦山なるべく太祖の家とは朶奔篾兒干以來緣故ありて太祖の生れし時も貂皮裏の袱を贈りたるなり（不兒罕は貂の義、此山貂鼠多かりしなり烏梁海は此山にも往來せしなるべし）かゝる緣故に因り太祖の墓も此の種人の守ることとなれる者なるべければ此の種人が斡難河程遠からぬ所に棲息せしこと益〻明かなり遼史に烏朗改國と云へるは此邊なるべし錢氏の元史氏族表に兀良合氏亦曰兀里養哈觧氏（或作元良罕）其先揑里弼與敦必乃合罕有舊と云へる敦必乃合罕は朶奔篾兒干、朶奔巴延と聲音相近し恐く同人なるべし然らば此の種族は早く元の祖先と交通せしも其の種族の全く服せしは太祖の二年、十二年再征の後に在りしならん後來、此種人皆東西に徙りて東にしては朶顏三衞の兀良哈となり明朝一代、韃靼の東部たり今に至りて喀喇沁の一族、烏浪漢氏と稱せらる此れ東方の烏梁海なり其の西方の烏梁海は今現に唐努山、阿爾泰山地方に在り其地亦其の原生地に非ず元史地理志に吉利吉思境、長千四百里、廣半之、謡河經其中、西北流と云へり謡河は即ち今の克木河にして唐努山陰に在り今唐努烏梁海之に居り奇爾吉思は去て西に徙る所謂る奇爾吉思は今の哈薩克なり露人今に至りて猶ほ之を奇爾吉思と稱す清朝に於ては久しく此名を聞かず唯々滿洲名臣傳唐喀祿か乾隆二十二年三月の奏に喀爾喀地方、有札哈心、特楞古特、奇爾吉斯、烏爾罕濟蘭人等、約萬餘、日久難免滋事、又藩部要略乾隆二十一年に詔車布登札布、以參贊大臣、隨哈達哈、率師剿哈薩克、有固爾班和卓者、奇爾吉斯宰柔也、携千餘戶、潛赴烏

梁海とあるのみ奇爾吉斯、吉斯吉思同し本と貝加爾湖の西より唐努山の陰陽に亘りて其地たり今科布多城の東北に奇勒稽思湖あり此亦奇爾吉斯を以て名を得たる者、當初蓋し奇爾吉斯の地たりしなり此れ奇爾吉斯西に徙りて烏梁海其の故地に據りし證なり元史譯文證補二十六の注に元史劉哈剌拔都魯傳、世祖諭曰、自此而北、乃顏故地、曰阿八剌忽者、素產魚、吾今立城、而以兀連、恐哈納思、乞里吉里（思の誤）三部人居之、名其城曰肇州、汝往爲宣慰使、蓋其時海都叛亂、漠北民避兵而南者、七十餘萬、乞兒吉思東西分徙、或在此時と想ふに應に然るべし而して烏梁海其後を遂て又來り移れるならん（肇州は西齋偶得に阿爾楚哈乃元肇州地と云へり阿爾楚哈は今吉林省に屬す其の所謂る兀連は蓋し兀良の轉音にして即ち兀良哈なり兀良哈の故地、東に在ること此亦其の一證なり）

烏梁海は喀爾喀卡倫外に在り其の一半は清朝に歸し其の一半は露籍に入る清朝に歸せる者を分て三と爲す曰く唐努烏梁海、唐努山陰に居る曰く阿爾泰烏梁海、阿爾泰山陰に居る曰く阿爾泰諾爾烏梁海、阿爾泰諾爾の南に居る而して唐努烏梁海は烏里雅蘇台に管轄せられ阿爾泰及び阿爾泰諾爾兩處の烏梁海は科布多に管轄せらる其の烏里雅蘇台に屬する者又分れて四となる

一、定邊左副將軍所屬　二十五佐領

二、札薩克汗所屬　五佐領

三、賽因諾顏部所屬　十三佐領

四、哲卜尊丹巴胡圖克圖所屬　三佐領

共に四十六佐領にして皆一旗を成さず札薩克を授けられず而して料布多所屬の烏梁海は阿爾泰烏梁は七旗、阿爾泰諾爾烏梁海二旗とし其の佐領の數は詳ならず皆札薩克無くして總管を置て之を管せしむ此れ乾隆以後の定制にして其初未だ清朝の版圖に入らざるに當りては或は準噶爾に屬し或は和託輝特に屬し或は露國に兩屬す和託輝特は喀爾喀左翼に隷し札薩克圖汗部の極西北邊に在り俄木布額爾德尼之を領し喀爾喀七札薩克の一たり西、額魯特に近り北、露國に接し烏梁海其間に錯處し事あれば之を藉りて兵と爲す札薩克圖汗に隷すと雖、其實、一部に異ならず

案するに當時境界明ならず和託輝特に屬せしと準噶爾に屬せしと亦猶ほ清廷に屬せしと露國に屬せしとのごとく其間恐らくは判然たらざりし者あらん各々に近きに就て服屬せしのみ蓋し亦兩屬の者ありしなるべし當時烏梁海は十六鄂托克と稱し十六部落たり其の何如に分れ何如に屬したりしかは今終に知る可からず但和託輝特は六鄂托克と稱し大和託輝特、小和託輝特、哈柳沁、托斯、奢集努特、明阿特の六部に分れたりと云ふ此等の地、今札薩克圖汗部の左翼左旗、中左末旗、中右翼末次旗、右翼右末旗等に分割せられ唯々其の明阿特は科布多に屬せり俄木布額爾德尼は喀爾喀四部の祖格時森札々爾の長子阿什達爾漢の次子圖捫達拉岱青より出て札薩克圖汗の分族たり蓋し當初よりの札薩

克なり

俄木布額爾德尼死し其子額琳沁嗣ぎ私憾を以て和託輝特の衆に因り札薩克圖汗を殺し額魯特に遁る清廷故を以て庫倫伯勒濟爾の盟あり以て俄木布額爾德尼の弟杭圖岱の子根敦に授くるに札薩克を以てし仍は其衆を領せしむ噶爾丹の亂に其の部屬齊巴克塔爾等、噶爾丹に附て逸走す根敦追て之を執へ其の人畜を收め悉く其衆を獲たり康熙三十三年九月、根敦入朝す清廷以て貝勒に封す根敦死し其子博貝嗣く其の牧地、額魯特に逼近せるを以て防守嚴ならざる可らず而るに博貝が力孤弱なり清廷其の疎虞あらんことを懼れ四十八年、更に其の族人納瑪琳藏布に札薩克一等台吉を授け博貝と偕に和託輝特に居らしめ牧を塔斯克木克木齊克に賜ふ後、烏梁海を此に移し之を克木克木齊克烏梁海と稱す

案するに納瑪琳藏布は額琳沁の孫、是より前、青海より來歸し時に歸化城に在りしなり前に擧げたる札薩克圖汗部の中右翼末次旗は即ち此の子孫にして今其の牧地は烏里雅蘇台の北に在りて科布多に近し克木克木齊克は元史の謙々洲にして今唐努烏梁海に屬す

五十四年、散秩大臣祁里德、推河に赴き準噶爾を偵禦す博貝從へり因て祁里德に語りて曰く準噶爾の靖からざるは烏梁海之に障屏たればなり請ふ往て烏梁海を招かんと遂に其弟沙克札と俱に往て之を招く是に於て烏梁海の頭目和羅爾邁、屬を率て降る和羅爾邁は初、吹河に居り越界射獵せるを以て博貝に擒せらる清廷其罪を宥して縱還す是に至て其子瑚洛虎納を遣りて降を勸めしむ和羅爾邁、恩に感じ

降を乞ふ乃ち其牧を特斯に遷す蓋し阿爾泰の事あるは此より始まれるなり

案ずるに和羅爾邁は準噶爾屬の烏梁海にして和託輝特屬の烏梁海に非ず故に越界を以て擒となる今之を特斯に徙せるは和託輝特に屬せしめしなり特斯或は托斯に作る札薩克圖汗部界外唐努山の西南麓に在り特斯河は博貝が牧地界内より出で下流瀦して烏布薩湖となる和羅爾邁が移牧蓋し此間に在らん

五十九年、大軍、阿爾泰より準噶爾を進剿す博貝、郝里德に從ひ準噶爾宰桑色布騰が衆を率て山に據れるを偵知し之を擊て二千餘人を降し併て烏梁海の逃衆四百を獲たり六十年、車臣汗の衆を調して烏梁海の逃衆を巴顏車爾克に防護せしむ宰桑羅と藏錫喇布と云へる者あり烏梁海人なる額魯特に隷屬す博貝又沙克札及び族人伊達木札布等と俱に執へて之を降し汗阿林に置く後、清廷之を察哈爾に移し佐領を授け其屬衆を管せしむ雍正元年、羅卜藏錫喇布、其衆を携へて逃る土謝圖、車臣の兩汗及び貝勒等、追て之を擒にて其屬阿玉什、額博壘等を射殺す是より前、烏梁海の降衆漸く夥くして生を資る所無し博貝、郝里德に就て兵餉一萬八千兩を借り以て牲畜を買ひ之を給して産業と爲せしむ清廷之を聞き二年、其の借款を免せしむ三年、和羅爾邁も亦逃げ去り阿哩克より準噶爾界に入る博貝其の次子額琳沁をして托濟より迎へて之を擒せしめ自から克木克木齋克に赴き叛黨を捕ふ伊達木札布馳せて之に會し偕に之を斬る初、噶爾丹の盛なりしや其衆、科布多、烏蘭古木の間に在る噶爾丹破れて喀爾喀の西境は直に阿爾泰山梁に抵り唐努山陰の克木克木齊克より博木に至るの間、皆博貝及び新附の額魯特貝子策凌旺布の屬下烏梁海之に居る四年、策妄阿拉布坦死して噶爾丹策凌嗣く清廷因て阿爾泰の境界を定めんことを欲し内大臣四格、額駙策凌等をして博貝と偕に往て其界を勘せしむ

案ずるに策凌旺布は噶爾丹屬下の阿拉布坦が子なり阿拉布坦、噶爾丹に隨て科布多に在り烏梁海は其の舊屬故に阿拉布坦が來歸せる清廷之を郡王に封し仍ほ噶爾丹舊屬の烏梁海を領せしめしならん阿拉布坦死して其子代て之を領す是時舊屬噶爾丹の烏梁海、其數猶ほ多し此れ其の境界を定めし所以なるべし

噶爾丹策凌、克木克木齊克の其の舊屬に係れるを以て之を還さんことを乞ふ清廷允さず其の間を伺て烏梁海を掠めんことを慮り博貝をして所部の兵千人を率て前鋒統領定壽に隨て唐努山陽特斯地方に駐して之を防護せしむ五年、博貝遂に額琳沁を率て和羅爾邁を托濟に追擒し其衆を降す和羅爾邁擒に就く清廷因て博貝に交して撫恤せしめ之を公所に置き且つ博貝をして大臣と同く往て之に曉諭し併に自から預備を行ひ以て不虞を防がしむ既にして博貝死し其子班第嗣く噶爾丹策凌兵を以て來て科布多を爭はしむ大將軍傅爾丹敗る大小策凌敦多布等來りて喀爾喀を襲ふ班第、牧を棄てゝ東、色楞格河に遷る額駙策凌、小策凌敦多布を額爾德尼昭に敗る清廷因て傅鼐、阿克敦等を遣りて利害を宣し兵を停め以て阿爾泰の界を定めんとす使者再三往復し乾隆四年、和議始て成り準噶爾をして阿爾泰山梁を踰え

て游牧せしめず喀爾喀も亦札布堪を踰えしめず科布多、烏蘭古木を以て隙地とし唯〻烏梁海の游牧を許して彼此互に之を禁せざらしむ八年、額琳沁に公品級を授け烏梁海の降衆を管せしめ十三年、額琳沁に札薩克を授け別に一旗と爲す明年、烏梁海の降人巴黨逋る額琳沁の子旺布多爾濟、追て貢賛伯勒濟爾に至り盡く擒にして還る十六年、守汛の兵弁、私に界外の回々等と互市し因て爭を致す者あり定邊左副將軍成衮札布奏請して嚴に之を鞫訊す清廷命じて株連すること勿からしむ是より前、班第既に死して其子青滚咱卜嗣く青滚咱卜其の屬下を縱て準噶爾と互市せしむるに坐し其爵を削らる清廷其の叔父額琳沁に命じて之に代らしめ且つ額琳沁をして烏梁海が汛界を出入するの規例を議定せしめ併に所部を禁じて界を越えて準噶爾及び回々人等と互市することを得ざらしむ十八年、三車凌の來歸せしや準噶爾宰桑禑木特之を追ひ汛界に入る清廷命じて之を執へしむ成衮札布急に額琳沁に檄して之を追はしむ額琳沁馬疲れしの故を以て肯て急に追はず禑木特逸し去る成衮札布其の逗遛を劾す清廷乃ち額琳沁が爵を削り復た青滚咱卜をして之を襲はしむ十九年、烏梁海博羅特瑚圖克等擅に汛界に入る土謝圖汗部の輔國公巴木丕勒多爾濟の次子車登三丕勒、參賛大臣薩拉爾に隨て之を擒にす薩拉爾遂に崆格より進で卓克索に屯し烏梁海を招撫す青滚咱卜、額琳沁皆兵を率て之に從ひ禑木特の黨札木闡を逐ふ額琳沁最も奮厲力あり清廷、褒して輔國公に封ず初、準噶爾の和議成るや北路の警緩くして額駙策凌も亦老いたるを以て清廷、烏里雅蘇台の大營を策凌か牧地塔密爾に移し近に就て事を行はしむ策凌死して大營猶ほ塔密爾に在り是に至りて烏梁海の事を辦するか爲めに再たひ大營を烏里雅蘇台に移し桑齋多爾濟をして所部の副將軍を署理せしめ成衮札布に隨て鄂爾海喀喇烏蘇に駐防し以て烏梁海を收撫せしむ青滚咱卜、土謝圖汗部の台吉三都布多爾濟と兵各〻千人を率ゐ參賛大臣努三に隨ひ阿勒和碩に赴き烏梁海宰桑赤倫が吹河に遁るゝを偵ひ兵を率て喀喇莽奈より直に其の所居に赴き其衆四百四十五戶を降し之を特斯偉衮に置く薩拉爾も亦額琳沁、車布登札布等を率ゐ烏梁海宰桑察達克車根等を察罕烏蘇に剿撫す二十年、大軍の達瓦齊を征せしや北路の軍は道、阿爾泰に出づ烏梁海が多く準噶爾に附せるを以て車布登札布を遣りて沿途剿捕せしめ固爾班鼐塔克及ひ烏蘭布拉克、喀喇哈巴等の地に至り烏梁海副都統察達克の屬綽罕、宰桑圖布愼の屬喀喇曼濟の衆に遇ひ盡く之を降し師旋るとき又副都統敦多卜と偕に兵三百を領し薩噶勒巴什嶺より往て汗烏梁海を收む汗烏梁海は阿爾泰烏梁海なり其の宰桑郭爾卓輝鄂木布及ひ布魯古特宰桑根都什、特楞古特宰桑瓜齊楞皆衆を率て降る青滚咱卜も亦宰桑齊巴漢を招降す是より烏梁海略〻定まり新降の旗分を編み總管を補授し青滚咱卜が烏梁海の情に通せるを以て命して之を總轄せしむ既にして烏梁海の逸賊、守汛の侍衛貝多爾を殺す札薩克圖汗部台吉齊巴克札布時に兵を率て奇爾吉斯諾爾に駐防す乃ち同部の台吉根敦と偕に往て捕へ察罕烏蘇に至る青滚咱卜の伊犂より歸るに遇ひ兵を合せて巴斯克斯に赴き因て烏梁海を收撫す時に準噶爾屬下の烏梁海は汗、哈屯等の處に散處す青滚咱卜清廷の命を宣し其の宰桑哈爾瑪什、瑪濟岱、納木札勒、保衮、莽噶

拉克、納穆克布、球庫鄂木等を降す

案するに汗は即ち阿爾泰山、哈屯は哈屯河なり阿爾泰は漠西最高の山、故に汗を以て之に擬す哈屯は汗の妻なり哈屯河は阿爾泰の北麓に出つ故に哈屯を以て之に配す又湖あり密桑諾爾と云ふ此れ大臣を以て稱と爲せるなり今露領に歸す烏梁海此間に在り故に什哈屯烏梁海と云ふ即ち今の阿爾泰烏梁海なり

是歲、阿睦爾撒納叛す清廷、青滾咱卜に命し烏梁海の兵を率て參贊大臣哈達哈に隨て之を征せしむ青滾咱卜、兵五萬を選ひ來年を俟て進剿せんことを請ふ蓋し達瓦齊を征せしとき阿睦爾撒納と同く北路の軍に從ひ最も相親しむ故に其の將に叛かんとする青滾咱卜頗る漏言あり此命を得しに及ひ心中大に懼れ此を借りて姑く時日を緩くせしなり是より前、青滾咱卜潛に烏梁海人諾爾布丹津を遣りて阿睦爾撒納の所に至らしむ是に至て事發覺し清廷、哈達哈に命して之を擒せしむ未だ幾くならず清廷、其の烏梁海招撫の功を思ひ宥して其罪を究めず會〻烏梁海の叛徒郭勒卓輝、博博等僞て阿睦爾清納か哈薩克の阿布賚汗を煽動して入寇せしむることを傳ふ清廷仍ほ青滾咱卜に命し參贊大臣と爲し將軍哈達哈に隨ひ之を進剿せしむ明年、大軍、烏梁海に抵る青滾咱卜私に所部の兵を携て牧に還り逆を構へ且つ人を烏里雅蘇台の軍に遣り衆喀爾惑を煽惑して散歸せしめ僞符を造りて汛兵を撤し十六驛より二十九驛に至る阿爾泰軍台一時に皆廢し喀爾喀王公の臺汛を守りし者、皆其の職を離る其の能く驛務を理せし者は獨り札薩克圖部の台吉遜多布一人ありしのみ是時に當りて阿睦爾撒納、博羅塔拉に在り新附の衆、皆叛て之に應し軍書旁午、羽檄飛ふが如し一旦驛站皆廢し道路梗塞、軍務頗る滯る清廷乃ち衆喀爾喀を喩し其の擅に臺汛を離れし者を責め遜多布を賞し桑齊多爾濟に北路の參贊大臣を授け往て烏梁海總管赤倫に諭し偕に青滾咱卜を擒にせしめ且つ喀爾喀王公等に諭して浮言に惑はざらしむ蓋し是より前、清廷、達木巴札布が巴朗を縱て遁走せしめ額璘沁多爾濟が阿睦爾撒納を監視し入朝の途に在りて之をして兎脫せしめしを罰し之を誅して法を正す（事は第四編に詳なり）青滾咱卜因て衆喀爾喀を煽動するに成吉思汗の裔は治罪の例無しと云ふを以てせしが爲めなり烏梁海總管赤倫、察達克等、始、青滾咱卜の言に惑ひ皆同く叛す是に至り漸く悟る所あり清廷、青滾咱卜の爵を削り復た輔國公旺布多爾濟をして爵を襲はしめ盡く其衆を與へ近に就て青滾咱卜を擒して献せしめ又車凌に命し汗哈屯の烏梁海、青滾咱卜に和附して叛せる者を討せしむ初、青滾咱卜の陰に叛を謀りしや成袞凌布首として其狀を發す是に至り德泌札布等と衆札薩克の兵丁を檄調して之を協剿せしめ又哲卜尊丹巴、胡圖克圖をして所部に諭して大義を知らしめ其の惑はす所と爲ること勿らしむ是に於て清廷再たひ成袞札布に定邊左副將軍を授け兵を合せて速に之を剿せしむ哲卜尊丹巴胡圖克圖、青滾咱卜が罪を悔いしを以て宥を乞ふ清廷許さず

哲卜尊丹巴の擧動

案ずるに當時哲卜尊丹巴が擧動怪しむべし嘯亭雜錄、章嘉喇嘛の條に其尤著者、爲〻折〻服哲敦番僧叛

謀一事、乾隆乙亥、阿逆之謀既露、誠勇公命二喀爾喀親王額林沁一、伴レ之入覲、額中途泄二其謀一、故縱レ阿去、上震怒、賜二額自縊一、故事、元太祖裔、無二正レ法者一、諸部蠢動曰、成吉斯汗後、從無二正レ法理一、推二其兄哲敦國師一爲レ主、勢頗叵レ測、師時扈二從木蘭一、上以二其事一告レ之云々、遣二其徒白姓者一、日馳數百里、旬日達二其境一、哲敦已整レ師、刻レ日起レ事、聞二白至一、嚴レ兵以待、坐二胡牀上一、命レ白匍匐入、白故善二游說一、備陳二顚末一、哲敦已折服、更讀二師札一、乃善諭レ白歸、其謀乃解とあり哲敦は即ち哲卜尊丹巴の略言なり是に由て之を觀れば時の哲卜尊丹巴は額琳沁多爾濟が兄にして其弟の法を正されしに因り青滾咱卜に和附したりし者なり其の所部に諭して大義を知らしめたりと云へるは章嘉胡圖克圖が手札を得たりし後の事にして始めより然りしに非ずされば青滾咱卜が爲に宥恕を請へるも其理にして怪しむに足らず蒙古游牧記の注に青滾咱卜就レ拴、其子齊蘇隆多爾濟等、竄二哲布尊丹巴胡土克圖所一、三都布多爾濟縛送二京師一と云へり此等諸文を參照するときは當時の哲卜尊丹巴が何如の地位に立ちしかを明らかにすることを得べし藩部要略此事を載せず哲卜尊丹巴が爲めに情面を修めしに似たり哲卜尊丹巴は喀爾喀に於て大勢力を有せる者、凡そ此等の擧動、輕々に看過することを得ず故に今事實に明にすること此の如し

青滾咱卜窘懼して爲す所を知らず乃ち自衛の計を圖り所屬和託輝特六鄂托克、烏梁海十六鄂托克の衆を脅かし悉く己に附せしむ然れども大軍至りて衆皆棄て去り復た一人の附く者無し青滾咱卜已むことを得ず妻子を携へ托濟より斯吉特に走り遁れて露國に赴かんと欲す清廷更に旺布多爾濟に諭し重賞を懸け之に命じて擒獻せしむ成衮札布も亦所部の兵を集めて之を追剿し參贊大臣納穆札爾を遣り輕騎之に赴かしむ旺布多爾濟兵を率て從ふ遂に青滾咱卜及び其子車蘇隆多爾濟、齊旺札布、巴里等を擒にし械して京師に至る清廷是に於て旺布多爾濟及び輔國公多爾濟車登、台吉達什朋素克等をして分て和託輝特六鄂托克、烏梁海十六鄂托克の衆を管せしむ青滾咱卜の族人貝勒車登札布も亦叛を助く其祖昆都倫陀音は曾て喀爾喀八札薩克の一たり然れども其の逆に從ひしを以て同く誅せらる族人諾爾布が青滾咱卜を諫阻すれども聽かず馳て烏里雅蘇台に赴き變を報せしを以て代て車登札布の屬を轄せしむ

青滾咱卜誅死せらる

案ずるに今札薩克圖汗部中左翼末旗は達什朋素克が裔にして左翼左旗は諾爾布が裔なり其の和託輝特の餘衆を管せるは此が爲めなり唯々多爾濟車登の子孫は今何如の狀なるを詳にせず

二十三年、青滾咱卜誅に伏し諸子皆連坐せらる特に其の幼子一人を宥す土謝圖汗部の台吉達瑪琳、青噶咱卜に附て叛す同部の副將軍桑齋多爾濟、賽因諾顏郡王車布登札布等と偕に往て擒す達瑪琳之を聞て遁る其の族人車登三丕勒、翁固爾諾爾より馳せて之を追ひ縛して以て獻ず叛亂全く平く車木楚克札布、唐喀祿等同く奏す杜爾伯特貝勒巴圖博羅特等、阿睦爾撒納に通じ額爾濟斯に走り其汗車凌に從て牧を徙さず臣等偵て狀を得、馳て輝巴朗の山後に赴て之を擒にし併て烏梁海の賊五十戶を剿すと九月車木楚克札布に諭し車布登札布と偕に往て烏梁海宰桑博和勒納木札勒等を招降せしむ札薩克圖汗部の

已革輔國公多岳特、單騎、濟伯拉克堡に赴て賊を偵し窘しめられて歸る烏梁海人察達克是より前、既に降て內大臣を授けらる是に至り兵四百を率て往て烏梁海を招く車木楚克札布、布延圖の兵百を催して繼て進み盡く之を降す特勒伯克札爾納克と云ふ者あり阿爾泰諾爾烏梁海の宰桑たり之を聞て其屬を携て亦降る二十三年、車木楚克札布、察達克と偕に烏梁海の戶口を勘し大約四十戶に一得秦を編み分て得木齊、收楞額等の員を置く烏梁海總管阿拉善、戶八百餘を携て叛き去る車木楚克札布、多岳特を率て追擒す車根時に烏梁海の總管たり縛して阿拉善を献し因て其衆を收む烏梁海人恩克又叛き去る成袞札布に命し諸部の兵を調して之を擒獲せしむ尋て輔國公多爾濟車登に命し參贊大臣福祿と偕に烏梁海の劫賊布爾古特布格等を擒せしむ時に烏梁海の賊阿木古朗等馬を劫す達什朋素克、其所屬を護して往きて捕へず福祿之を劾す清廷乃ち達什朋素克が札薩克を削り軍前に留めて力を効し罪を贖はしむ達什朋素克是に於て福祿に隨ひ阿木古朗等を追擒し札薩克を復せらる恩克未だ縛に就かず車木楚克札布等、其の哈屯河に竄せるを知り奏請すらく暫く阿勒和碩に歸て屯駐せば雪後必ず擒に就んと十二月、果して恩克を擒にす烏梁海の賊、大抵蕩平す唯〻明噶特（即ち明阿特）一部あり亦烏梁海種にして原と準噶爾に屬す大軍の伊犁を定めしや明噶特降を乞ふ清廷將に之を黑龍江の呼倫貝爾に移さんとす明噶特之を聞て中ころより變ず納林喀喇泥よりして遁れ去る成袞札布乃ち杜爾伯特輔國公巴圖蒙克に檄して之を追剿せしむ巴圖蒙克之を追ひ途にして之に烏蘭古木に遇ひ圍むに兵を以てす明噶特輙く降ら

恰克圖界約と烏梁海

ず夜中、圍の懈れるを伺ひ遂に遁る二十四年、杜爾伯特郡王車凌烏巴什、札薩克圖汗部一等台吉各車都布多爾濟等、烏梁海宰桑庫克辛を追剿し盡く其衆を降す是より前、烏梁海人郭木薩、擅殺を以て罪を懼れ露國に奔る是に至りて車都布多爾濟併て之を追て和寧嶺に至り郭木札を縛して至る初、杜爾伯特烏闌古木を以て其牧と爲し科布多を以て烏梁海の牧と定めんことを請ふ而るに科布多多く貂を產せず烏梁海以て業とすることを得ず是に至りて察達克、阿爾泰山陽額爾濟斯の地に徙らんことを請ふ八月清廷其請を許し以て新撫の烏梁海を安置す十二月、哈薩克、烏梁海を襲ふ杜爾伯特、兵三百餘を出して之を擊走す二十七年、喀爾喀、烏梁海、札哈沁の汛を展て烏魯木齊に至る二十八年、庫克辛、露國に奔り道にして哈薩克の馬を掠む車凌烏巴什兵を率て之を緝し其の和羅圖郭爾に匿したるを偵し馳せ住て之を擊ち賊潰竄す追尾して林際に至りて之を獲、庫克辛等五十八人を斬り其の妻子從戶七十餘を俘にして歸る蓋し是より烏梁海復た叛者無く以て今に至れり其の納賦は毎戶初、貂皮五張を出し現今減じて三張と爲し別に科差無し其の烏里雅蘇台將軍に屬する者は毎歲、期を以て來り献じ來るときは商民と交易を行ふ商民の其地に赴きて交易することを許さず且つ現物現銀を用ゐしめ相賒貰することを許さず蓋し皆、利を爭ふに因りて端を啓き延て隣境を滋擾せんことを懼るゝが故なり

案ずるに雍正五年の恰克圖界約に兩邊各取二五貂一之烏梁海、自二定二疆界一之日一起、以後永禁二各取二一貂一とあり蓋し當時、露清各屬烏梁海皆本屬より五

貂を取り又兩屬の者は露清各一貂を取りしを疆界を定め兩屬を禁じ各本主より五貂を取ることを定めたるべし唯〻之を減ずるは本主の任意にて清廷は後に三貂に減じたるならん現時烏梁海の貢貂は毎戸に三張とす聞く現今烏梁海七百八十戸(蓋し烏里雅蘇台將軍所屬)戸別に貂皮三張とし共に二千三百五十八張、此を年々貢賦の正額とす然れども今は獲貂數、此の如く多きこと能はず因て他皮を以て代納することあり其法、貂皮八百張以上に及ぶときは他皮を以て之に代ふることを得、水獺皮舍利孫皮、豹皮は一張を以て貂皮の三張に代へ掃雪皮、狐皮、沙狐皮、狼皮は二張を以て灰鼠皮は四十張を以て各〻貂皮の一張に代ふる者とす若し貂皮八百張以下なるときは代納を許さずと云ふ

清廷始めて俄羅斯を知る

第十九章　喀爾喀邊務、露國通商

附喀爾喀界外の蒙古

清朝の始て興る未だ曾て露國と相知らざりしなり太宗の崇德三年(我寶永十五年西一六三八年)喀爾喀部の車臣、土謝圖兩汗相繼ぎ使人をして來て俄羅斯の烏鎗(即ち小銃)を獻せしむ清廷是に於て始て其名を知る俄羅斯は露國なり蒙古人、古より之を稱して俄羅斯と爲す元の太祖曾て之を征し長子求赤を欽察部に封す俄羅斯之に服屬す元衰へて俄羅斯、其地を併せ明の末葉、漸く大にして侵略、喀爾喀の北境に至る

案すずるに元史は俄羅斯を阿羅斯、斡羅思、斡魯思等に作る聲音皆同じ蒙古人、今に至てオロスと稱す滿人之を受け亦オロスと稱し漢人譯して俄羅斯、鄂羅斯に作る而るに黑龍江人は之をロチヤと稱す漢人之を聞てオロス、ロチヤ偕に露語の原音に協はざるを知らず又其の同一なるを知らず別に譯して羅刹と爲し羅刹と爲し視て以て其の別部と爲し俄羅斯所屬之羅刹と云ふ甚しきは佛書を引て夜叉、羅刹の羅刹とするに至る然れども自から其の當らざるを知り或は西戎の名に取りて老羌と爲す者あり或は其の鳥鎗を傳へ來りしより老鎗の字を塡つる者あり引證該博、辯析甚だ力む而も其の譯音の初より誤まれるを正す者無し笑ふ可きなり

雅克薩築城

四年、清廷、索倫人を征し黑龍江を渡りて雅克薩、鐸陳に至る時に露人も亦南下して拜喀勒湖(即ち貝加爾湖)の左右に至る然れども兩軍未だ接せずして還る既にして露人益〻進みて尼布楚を佔據し順治の初、遂に雅克薩に至り皆木城を築て之に居る時に清廷方に南方に事あり復た黑龍江北を問ふに暇あらず是に由りて索倫、達呼爾等多く其の侵害を受く

案ずるに此事本と喀爾喀と大關係無し然れども露清界約の起る所は是より出づ故に勢、略〻其の顚末を記せざることを得ず覽者之を諒せよ開國方略崇德五年に夏四月乙亥、征二索倫部一師還、六年に春正月壬辰、錫特庫等、自二索倫部一擄三獲博木博果爾一還とあり博木博果爾は索倫人にして崇德二年三年頻に清廷に朝貢し後叛き去る故に清廷之を征し五年に之を擒にして還る雅克薩、鐸陳は博木博果爾の所屬にして清廷之を攻め雅克薩に克ち未だ鐸陳を下さずして去る當時未だ雅克薩に露人あり

しを記せず此れ露人夫だ雅克薩に據らざりしなり又平定羅刹方略に議政王等奏言、羅刹潛據=雅克薩諸地一、擾=我虞人一、三十餘年矣とあり此れ康熙二十一年の奏議なり又康熙二十四年の上諭に大兵迅速征行、破=四十年磐踞之鄂羅斯於數日之間一、穫=雅克薩之城一、克奏=厥績一とあり然らば康熙二十一年よりは四十年に滿たず二十四年よりは四十年に滿ちしにて露人の雅克薩に據りしが順治元年若くは二年に在りしこと知るべし蓋し雅克薩地方未だ全く清廷に服せず其人或は露人を導き清廷の事あるに乘じて之を復せしならん露人の遂に此に據れるは猶ほ清人の吳三桂が請に因りて李自成を討し遂に自から北京に據りしがごとし古人の所謂る蟷螂捕蟬の譬に異ならず尼布楚は雅克薩を距ること殆ど千里、露人の之に據りしは同時の事に非ず何秋濤以て崇德六年以後の事と爲す蓋し或は然らん

九年（我永曆元年、四一六五二年）寧古塔號京海色、露人を烏札拉村に擊ちて利あらず明年、寧古塔に昂邦章京一員、副都統二員を置き以て北邊防禦の任を重す十一年、都統明安達禮を黑龍江に遣りて露人を逐はしむ明年、明安達禮再たび兵を進めて呼瑪爾に至り頗る斬獲あり粮餉に乏しきを以て半途にして歸る十四年寧古塔昂邦章京沙爾胡達又露人を伐ちて之を尙堅烏黑に破る然れども夫だ志を得ず十五年（我永曆元年、四一六五八年）船廠を吉林烏喇に建て戰船を造り且つ高麗兵を調遣し松花、庫爾瀚兩江の間に戰て之を破る吉林烏喇此より北進の重地となる

案ずるに船廠を吉林烏喇に設くること或は之を十八年に繫く然れども今之を吉林外記に徵するに順治十五年、因=防=俄羅斯一、造=戰船於此一、名曰=船廠一、後置=省會一、移駐=將軍一、改=名吉林烏喇一と云ひ又盛京通志を閱するに船廠船六十四隻（順治十五年造=四十四隻一、康熙七年造=二十隻一）と云ひ一も十八年の造船なく且つ下の十七年の役既に舟師を率て往く戰船を造るの十八年に非りしこと知るべし

十七年、寧古塔總管巴海、副都統察哈泰等と舟師を率て黑龍、松花兩江交會の地に至り舟を江隈に潛め以て露人の至るを待ち之を古法檀村に破り其船及び鎗砲軍器を獲て還る然れども巴海が軍も亦利を失へる者五船あり康熙元年（我寛文二年、一六六一年）寧古塔昂邦章京を改めて將軍と爲す四年、露人、索倫部に入り貂皮を取り婦人を淫す巴海襲て之を殲す八年、又來り侵す時に或は投誠する者あり十年清廷巴海に諭して曰く露人投誠すと云ふと雖、當に意を加へて防禦し狡計に墮ること毋かるべしと十三年、水師を吉林より移して黑龍江に分駐し十五年（我延寶四年、四一六七六年）遂に寧古塔將軍を船廠に移駐す是歲、露國の貿易商人尼果賴等至る露國、書を附して清廷に致す亳も邊界の事に及ばず其還るや清廷も亦書を付して露國を戒しめ邊界を犯すこと勿らしむ然れども侵蝕止まず或は精奇里江界に入り室を築て居る清廷、大理寺卿明愛を遣り之に諭して撤還せしむれども肯て去らず四近の耕種漁獵する者、皆寧居を得ず清廷深く以て憂と爲し二十一年（我天和二年、一六八二年）副都統郎坦、公朋春等を遣り行獵に託して尼布楚、雅克薩に至り其の情形を偵察せしめ又戶部尙書伊桑阿を遣りて戰船、粮船を監造せしむ既にして郎坦、朋春等還り奏す羅刹を取ること易し兵三千、砲二十位を發せば足らんと清廷乃ち進勦の計を定め兵を黑

露國使臣費羅多羅境上に至る

馬齊

龍江に集め前の工部尚書瑪拉を索倫部に遣り軍實を預備せしむ二十三年、瑪拉奏す雅克薩の露人は耕種して自から給するも尼布楚の露人は貂を捕へて喀爾喀と貿易し以て生活の資と爲す請ふ喀爾喀部車臣汗に勅して其の尼布楚に貿易する者を禁止せんと時に車臣汗屬下の巴爾呼、黑龍江北に在り尼布楚と相近し牲畜を送りて尼布楚の露人と交易す清廷乃ち其言に從ひ車臣汗に激して巴爾呼の交易を停めしむ二十四年、都統朋春等、水陸並に進みて雅克薩城を攻め六月、之に克て還る還れば則ち露人又來りて之に據る二十五年、又往て之を圍む露人死守して下らず是より先、清廷屢々投誠の露人を放還し之を招撫すれども從はず是歳和蘭の使人至る清廷因て和蘭使人に託して書を露國に達せしむ九月、復書至り開釁の罪を謝し先づ雅克薩の圍を解かんことを請ふ清廷之を納れ別使を遣はして分界を議せんことを求め明年、遂に雅克薩の兵を撤回す既にして露國の使臣費羅多羅、喀爾喀の境上に至る土謝圖汗來り報ず二十七年、清廷將に大臣を遣はし色楞格に會し偕に分界事宜を議せしめんとす左都御史馬齊、其の檔案兼て漢字を書し且つ漢官をして一體差往せしめんと請ふ廷議之に從ひ內大臣索額圖、佟國綱及ひ張鵬翮、陳安世等をして三千餘騎を率ゐ歸化城より北、喀爾喀に出で色楞格に赴かしむ

案するに清朝の制、滿蒙地方の事に關しては一切漢人をして其間に容喙せしめざるを原則とす故に是より先、理藩院の檔案、一も漢字を書せる者無し馬齊、其の永久に示すに足らざるを念ひ此次の界約、兼て漢字を用ゐんことを欲す既に漢字を兼用せんとす故に又勢、漢官をも差往しめざるを得ず此事、清廷に於ては前例無しと雖、界約を訂結すること既に空前の事に屬す之が爲めに一新事例を創設するも未だ必しも先例を破るとす可らず馬齊、滿人にして此議ある公平の見と謂ふべし蓋し或は漢官の差往を以て訂約に利ありとせし者あらん然るに漢人の怯懦なる漠北に赴き强露と折衝することを願はず人々故に託して之を避く其は馬齊傳に詳にして事下レ部議行、尋九卿等會ニ推應差大臣官員一、御史隊租修以レ病辭、揚爆以ニ年老一辭、馬齊劾レ之とあり當時の狀況想見すべし又奉使俄羅斯行程錄に特遣ニ滿大臣一往議、繼准ニ憲臣馬齊疏請一、兼差ニ漢人大臣一、擬ニ出兵部尚書張玉書、吏部侍郎張鵬、給事中何金薦、御吏王承祐四員一題請、上特命ニ張鵬翮、陳安世一前往とあり張玉書等四員も亦大官にして又往くことを欲せし者にあらざるべし故に康熙帝、其意を察し特に題請に從はず官位稍々低き張鵬翮、陳安世等を指定せられたるなり是に由りて之を言ふときは清廷、漢人をして滿蒙の事に預からしむるを欲せざりしのみならず其實は漢大官等自から之に預かることを好まざりしなり然れども二十七年の行にして果して障碍無からしめば漢人も亦其間に預ることを得る例となりたらんに事、誠に意料の外に出づる者あり忽然として噶爾丹の亂作り半途にして召還せられ二十八年の行には遂に漢臣の往きたる者ありしを聞かず此に因りて當時の界約は滿蒙文のみありて漢文を附せず是より以後、立つる所の界約、遂に漢文を附するの例無し蓋し滿蒙文の粗笨なる漢文に比すれば露國に益あること多し後世漢譯界約出でしも人々其意を以て譯出し殆と準據とするに足らず清廷の

黑龍江界約

不利たることも亦甚し是に於て咸豐以後の界約、始めて或は漢文を附し同治以後、滿漢並用となり光緒に至りて專ら漢文を用ることとす其の過、漢官の偖に往くことを好まざりしに出て國家の不利を貽すに至れるなり之を要するに馬齊、清朝に負かず清朝、馬齊に負き清廷、漢人に負かず漢人、清廷に負きし者、彼の差往を好まざりし者は啻に馬齊の罪人のみならず實に國家の罪人なりしなり

會々準噶爾の噶爾丹、喀爾喀を侵し喀爾喀南走し之に途に遇ふ清廷其の事を誤らんことを懼れ暫く索額圖等を召還し且つ露國の使臣に傳諭し會議の期を緩くし明年、索額圖、郎坦等をして黑龍江より水路、尼布楚に赴き界事を議せしむ時に露人は悉く尼布楚、雅克薩を收めんことを欲し索額圖等も亦兩なから之を收めんと欲し議合はず清廷、索額圖等をして尼布楚を棄てゝ雅克薩を收めしめ黑龍江北の巴爾呼を移して呼倫貝爾に置き露國をして雅克薩の露人を領回せしめて其の木城を毀ち額兒古納、格爾必齊兩河を以て界と爲し和約始て成る此を黑龍江界約とす當時、喀爾喀未た全く清廷の版圖に歸せず故に其の約する所は黑龍江以東に在りて以西に及はず且つ噶爾丹、一時、喀爾喀を佔據し漠北の往來通せず故に界約、其の貿易を許すと雖、其の商人の至る猶ほ黑龍江よりし或は土魯番一路よりす既にして噶爾丹收死し喀爾喀、舊牧に還る庫倫一路の往來は蓋し此後に在り

案するに定約の後、康熙二十九年に露國使人、始て北京に至る未だ何れの路より來れるを詳にせざれとも當時喀爾喀の路塞がりて通ぜざれば黑龍江界よりして來れること推知すべし三十二年に來れ

庫倫一路開通

庫倫

る者は土魯番一路よりし嘉峪關に入りて互市を行ふ自から明文の據るべき者あり唯々三十九年に來れるは或は喀爾喀よりせしも知る可らず何となれば此時、喀爾喀既に定まりて各々其の舊牧に還れるが故なり五十一年、圖理琛、道を庫倫、恰克圖に取りて土爾扈特に使す然らば庫倫一路の開けしは康熙五十一年以前に在り想ふに當に四十年前後に在るべし

四十八年（我寶永六年、西一七〇九年）十二月、露人至る初、順治五年、露人伍朗格里投歸す其後投歸招降の徒、漸く增して百人に至る清廷編て一佐領と爲し鑲黃旗に隸し伍朗格里をして之を管せしむ伍朗格里の死後、大學士馬齊之を管す是に至りて馬齊、罪を獲て拘禁の中に在り然れとも清廷、其の曾て露人を管せしを以て之を起して復た其の至れる者を管せしむ蓋し猶ほ未た理藩院に關せざりしなり五十九年（我享保五年、西一七二〇年）理藩院始て議して露人の庫倫に在りて互市することを准す初、哲卜尊丹巴胡圖克圖、鄂爾坤の額爾德尼昭に在りて噶爾丹の劫す所となる故に其の復た北に還るや額爾德尼昭を棄てゝ居らず去りて汗山の下に往き木城を建てゝ居る即ち所謂庫倫なり活佛の居る所、進香膜拜の人聚り飲食衣服、需用の物甚博し之を供給する所以の商賈亦隨て至り故に活佛の往く所、市を成さゞること莫く庫倫の買賣是に於てか起る露人の北京に往來する者、道既に喀爾喀に由る庫倫の沿途互市の場たるべき亦必至の勢なり而して蒙古の事は一に理藩院の管理に屬す故に庫倫の開市、必ず理藩院の議准を待つ是に至て理藩院、監視官一人を派し二年一交代し（後、三年一交代とす）土謝圖汗に會同し貿易人等を彈壓稽查

せしむ是より前、邊境の民、互に小貿易を行ふ者ありと雖、唯〻土謝圖汗の經理に任せ清廷曾て之に關する所無し是に至りて皆理藩院の管する所となる

案ずるに喀爾喀の露人と貿易せるは何れの時より始れるを知らず蓋し露人の南下せる統一無き小部落は大抵之に抗すること能はず布哩雅特、巴爾呼の類、本と蒙古人と同一種なれども喀爾喀人等之を露人の蹂躪に任せて救援すること能はず露清の境界を爭ふ以前に在りて既に其の奄有に歸す故に康熙二十八年の界約、尼布楚を收むること能はず然れども其地本と蒙古に屬し其人又蒙古族なれば喀爾喀の之と往來せるは理の當に然るべき者にして其間に劃然たる境界ありしに非ず清廷暫く之を不問に付して土謝圖汗の經理に任せたり唯〻露人等多く來りて喀爾喀に入るに至りては其の滋擾を懼れ之が管束を行はざるを得ず是に於て始て之を理藩院の管理に歸す其の蒙古に關せるを以てなり而して露國に關するの事、是より遂に亦理藩院の管理する所となる

邊境の事是より繁く六十年、清廷、土謝圖汗旺札勒多爾濟に命じて邊務を督理せしむ雍正四年（我享保十一年 西一七二六年）旺札爾多爾濟、鄂爾坤屯田、相宜の穀種に乏しきを以て之を露國より買はんことを請ふ蓋し是より先、大軍を推河に駐し屯田を鄂爾坤等の十餘處に置きしを以てなり清廷之を許す五年、清廷、理藩院尚書圖禮善をして露官伊立禮に尼布楚に會し兩國の境界を議定せしめ又額駙策凌、內大臣四格等を遣り露官薩瓦等に會し邊界を勘し卡倫を安設せしめ恰克圖の市場を開く此を恰克圖界約とす喀爾喀

部北邊の卡倫此より始まる

案するに此約清人は恰克圖界約と稱し露人は尼布楚條約と稱す今其の約文を見るに雍正五年九月初七日、理藩院尚書圖禮善、會二同俄官伊立禮一、在二恰克圖一、議二定界約十一條一、尚書圖禮善會二同俄國哈屯漢所レ差俄使伊立禮一、議レ定兩國在二尼布朝一所も定、永堅二和好之道一とあり此れ最初尼布朝即ち尼布楚に在りて大體を議定し更に恰克圖に在りて確定を與へしなるべしされば恰克圖界約と云はんも可、尼布楚條約と云はんも可、實は各〻其の境界內の議定を擧げて稱と爲し俱に一方を漏せる者なり蓋し尼布楚の議定は七月十五日に在り恰克圖の確定は九月七日に在りしならん同約文に雍正五年七月十五日、兩國大臣議定、由二恰克圖鄂爾懷圖兩處中間界址所立一之鄂博一起云々と見ゆ策凌、四格は尼布楚議決の文書に依り界牌設立の事に會同したりしなり故に又同約文に雍正五年九月初七日定界時所レ給二薩瓦一文書、亦照レ此繕とあり

是より先、喀爾喀の北境、未だ境界の劃然たる者あらず額兒古納以西、山河無き處、平地相接し彼此の間、甚だ畛域無し是に至りて始て卡倫、鄂博を設け以て其の疆域を淸くす設くる所の卡倫凡そ五十九座、其の極東の十二座は黑龍江將軍の管理に屬し迤西四十七座は皆喀爾喀部に屬し其の恰克圖以東は車臣、土謝圖兩汗部の札薩克之を設立し恰克圖以西は賽因諾顏、札薩克圖汗兩部の札薩克之を設立し總て之を土謝圖汗に管轄す露國も亦其對面に於て卡倫を設く兩國卡倫の中間を以て隙地とす（即ち

薩布及び鄂博

中立地帶）蒙古語に此を薩布と稱す薩布の中央、石を積て堆と爲し以て境界を標す此を鄂博と稱す若し密樹叢林ありて鄂博を設くること能はざるの地は大樹を削りて字を刻し以て鄂博に代ふ之を設くること恰克圖より東、額兒古納河源の阿巴哈依圖に至るまで四十八處、恰克圖より西、沙畢乃嶺に至るまで二十四處、各卡倫には戍兵を置き各部札薩克より輪流交代せしめ又專管札薩克を置て之を管せしめ清廷又卡倫侍衛を派して之を監理せしむ

案するに卡倫は本と越界の人を瞭望するが爲めに設けし者にして蒙古部落は互に畜産を盜む者多きが故に外蒙古の未だ内屬せざる時に當りては内外蒙古の交界にも之を設け黑龍江省と喀爾喀との間にも亦之を設く今、露國と境界を分定す其間又卡倫無かる可らず喀爾喀の邊務、是より重し卡倫既に定まりて此界大抵今に至りて變せず唯〻謝濟世の西北域記に喀爾喀之北境、有二銀山一、俄羅斯爭、喀爾喀以開、天朝命讓レ之 とあり濟世は雍正四年を以て烏里雅蘇台に遠戍せられ必ず確聞せる所あらん想ふに定約の前此等の紛爭あり因て界約を定むるに至りしならん但他書に見えず故に此に附記す

既に恰克圖の通市を許す是に於て理藩院又司官一人を恰克圖に駐し内地の商民を管理せしむると庫倫監視官の如し露國も亦買賣圈を其の境上に設け官吏を派駐し薩那特衙門を置き（或は薩那特衙門に作る）公文の往復を掌らしめ事あれば公文を以て理藩院に移牒す其の貿易多くは茶を以て往き皮を以て來る乾隆七年（我寛保二年、西一七四二年）兵部議奏し硝、礦、牛角、銅鐵及ひ軍器を露人に賣與することを禁す十年、土謝圖汗部親王額璘沁多爾濟をして邊務を督理せしむ十三年、土謝圖汗延丕勒多爾濟を盟長兼副將軍と爲し哲卜尊丹巴胡圖克圖と偕に之に代て督理せしめ二十一年、台吉琳丕勒多爾濟を科布多の軍營より庫倫に調回して邊務を協理せしめ二十三年、親王參贊大臣桑齋多爾濟をして協理せしめ是歲十二月、又台吉三都布多爾濟をして之を協理せしむ蓋し邊務益々重きを加へしが爲なり是より前、庫倫、恰克圖の兩司員、理藩院より派駐せらるゝと雖、未た關防を給せず二十四年（我寛暦九年、西一七五九年）其任を重くし各々關防一顆を給す二十七年（我寛暦十二年、西一七六二年）遂に欽差大臣二人を設け庫倫に駐劄せしむ其の一人は滿蒙京官より簡放し其の一人は喀爾喀札薩克内より理藩院旨を請て選任し專ら喀爾喀の邊務を司らしむ即ち庫倫辦事大臣なり是より凡そ薩那特衙門と往復する公牘は皆庫倫辦事大臣の印文を用ゐしめ復た直に理藩院と往復せず而して北境の卡倫、恰克圖より以東、黑龍江より以西は皆庫倫辦事大臣の管理に歸し東は黑龍江將軍、西は烏里雅蘇台將軍に會同して邊勢を辦理し復た邊務を以て土謝圖汗に委ねず既にして露國の匪徒、屢々禁約を侵し喀爾喀に竄入し卡倫の守兵を戕害し索倫の游牧を滋擾す是に於てか庫倫の互市を停め尋て二十九年（我明和元年、西一七六四年）恰克圖の互市を停む而るに土謝圖汗部親王桑齋多爾濟、辦事大臣丑達と謀り私に露人と交易し司員額爾經額も亦之に預かる既にして事、發覺し明年清廷、桑齋、多爾濟の爵を削り丑達を執へて法を正し額爾經を處するに斬監候を以てす三十三年（我明和五年、西一七六八年）露國

庫倫辦事大臣

復た互市を開かんことを請ふ時に慶桂、辦事大臣たり喀喇沁貝子瑚圖靈阿と偕に露の廓密薩爾（蓋し領事）に會し章程に議定し唯々恰克圖の互市を許す四十四年（我安永八年、西一七七九年）露人、禁を破り罪を犯す者あり露官頭目瑪玉爾尊大にして即時會辦せず辦事大臣索林怒り一面、市を閉ぢ一面暫く市を停めんとを奏請す清廷其の過激を免かれざるを非とし尚書博清額をして査辦せしめ明年、再たび其の交易を準し因て諭すらく沿邊地方如し私走逃入の露國男女人等を拿獲せしことあらんに訊問の後、別項の情事無き者は即ち放行し或は人をして露境に獲送せしめ如し群を成して私に來り馬匹其餘の物を偸竊せる情事ある者は拿獲の後、奏明し旨を請て處辦せよと四十九年（我天明四年、西一七八四年）庫倫の商民、卞倫外烏梁海の遊牧に赴きて貿易せる者あり途にして露屬布哩雅特人等數人に遇ひ貨物を劫奪せらる辦事大臣勒保此か爲めに百方、法を設け劫奪の主名を得、霧官拉木巴に檄して捕盜會審せんことを求む既にして露官、盜犯烏時勒咱等數人を縛し頭目咭哪喇爾をして送りて恰克圖に至らしめ恰克圖司官と會審し遂に例に照して十倍の賠欵を出さしむ司官等地に就き法を正し以て衆人に示し儆戒と爲さんとす

案するに咭哪喇爾は人名に非す蓋し該地方の總督なり犯人を縛送し及ひ司官と會審せる者は咭哪喇爾屬下の露官のみ直に之を咭哪喇爾に繫くるは記述の疎なるを免れず

而して咭哪喇爾爲らく賠償已に畢る事已に完結すと乃ち其の鼻耳を鉗し之を寂寞無人の絶境に發遣し復た恰克圖司官に詳報せず辦事大臣之を聞き檄を發し拉木巴を詰る拉木巴も亦以て意と爲さず辦事大臣之を劾奏し旨を奉して理藩院より薩那忒衙門に行文し露國をして拉木巴を召還し公平に處辦せんことを求む明年、薩那特衙門の答文至る其意、糊塗して事を了するに在り理藩院是に於て旨を奉し恰克圖の互市を撤す露國已むことを得ず拉木巴を召還し別人をして來り駐せしめ屢々行文して云ふ烏呼勒咱を捕へんと欲するも終に踪跡を得ずと故を以て縣案久しく結ばず五十四年（我寛政元年、西一七八九年）衛勒干卞倫の巡兵、出巡して露屬哈哩雅特人數人に遇ひ來由を査問す哈哩雅特人、捕拿せられんことを懼れ烏鎗を放ち巡兵を傷つけ死に致して去る辦事大臣之を聞き即時具奏し一面、檄を飛して之を捕へんことを露官に求む時に新駐の露官頗る恭順にして檄を受けて嚴拿し明年、遂に正犯二人、從犯一人を獲て恰克圖に縛送し會審處辦す露官因て請ふ舊犯烏呼勒咱終に得可からず願くは現案を以て舊案を結ばんと時に松筠、旨を奉して此事を協理し一面、司員等をして正犯を斬て衆に示し從犯を發遣し一面、具奏し以て此に因りて新舊兩案を結はんことを請ふ清廷乃ち其の先づ旨を請はずして擅に自から處辦せしを責む然れども其の應得の咎を宥す是に於て露官屢〻互市を復せんことを求めて止まず清廷未だ許さず適〻塔爾巴哈台の土爾扈特人、路に迷て哈薩克及び露國界に入り還りて言ふ露人、土爾扈特を誘致し私に謀る所あらんとすと清廷之を聞き松筠をして恰克圖に在りて其の情形を訪察せしむ松筠、形跡の疑ふ可き者無きを以て覆奏す理藩院、旨を奉じて露官に檄詢し露官其の誣妄を辯明す是に於て五十六年（我寛政十一年、西一七九九年）復た關を開き互市を許す其後、嘉慶四年（我寛政十一年、西一七九九年）五月、喀爾喀親王蘊端多爾濟員を派し

喀爾喀卡倫

て露國邊界の卡倫を巡察せんことを請ふ七年、清廷命ずらく恰克圖東西兩邊の卡倫は明年以後、庫倫大臣をして巡察せしめ毎十年に一次、輪流稽査せしむべし豫じめ露人に諭して疑惑せしむること勿れと然ども當時露人柔順にして事無し故を以て十年（我文化二年、西一八〇五年）又之を停め仍ほ札薩克をして舊の如く巡察せしむ爾來久しく事無し咸豐以後に至り疆場の爭紛糾し界約屢〻改訂を經、東界西界の露國に歸する者頗る多きも獨り喀爾喀北境の經界に至りては今猶ほ當初の定むる所を變せず彼此劃然、山河依然、奮面目を改めず此れ其の當初定むる所、紛糾を容るゝの餘地無きに由るべしと雖、蓋亦界内外本と同種の人に係り其間、爭訟を致す所以の者少きに因らずんばあらず故に今此章を終ふるに當り境界上の卡倫、鄂博の名數を列擧し附するに界外の蒙古情形を以てし讀者をして此意を知らしめんと欲す想ふに亦無用の擧に非るべし

喀爾喀部の卡倫は烏里雅蘇台將軍と庫倫辦事大臣との所轄に分れ科布多の卡倫は科布多參贊大臣の所轄に屬す今其の當初設けし所の卡倫の名目と兩卡倫相距の遠近里程を擧げん

庫倫辦事大臣所轄

枯布勒哲庫卡倫（四約六十里）蒙克托羅蓋卡倫（四五十五里）哲格勒它音卡倫（四六十里）孟格儿各卡倫（四南六十五里）華鄂博果卡倫（四北九十五里）鄂凌圖卡倫（四二百里）托爾羅克卡倫（四六十里）土爾克能卡倫（四北四十里）托克托爾卡倫（四四十里）呼林納爾素卡倫（四南四十里）托蘇克卡倫（四北六十里）夥爾素卡倫（四南七十五里）博爾克卡倫（四南七十五里）烏爾和特卡倫（此より西北百二十里巴彦阿都爾噶に至る以上十四卡倫は放厥河の東に在り車臣汗部の所設に係る）巴彦阿都爾噶卡倫（四南九十里）阿嘎楚卡倫（四八十里）齊勒博爾卡倫（四南九十里）集爾渾卡倫（四八十里）庫木里卡倫（四南八十里）哈蘇魯克卡倫（四南九十里）阿仍烏卡倫（四五十里）庫野卡倫（四北五十里）明儿卡倫（四北四百二十里）烏雅勒喀卡倫（四北三百五十里）庫得里卡倫（四南九十五里）奇克泰卡倫（四一百里）奇蘭卡倫（四南九十五里）薄拉卡倫（四六十五里、恰克圖に至る以上十四卡倫は恰克圖の東に在り土謝圖汗部の所設に係る）

烏里雅蘇台將軍所轄

恰克圖卡倫（四九十五里）察罕烏蘇卡倫（四九十五里）哈拉呼儿爾卡倫（四北九十五里）哈布塔海卡倫（四北一百五里）濟爾格岱卡倫（四二百十里）鄂爾多果卡倫（西七十五里）特穆倫卡倫（四南九十五里）額林沁拉木卡倫（四北九十五里）阿勒混博勒爾卡倫（四百五里）鄂依拉噶卡倫（四九十五里）達爾沁圖卡倫（四南八十五里）庫克托羅蓋卡倫（四南百五十里）哈特呼勒卜木卡倫（西四南二百里、博爾特斯卡倫に至る以上十二卡倫は恰克圖の西に在り賽因諾顏部の所設に係る）博爾特斯卡倫（西北八十五里）察罕布隆卡倫（四百五十里）阿里噶卡倫（四南二百十里）灑巴利卡倫（四九十五里）齊噶勒卡倫（四八十里）哈起克卡倫（四九十里）巴彦布拉克卡倫（以上七卡倫は唐努山の南に在り札薩克圖汗部の所設に係る喀爾喀部卡倫共計四十七座、守兵一千百三十六人）

科布多參贊大臣所轄

近吉里克卡倫（四南五十里）額爾遜卡倫（四八十里）薩木噶勒台（四百十里）阿拉克鄂博卡倫（四九十里）鄂爾濟呼布拉克卡倫（四百十里）齊々爾噶那卡倫（四百四十里）漢達蓋圖卡倫（四南七十里）博羅沁格々圖卡倫（四南六十里）博陀羅尼霍壘卡倫（四百四十里）烏魯克諾爾卡倫（四百三十里）齊格爾素台卡倫（四六十里）哈韜烏里雅蘇台卡倫（四百五里）哈克諾爾卡倫（四六十里）索果克卡倫（四百十里）衞霍爾卡倫（四百里）噶嚕圖卡倫（四百四十里）烏科克卡倫（西北百二十里）沁達捗圖卡倫（四百十里）烏爾魯卡倫（四七十里）昌吉斯卡倫（四百十里）那林卡倫（四百里、夏季安設）庫蘭阿吉爾噶卡倫（同上四九十）、和尼邁拉虎卡倫（同上）塔木博勒濟爾卡倫（冬季安設）噶勒濟爾巴什卡倫（同上）瑪尼土噶圖勒（同上）二十三卡倫（以上）

（冬季安設の者を合せて二十六）は科布多境内に在り科布多參贊大臣の所設に係る

此内烏科克以下十卡倫は同治三年（我元治元年、西一八六二年）割て露境に歸せり其の和尼邁拉虎は露人の久しく垂涎せし所にして清廷も亦之を知り嘉慶二年（我寛政八年、西一七九七年）理藩院の議奏に除二恰克圖交易一外、霍尼邁拉呼卡倫、不レ准二通商一と云へり又西域水道記に毎歳夏、塔爾巴哈台置二輝邁拉呼卡倫於河西一、科布多置二霍尼邁拉呼卡倫於嶺間一、臨レ河以幾二禁俄羅斯之通商者一とあり河は額爾濟斯河、嶺は那瑪嶺にして科布多、爾塔哈巴台分界の處なり界内、本と哈薩克人等過冬の所たり清廷之を驅逐すれども去らず遂に常居の地となり哈薩克の露領に歸するに及び遂に卡倫を割て彼に與ふるに至れるなり爾後卡倫の名數、古と同からず今光緒七年（我明治十四年、西一八八一年）の改訂陸路通商章程附する所の卡倫單に據るに左の如し

第一　胡柏里志呼　第二　則林圖　第三　毛葛子格　第四　烏梁圖　第五　多羅洛克
第六　霍林納拉蘇　第七　呼拉查　第八　巴揚達爾噶　第九　阿深嘎　第十　鳴孳
第十一　烏阿勒嘎　第十二　庫達拉　第十三　恰克圖　第十四　哈拉呼志爾　第十五
治爾格台　第十六　鄂爾托霍　第十七　伊勒克池拉穆　第十八　烏尤勒特　第十九　貝
勒特斯　第二十　賽郭鄂拉　第二十一　金吉里克　第二十二　攸斯提特　第二十三　蘇
鄂克　第二十四　查罕鄂博　第二十五　布爾噶蘇台　第二十六　哈巴爾烏蘇　第二十七
巴克圖　第二十八　喀普他蓋　第二十九　潤克蘇山口　第三十　霍爾果斯　第三十一
別盞里山口　第三十二　帖列克第山口　第三十三　圖魯噶爾台特山口　第三十四　蘇約克
山口　第三十五　伊爾克什唐

此單、東を以て首と爲し西を以て尾と爲す中間譯字異なるも同一地なる者あり毛葛子格の孟格凡各、多羅洛克の托爾羅克の如き讀者類推して之を知るべし

此れ現在の卡倫なり

其の鄂博は舊時の名稱詳ならず今、中俄界約斟注載する所の者を列擧して之を示さん

恰克圖以東四を以て首とす

第一　布爾古特　第二　柴達穆　第三　爾林三　第四　狄列圖　第五　舍爾巴哈　第六
池克台　第七　哈普察蓋　第八　阿喇呼達喇　第九　烏伊勒戛　第十　阿喇哈達音烏蘇
第十一　烏里雷　第十二　烏布爾哈達音烏蘇　第十三　庫穆倫　第十四　奎河　第十五
昆古爾特　第十六　阿申蓋　第十七　哈喇古求里　第十八　呼蘇魯　第十九　巴勒集河
第二十　巴勒濟勘　第二十一　畢勒赤　第二十二　克爾渾　第二十三　布庫昆　第二十四
吉勒畢里　第二十五　布攸哈圖　第二十六　果爾墨齊　第二十七　果索勒台　第二十八
阿達爾嘎　第二十九　洪果以上敖嫩河西に在り　第三十　阿勒呼特　第三十一　阿喇巴彥租里克

第三十二　烏爾布巴彥租里克　第三十三　貝爾奇　第三十四　呼爾奇　第三十五　蒙古特努克　第三十六　托索克　第三十七　托克托爾　第三十八　霍依　第三十九　霍林那喇遜

第四十　沙喇鄂那　第四十一　圖爾根　第四十二　庫奎什　第四十三　圖爾肯　第四十四　圖爾克納克　第四十五　察罕諾爾　第四十六　庫爾托羅海　第四十七　哈喇托羅海　第四十八　伊林　第四十九　鄂巴圖　第五十　格子蓋　第五十一　墨吉茲格　第五十二　齊普蓋　第五十三　則林圖　第五十四　音克托羅海　第五十五　蒙克托羅海　第五十六　安戛爾海　第五十七　庫別里眞　第五十八　塔爾郭達圖　第五十九　察罕烏魯以上喀爾喀境內にあり　第六十　博羅托魯海　第六十一　索克圖　第六十二　額爾底里托羅海　第六十三　阿巴海圖以上黑龍江境內に在り

恰克圖以西東を以て首とす

第一　布爾古特以東と同一　第二　鄂羅海　第三　布列蘇圖　第四　產霍爾鄂拉　第五　歡果爾鄂博　第六　衰藏鄂拉　第七　呼圖海圖　第八　庫々那魯楚　第九　烏丁作音　第十切日　第十一　莫敦庫里　第十二　無名　第十三　無名　第十四　無名　第十五　無名第十六　罕戛　第十七　無名　第十八　額爾吉爾塔爾罕台戛　第十九　托羅斯塔班　第二十　肯結滅達　第二十一　烏斯　第二十二　霍齊達巴哈　第二十三　克穆克穆池克博穆

第二十四　沙賓達巴哈

古、恰克圖以東鄂博四十八處と稱せるに今載する所、六十三處、多きこと實に十一處、或は後來添設せる者あるか或は重複せる者あるか今未だ詳ならず暫く原書に依て之を列記す

附喀爾喀界外の蒙古

喀爾喀本と界內界外の區別無し區別の生せしは人爲の分界に出で天然の疆場よりせるに非ず即ち露人南下し强て分つ所の境界に因れるのみ故に界の內外、部落相對して種族相同く風俗相同く言語相同し露清版圖相異なりと雖、此間に不同の處を看出すこと能はず界外に喀木尼罕ありて界內哲卜尊丹巴胡胡圖克圖屬にも亦喀木尼罕あり界外に奈瑪爾部落ありて界內の巴爾呼と相同く恰克圖邊外に布里雅特ありて邊內の喀爾喀に異ならず其西に哈里雅特ありて界內の唐努烏梁海と亦相同じ蓋し克魯倫、敖嫩兩河の間は元代發祥の地にして固より蒙古族據有の處たり其北に林木中の百姓あり元初之を取る巴爾呼、布里雅特、烏海の屬即是なり元より明を經、皆蒙古に服屬す

案するに元朝祕史卷十二に兎兒年、成吉思命二拙赤一領二右手軍一、去征二林木中百姓一云々、斡亦剌、禿巴思諸種都投降了とある諸種を李文田の注に据二元槧本所一列一、曰不里牙惕、曰巴兒渾、曰兀兒速惕、曰合々納思、曰康合思曰禿巴昔、共六部と云へり不里牙惕は即ち布里雅特、巴兒渾は即ち巴爾呼なり巴爾呼、巴爾渾又巴兒忽眞、巴爾忽歹とも云ひ同一なることは猶ほ兀良合、兀良罕、兀良合眞、兀良

喀木尼罕

合歹の同一なるがごとし蒙語の變化にして相異なるに非ず

明末に至り露人南侵し漸く之を併呑す時に清朝も亦滿洲に起り西北部落を蕩平し索倫を征して雅克薩に至る索倫は遼伐の後と稱し契丹族にして蒙古と少異あり打牲射獵を以て業と爲し黑龍江の南北に跨り山林の中に居る雅克薩は黑龍江の北に在り索倫人博果爾の所屬たり清人之を獲其の部屬を黑龍江南に移す時に露人既に尼布楚に在り然れども未た清軍と相値はざるなり既にして露人又進みて雅克薩に佔據す索倫の留りて南に移らざる者之に屬服す所謂る喀木尼罕是なり

案するに異域錄伊辭謝柏興に鄂羅斯呼=索倫一、爲=喀穆尼漢一、又呼爲通古斯一、俱畜=鹿以供=乘馭駄載一其鹿灰白色、形似=驢騾一有レ名曰=俄倫一、又黑龍江外紀に索倫族類至繁、有=敖喇、都喇爾、布喇穆等姓一、布特哈、呼倫貝爾皆有レ之、在=齊々哈爾、墨爾根、黑龍江一者寥々、亦有レ流=寓俄羅斯一者上、其國謂=之喀穆尼漢一、又謂=之通古斯一、蓋羅殺作レ亂劫去者、數十年前、嘗有レ願レ歸=故土一之請、今不レ聞と見ゆ喀穆尼漢は喀木尼罕なり又喀木尼堪に作り開國方略に招=服喀木尼堪部葉雷等一、閱=八月一始還とある是なり蓋し索倫の一部にして俄倫春人等と同く鹿を使へる者なり黑龍江外紀は露人に劫されて彼國の領域に率て往かれし者の如く云へど其實必ずしも然らず黑龍江北を其の鄉土とせる者あり界内に在るこそ反て移し入れられたる者なし索倫人の露國に屬する者猶ほ多し異域錄昂噶拉河に鄂羅斯與布喇特及索倫人等雜處、厄爾庫城に于布喇式、索倫、鄂斯提牙科兀良哈、克爾給斯等打牲人、

布里雅特人露籍に入る

令=其交=納貂鼠狐狸銀鼠灰鼠皮張一、不=打牲之布喇式、索倫等人、毎歲人各納=銀錢二百文一などあり布喇式は布里雅特と同一なるべし

清廷是に於て其の索倫の舊地に係れるを以て雅克薩を爭ふ然れども尼布楚に至らずして止む蓋し中間喀爾喀を隔て力の能く及ぶ所に非るを以てなり故に康熙二十八年の界約、之を收むること能はずして遂に露人の佔據に任せ巴爾呼を移して之を黑龍江南に置き布里雅特は置て問はず是時に當りて喀爾喀、喇嘛に心醉し志氣委靡し復た古の蒙古に非ず準噶爾、釁を伺て劫掠し喀爾喀、南に走りて之を避く而して布里雅特全く露籍に入る

案するに布里雅特、巴爾呼は初、拜喀勒湖東の部族なり元朝祕史一卷に當初濕勒巴兒忽眞地面的主人、名=巴爾忽歹篾兒干一、有=一個女兒一、名=巴兒忽眞豁阿一、李文田云く後文三卷脫黑脫阿順=著薛凉格河一、走入=巴兒忽眞一、則其地在=今恰克圖之北一、順=色楞河一、北流、瀦爲=白哈爾湖一、此巴兒忽眞地之在=斡難河源西一者也と又朔方備乘に巴爾古錫穆和屯、在=尼布楚城西北七百里一、城西濱=柏海爾湖東岸一、南有=巴爾古錫穆河一、西注=於湖一、按祕史巴爾忽眞、必在=白哈爾湖左右一、疑即巴爾古錫穆和屯也と巴爾古、巴爾呼同く白哈爾、柏梅爾、拜喀勒皆同く今の貝加爾湖なり又元史譯文證補尤亦補傳の注に西書を引て云く拜喀勒湖東、有=庫里、廓拉施、不里牙特、土默特四族一、總名レ之曰=巴兒古特一云々と此れ西書も亦、巴爾呼、不里牙特の貝加爾湖東に在りしを傳へたるなり巴爾呼の原と黑龍江南に在らざりしこと知るべし而

して尼布楚は蓋し布里雅特の地なり康熙三十九年の上諭に尼布楚等處、原係布拉忒烏梁海諸部落之地、彼皆林居、以捕貂爲業人稱樹中人とあり布拉忒は布里雅特なり巴爾呼、布里雅特倶に蒙古部族にして一を移して一を移さゞるは巴爾呼は時に車臣汗に屬せる故なるべし然ども巴爾呼も亦悉く移されたりしに非ず猶ほ留まりて故地に在る者あり即ち奈瑪爾部是なり但平定羅刹方略二十七年に索額圖等奏言察鄂羅斯所據尼布楚、本係我茂明安遊牧之所、二十八年に索額圖等以鄂嫩、尼布楚係我國所屬茂明安諸部落舊址、雅克旌係我國人阿爾巴西等故居、後爲所竊據、細述原委、開示之云々と云へば尼布楚を爭はざるに非るも其は折衝上の便利に供せるのみにして眞に之を爭はんと欲せしに非ず故に索額圖傳に索額圖奏言、尼布楚、雅克薩應仍歸界內、上曰、以尼布楚爲界、則俄羅斯遣使貿易、無棲託之所、彼若乞與尼布楚、可即以額爾固納爲界と此れ始より尼布楚を露人に與ふるを以て清廷の內示とせるなり使臣の之を爭ひしは雅克薩容易に收回せんが爲めにせしのみ茂明安の尼布楚に居りしは何の世に在りしを知らず露人之を佔據して殆と五十年、誰か復た此の曖昧なる地主を認むる者あらんや其の主張の理無きは清廷も亦之を知らざるに非ず況や始より力爭せる地に非るをや故に上旨は始より之を爭はざるに在りて三十九年の上論、唯〻尼布楚の布拉忒、烏梁海の地たるを云ひて茂明安に及ばず巧獪の口氣と謂ふべし

烏梁海に至りては此時未た眞主あらず和托輝特に近き者は和托輝特に屬し準噶爾に近き者は準噶爾に屬し露國に近き者は露國に屬し甚しきは彼此に兩屬せる者あり其間、紛糾の處無きこと能はず故に雍正五年に至り再たび界約を訂し喀爾喀北邊始て分界あり界外界內の部落、同一種族にして劃然分れて其の所屬を別にす而して烏梁海の兩屬を停め各〻其界の主に歸せしむ今の界外の哈里雅特は此時分つ所の烏梁海のみ

案するに雍正五年以前は此の境界無く主倫無し彼此の往來自由にして界內界外殆と一國の如し此の如くにして紛爭無かりしは唯〻其の同種相親めるが故のみ而して蒙古人の無智寡慾なるは其間互に大利の爭ふ可き者を看出さゞりしが故に黑龍江界約以後、殆と四十年、事無きを得たりしなり然るに虎視眈々、其欲遂々たる露人、漸く南下する者多く遂に一大金穴を發見するに至り永遠の平和、終に保つ可らずして恰克圖界約成る蓋し恰克圖界約は平地に波を起せる者に非す一波瀾あり已むことを得ずして之を訂結せるのみ余前に銀山の事を擧げて既に疑を存せり後、隆科多の傳を閱するに雍正四年に於て命往議俄羅斯邊界事とあり唯〻此の一句、未た其內何如の界事ありしを詳にせざれども雍正五年訂約以前に邊界の糾紛ありしことは掩ふ可らざるの事實とす是に由て之を推すに銀山の事、決して虛傳に非ず又藩部要路喀爾喀部雍正五年に命策凌、偕內大臣四格等、赴楚庫河、與俄羅斯使薩瓦、立石定界、策凌陳兵、鳴礮謝天、四格歸劾奏議罪、應削爵、詔罰俸三年、免削とあり界約を訂結せるは平和を保つ所以にして礮を鳴らして天に謝せるは之を喜ぶ所以なり而る

新舊巴爾呼

に劾奏議罪となる因て知る此事、實に割地讓與に係り清廷に於ては決して祝す可きの事に非ず耻づべきの事たるを諸書の多く書さゞるは蓋し之を諱みてなり益〻信ず銀山讓與の說の眞實なるを然れども是より以後、此界劃然、今に至りて絕て紛爭の事無きは亦喀爾喀の幸なり

巴爾呼既に移されて黑龍江南に入る是より先、大軍の雅克薩を攻むるや巴爾呼の投誠せる者少からず清廷之を齊々哈爾附近に置き佐領を編み之を旗兵に比す（但呼倫貝爾に散在せる者無きに非ず）

案するに龍沙紀略に大軍征二俄羅斯一來歸編一旗充一兵者二百四十人、即以二其人一爲二佐領一と云へるは是なるべし

因て新に移す所の者を以て之を呼倫貝爾一帶地方に置く是に於て始て新舊巴爾呼の稱あり齊齊哈爾に在る者を舊巴爾呼と稱し呼倫貝爾に在る者を新巴爾呼と稱す而して舊巴爾呼は兵丁二百餘人、四佐領を設くるのみ新巴爾呼に至らは最も多くして編て八旗に分ち特に副都統を設けて之を管せしむ後乾隆二十二年に至り又額魯特の歸降せる者を呼倫貝爾を附牧せしむ故に今、呼倫貝爾に新巴爾呼及び額魯特の兵あり而して額魯特に輔國公一、一等台吉一あり新巴爾呼には雲騎尉世職あるのみ齊々哈爾の舊巴爾呼は其總數若干なるを知る可からざるも呼倫貝爾の新巴爾呼、額魯特及ひ索倫、舊巴爾呼は喜慶中合計四千二百九十三戶、大小人口三萬六千八百五十人にして副都統の管する所の總管以下の職員左の如くなりきと云ふ

區分	總管	副總管	佐領	驍騎校	護軍校
索倫、舊巴爾呼	二	四	二十四	二十四	○
新巴爾呼	二	四	二十四	二十四	○
額魯特	一	○	二	四	二

○索倫舊巴爾呼とあるは索倫人と舊巴爾呼人とを合併管理せるなり

此表の舊巴爾呼人は呼倫貝爾の少數なる舊巴爾呼にして舊巴爾呼の全數に非ず故に總管以下職員の數新巴爾呼と相同しと雖、其實は此内八分の一を舊巴爾呼の數とす其餘は皆索倫に屬し舊巴爾呼の有する所は佐領三、驍騎校四、外に雲騎尉世職八あるに過ぎずと云ふ

一佐領の下、新舊巴爾呼、索倫は領催四、披甲四十五を置き額魯特は領催六、前鋒十三、披甲五十三を置く此れ呼倫貝爾副都統下の旗制なり

案するに是に由りて之を算すれば舊巴爾呼は百四十八、新巴爾呼は一千百七十六、額魯特は百四十四、共計一千四百六十八人此れ呼倫貝爾の蒙古兵の總數なり

其の露籍に入れる者は余、其の何如にか管理せるを知らず唯〻喀爾喀界外に蒙古ある所以の緣由は大略此の如し

第四編　漠西額魯特

第二十章　天山北路及ひ青海、西套地理

一　天山北路地理

天山山脈

新疆の中央に位し最も高大にして連峰屏立し阿克蘇北境の汗騰格里山より哈密の北山科舎圖嶺に至り袤延二三千里に亘り以て横に南北を割せる者を天山々脈とす其北を天山北路と稱し原と額魯特部遊牧の處たり其間、天山正幹の外、旁支數條、蜿蜒として北に出で以て小區分を劃し東偏に在りては托來山（或は套來、陶賴に作る）より分れて北に走り折れて東行し（巴里坤の所謂る北山）又南に繞り中に七八百里の地を環抱す此を鎮西廳屬の地とす西偏に在りては額林哈畢爾噶山の西に於て分れて二支となり一支正北行せる者は呼圖壁、瑪納斯兩河の西流を阻遏し北面古爾班通古の沙地と偕に迪化府境を劃し一支西北行せる者は伊犁の北山となりて汗騰格里正幹諸山と偕に伊犁府境を其間に挾み其の西北端より折れて東南行し更に二支に分れ其の一支直行せる者は益々東南して前の一支正北行せし者と會し庫爾喀喇烏蘇、精河（或は晶河に作る）二廳境を包擁し折れて東行して迪化府、塔爾巴哈台廳交界の處を劃して古爾班通古の沙地中に入り其の旁行せる者は北に折れ東に繞りて塔爾巴哈台の西界を成し東北、阿爾泰山と相望む此れ天然の境界より出で人爲の能く分劃せし所に非ず唯々伊犁の西境、

塔爾巴哈台の北境は少しく此の天然の境界に缺けたる處あり露清交界の曾て糾葛せし所以は此が爲めのみ

山脈既に此の如し故に天山北路の水は大抵四面、諸山の圍む所となり大川を成すこと能はず低處を求めて湖澤とならざれば沙磧に入りて無尾の川となり然らざれば沮洳して葦湖となる烏魯木齊境の北境の如き即ち是なり而して伊犁の西、塔爾巴哈台の北は障屏に缺くる所あるが故に伊犁河獨り衆水を挾みて境外に奔り額爾濟斯河亦科布多の南境より來りて塔爾巴哈台境を横截して西北、露境に進入す然れども此の二水も亦、界外に在りて終に湖澤に歸するを免れず此れ天山北路山川の概觀なり而して乾隆以後、準噶爾滅びて額魯特殆ど遺噍無く人民を移し屯田を興し駐防を置き驛站を設け今や府縣林立し戸口繁殖し復た古の天山北路に非ず今其の地理を叙する先づ山川湖澤、府縣城堡、軍台驛站等の各項を分ちて逐次説起せん

雅爾瑪罕山
庫舎圖嶺

甲、山川湖澤

雅爾瑪罕山は巴里坤鎮西廳の東南三百里に在り其脈、庫舎圖嶺より來り東行すること一百里、峻拔して此山となり殆ど廳の東南界上に聳え此を天山々脈最南端の山と爲す

庫舎圖嶺（或は科舎圖嶺に作る）は即ち巴里坤の南山、鎮西廳の東南百五十里に在り嶺を踰ゆれば則ち哈密界たり山脈、西、烏可克嶺より來る兩嶺の山徑稍々平なり故に開て南北通行の大路とす初、未だ

烏可克嶺

托來嶺

哈套山

察罕哈瑪爾山

此嶺を開かざる時、巴里坤に入る者は皆、烏可克嶺より迂回して入る雍正七年、清廷、岳鍾琪をして大軍を巴里坤に駐せしむ十一年、將軍查郎阿、始て南山の運路を開き數十折して嶺頂に達す此道よりして哈密に往けば僅に三百三十里、最も捷徑とす庫舍圖は有碑の義、山口に唐の左屯衛將軍委行本の立碑あり因て名づく今俗に此を東打板と稱す打板は嶺なり嶺下北行十里を招摩多と云ふ此道、營塘を設く招摩多は即ち松樹塘なり

烏可克嶺は鎭西廳の西南百五十里に在り亦南北の孔道に當り俗に稱して西打板と云ふ東西兩打板相望て山脉連接し相距ること殆ど三百里、西打板より出でゝ哈密に至るは五百四十里とす故に今、哈密に赴く者は此に由らず唯々吐魯番に赴く者のみ必ず此に由る嶺脉東行すること五十里、和洛圖嶺となる和洛圖嶺は鎭西廳の西南百里に在り亦通道の衝に當る其脉折れて東北行し阿勒札噶勒山となる阿勒札噶勒山は鎭西廳の西北八十里に在り其の支峰を鄂什奇山とす

托來嶺は鎭西廳の西南百九十五里、烏可克嶺の西に在り山脉、博克達山より來り鎭西廳鎭西南境を爲す托來布拉克其の西麓より出づ

哈套山は鎭西廳の西北百八十里に在り其の北界障屏となる西南、托來嶺に接す

察罕哈瑪爾山は哈套山の東に在り近く鎭西廳に接し相去ること僅に北四十里、其南は則ち巴爾庫勒諸爾なり

阿達干山

哈布塔克

額得墨克嶺

托克喇山

阿拉癸山

哲爾格斯山

阿達干山は鎭西廳の東北二百里、察罕哈瑪爾の東に在り庫克托木嶺は河達干山の東に在り俱に山脉、哈套山より來り此に至りて折れて東北行し五百里にして鎭西廳界を出でゝ沙磧に入る

哈布塔克は鎭西廳の西北四百里に在り四圍皆沙磧にして山北六十里を科布多屬の布拉干河とす拜塔克は鎭西廳の西北境にして哈布塔克の西百十五里に在り塔克は回語に於て山の義たり天山北路の山、唯々此の二山、回語を以て名づく乾隆の初、清廷、準噶爾と和議を講ぜしとき分界の線、此の二山を以て巴里坤屬と爲す

額得墨克嶺は托來嶺の西七百餘里に在り闢展の北に當り迪化府境に屬し博克達山の支峰に屬す博克達山は天山々脉の高嶺にして三峰突起し崇高雄偉迪化府東南境の一大障屏なり闢展の西北二百里に在りて四近諸峰の祖山たり博克達は神靈の義、古の所謂る句、奴其下を過るとき馬を下りて羅拜せし者は豈に是に非ずや

托克喇山は博達克の西南百六十里、迪化府の東南五十里に在り山脉、哲爾格斯山より東行し此に至り折れて北行す

阿拉癸山は托克喇山の西南二十里に在り廻化府の正南に當る山南谷間、險阨にして土城あり吐魯番より褡勒都斯に至るの關隘たり

哲爾格斯（或は哲爾奇斯）山は阿拉癸の西北三十里に在り山脉、孟克圖嶺より來り東北行すること四

烏可克嶺

十里にして烏可克嶺となり又三十里、此山となる

烏可克嶺（西打板の烏可克嶺と異なり同名異山、相混ず可らず）は廸化府西南の障屏たり孟克圖嶺は其西に位し昌吉縣の南に當る

哈屯博克達山

哈屯博克達山は綏來縣の南に位し孟克圖の西北三百里に在り山勢峻聳、然れども博克達に及ばず故に哈屯を以て之に擬す

古爾班多博克山

古爾班多博克山は哈屯博克達の西四十里に在り瑪納斯の南に位す額林哈畢爾噶山は古爾班多博克の西北六十里に在り亦名山なり額林哈畢爾噶は硬肋の義、元首の左右に在るべき者、然らば博克達山の左右に在る者は皆以て此稱を得べきに此山獨り此稱を專らにす名山たる所以なり

額布圖嶺

額布圖嶺は額林哈畢爾噶の西三百里に在り其脉、伊犁南境の汗騰格里山より來る汗騰格里の脉、此に至りて數支に分る額布圖山は方に分脉の處に位す烏得音郭勒嶺は其西南五十里に在り納喇特嶺又其の西南六十里に在り

汗騰格里山

汗騰格里山は納喇特嶺の西五百里に在り東北、伊犁府に至る百五十里、山脉、西南の木素爾嶺より來る是に至りて二支に分れ一支は東北行して蜿蜒五百里、納喇特嶺となり一支は東南行して南路の拜城、賽喇木、庫車の北より折れて北行し又折れて西し前の一支に合す此山二支分出の處に當る故に山勢尊儼にして群峰の拱する所たり因て天山の主峰を以て目せられ汗騰格里の名あり騰格里は天の義なり

木素爾嶺

木素爾嶺は汗騰格里の西南四百里に在り峰巒峻拔にして氷雪嵯峨たり盛夏と雖、曾て消ゆること無し故に木素爾と稱す木素爾は氷雪の義、即ち古の凌山なり伊犁、阿克蘇の孔道たるを以て氷を鑿ちて道を開き僅に往來を通ず氷梯滑脫、誤て跌けば無底の谷に墜つ人馬の骨、道上の狼藉たり誠に畏途と爲す然れども此地、其の捷徑たるを以て達巴齊を置きて日々氷を鑿ち道を修めしむ達巴齊は嶺の役戶なり天山南北兩路の交界、此に至りて盡く

巴爾巴什山

巴爾巴什山は廸化府の西北三十里に在り通古斯巴什山は其西二十里に在り雅瑪理克山は昌吉縣の西南五十里、昌吉河の西、洛克倫河の東に在り阿顏台和洛山は其西四十里、洛克倫河の西に在り巴顏哈瑪爾山は又西五十里、呼圖壁河の西、圖古里克河の東に在り博羅哈瑪爾山は又其西七十里、陽巴爾噶遜の南に在り哈屯博克達山の北に當る奇喇圖魯山は博羅哈瑪爾の西五十里、瑪納斯の西、烏蘭烏蘇の東に在り阿爾噶里圖山は其西二百里、奎屯台の西北に在り以上諸山は皆廸化府西五百里以內に在る者にして天山の脊脉兒孫たり

哈喇古顏山

哈喇古顏山は額布圖嶺の西北二百里に在りて額布圖嶺に於て分脉し西北折して此山となる孤峰聳立し更に西北走して伊犁の北山となる博羅布爾噶蘇山は哈喇古顏の西百里に在り塔勒奇山は其の西北に在り均しく同一山脉上に列れり

阿布喇勒山

阿喇布勒山は博羅布爾噶蘇の南に在り其脉、額布圖嶺より分れ西行、此に至り盤結して此山となり伊

博羅和洛山

薩爾巴圖烏蘭布喇嶺

哈什山

巴爾魯克山

犁の正東に位す俗に獨山子と稱し山脈此に止まり復た西行せず乾隆二十一年、定北將軍班第、參贊鄂容安の節に殉せし所なり

博羅和洛山は塔爾奇山の南谷口の西北百里に在り其西を烘郭爾鄂博と云ふ亦山脈、額布圖嶺より分れて此に來り更に分れて二支となり其の西北なる一支は曲折すること五百里にして北、格登山に至り其の東北なる一支は博羅塔拉の西北を繞り折れて東行し遂に阿爾泰山脈の分れて西行せる者と連接す（博羅塔拉は精河廳の西に在り）

薩爾巴圖烏蘭布喇嶺は博羅和洛山の北百里、博羅塔拉の西に在り罕哈爾察海山は博羅和洛の北二百里に在り博羅塔拉の西北境たり庫克托木嶺は罕哈爾察海の東北、博羅塔拉の北境に在り阿勒坦特布什山は罕哈爾察海の東二百里、博羅塔拉の西北一百五十里に在り原と塔爾巴哈沁部の遊牧にして賽音伯勒克の昂吉たりと云ふ

哈什山は伊犁惠遠城の東北三百里に在り山陰を庫爾喀喇烏蘇境とし山陽を伊犁の圍場とす索果爾嶺は惠遠城の東南二百十五里、索果爾軍台の南二十里に在り鐵を產す阿爾台山は惠遠城の東南二百餘里、特克斯河の北に在り哈升嶺の惠遠城の西南二百里に在り重岡複巒、六十里に亘る其西は今悉く露境に歸す此れ皆伊犁の諸山なり

巴爾魯克山は塔爾巴哈台綏靖城の南二百餘里に在り巴克圖山は城西七十餘里に在り鄂爾和楚克山は城東二百餘里に在り此より東北行すること百五十里にして朱爾庫朱山に接し一支南行して沙地に入り薩里山、色伯蘇台山となる薩里山は城東六百餘里の遠處に在り塔爾巴哈台山は朱爾庫朱山の西北百里に在り城の北屏たり是より西南行して鄂爾和楚克山に至り其脈、博羅塔拉の西北を繞れる伊犁北境の一支に會す賽爾山は城東二百七十里に在り其東を和博克薩里と爲す即ち北路土爾扈特三旗の駐牧する處たり此れ皆塔爾巴哈台屬の諸山なり

天山北路の水

巴爾庫勒諾爾

圖爾庫勒

鎮四廳の水

天山北路の水は大抵、天山積雪の融化せる者、故に夏秋の交は一時暴漲して大水を成せども冬春の際には枯渴して殆ど河川の形跡を認め難き者あり其大なる者は常に流れて諸爾に停滀し其小なる者は諸爾に歸せず或は沙地に滲入して往く所を知らず故に今、諸爾に會せる諸水よりして之を列擧せん

巴爾庫勒諾爾（或は巴爾郭勒に作る）鎮西廳の西北十五里に在り周り百二十餘里、其源、南山の麓に出づ此を巴爾庫勒とす庫勒は河川の義、今巴里坤と稱せる者は訛轉なり巴爾庫勒の水西北流すること百餘里、潴して諸爾となる故に巴爾庫勒諾爾と稱す蓋し漢代の蒲類海なり

圖爾庫勒は鎮西廳の東三百里に在り亦南山の北麓に出で東北流すること五十里、潴して池となる鹽池山の南に在り

鎮西廳界の水、此餘は皆至小にして多くは北山後の沙磧中に出づ擧ぐるに足らざるなり廸化府界の水烏魯木齊以東は多く沙磧葦湖に入り烏魯木齊以西は大抵額彬格遜諾爾に歸す

額彬格遜諾爾

羅克倫

胡圖克拜河

瑪納斯河

烏蘭烏蘇

額彬格遜諾爾は又阿雅爾諾爾と云ふ天山北路中湖澤の最大なる者にして府の西北、安濟哈雅軍台の北二百餘里に在り橢圓にして東西斜長百數十里、南北廣さ數十里、東西北の三源あり羅克倫、胡圖克拜、瑪納斯、木丹莫霍爾岱等の諸河皆之に歸す

羅克倫（或は洛克倫に作る）河は孟克圖嶺の北麓に出で兩源あり雅瑪拉克山の西を經て相會し北流して羅克倫軍台の東を經、凡そ北流すること二百餘里にして折れて西流し胡圖克拜河に會す

胡圖克拜河は即ち呼圖壁河にして景化城南八十里の松山より出て五源並び出て合て北流すること二百里、羅克倫河と相會し折れて西流し又二百餘里にして清水峽の南を經、額彬格遜諾爾の東南よりして之に注ぐ此に其の北源とす

瑪納斯河は哈屯博克達山の北麓より出で亦五源あり水源、綠玉を產し水清し故に又清水河と稱せられ北流して東來の古爾班多邦水を併せ又西來の古爾班札海水を併せ山間を出で瑪納斯と稱す又北流して陽巴爾噶遜の西を經、百餘里にして折れて西北流し又百五十里にして烏蘭烏蘇に會す

烏蘭烏蘇は古爾班多博克山より出づ因て其山を稱して或は烏蘭烏蘇山と云ふ瑪納斯の西七十餘里に在り二源あり東を庫克河と云ひ西を錫博圖河と云ふ俱に北流して相會し烏蘭烏蘇軍台の西を經、折れて西北流すること百餘里にして瑪納斯河に會し又百餘里にして額彬格遜諾爾の西南隅よりして之に注ぐ此を西源とす

木丹莫霍爾岱河

鄂倫諾爾

烏魯木齊北界

庫爾喀喇烏蘇

精河

木丹莫霍爾岱河は塔爾巴哈台交界より出で南流すること甚だ遠からず額彬格遜諾爾に遇ひ北隅よりして之に注ぐ此を北源とす以上皆額彬格遜諾爾に歸する者にして烏魯木齊の西界に在り

鄂倫諾爾は天山の北麓に出で北流すること百里、瀦して諾爾となる周り僅に三十里、烏魯木齊東界の小澤なり

烏魯木齊の北界は大抵葦湖にして連天渺茫、涯際を見ず皆北流諸小水の浸潤して沮洳を成す所と云ふ庫爾喀喇烏蘇、精河二廳界の水は皆布勒哈齊諾爾に入る布勒哈齊諾爾或は喀喇塔拉額西柯諾爾と云ひ又博羅塔拉鄂模と云ふ精河廳の北百三十里に在り東西百五十里、南北八十里、周り四百餘里、鹽を產す伊犁の鹽、皆給を此に仰ぐ故に亦鹽海の稱あり庫爾喀喇烏蘇、晶河、薩爾巴克圖河等の諸水、皆此に注ぐ庫爾喀喇烏蘇河は上源を奎屯河と稱す額林哈畢爾噶山の北に發し北流して山を出で慶綏城の東を經、折れて西北流し始て庫爾喀喇烏蘇と云ふ又西北流し濟爾噶朗河を併せ又西北流、額布圖河を併せ遂に西、布勒哈齊諾爾に歸す濟爾噶朗河は三源あり皆南山に發し初、古爾班恰克圖水と名づけ西北流して布爾哈齊軍台の西を經、濟爾噶朗河と云ひ又多木達喀喇烏蘇と云ひ布爾哈齊水之に入る額布圖河（或は額卜推河）は額布圖嶺より出で又固爾圖喀喇烏蘇と云ふ三喀喇烏蘇皆會し俱に布勒哈齊諾爾の內に注ぐ

精河（或は晶河）は安阜城の南、伊犁北山の陰に出づ亦三源あり故に古爾班精河の稱あり（古爾班は

三の義）西北流して布勒哈齊諾爾に歸す

薩爾巴克圖河

薩爾巴克圖河は伊犁の和爾郭斯境北山の陰より出で亦三源あり古爾班拜雜爾河と稱せらる東北流し察罕烏蘇河を併せ薩爾巴克圖河と云ふ又東北流、庫克托木河、庫克托木嶺より發し西北より來りて之に入る又東北流、鄂拓克賽里河、賽喇木淖爾の西北博羅和洛山より出で東北流して之に入り更に東流し博羅塔拉河、北山より出で南流して來り會し拜嶺水又南流して來り會し又東流、庫森木什克河、伊犁の北山陰より發し北流して來り會し東、遂に布勒哈齊諾爾に歸す

伊犁界の水

托里水は托里軍台の西に在り瀦して小澤となりて諾爾に歸せず其東三十里に又蓮澤あり周に數十里、俗に折腰湖と稱し原名未だ詳ならず

伊犁界の水は伊犁河より大なるは莫し伊犁河は天山北路第一の巨川たり伊犁界内を西流すること數百里、南北大小諸水を合せ益〻大にして走りて邊外に出で遠く哈薩克（今に露領）の巴勒喀什諾爾に入る其の上源二あり其一東南源を空格欺河と云ひ額通古里嶺の西麓より出て西北流すること三百餘里にして都爾伯勒津の西南に至り特克斯河に會す其一西南源は即ち特克斯河にして南、汗騰格里山の麓より出で東北流すること數百餘里にして北、空格斯河に會し兩源合して西流し始て伊犁河の稱あり

哈什河

哈什河は哈喇古顏山の南麓に出で空格斯河の北に在り兩河の間に特穆爾里克嶺を隔て嶺南の水は皆空格斯河に入り嶺北は皆哈什河に入る哈什河西南流すること二百四十里、都爾伯勒津に至り西、伊犁河に歸す哈什河の伊犁河に會する處、沃壤最も多く回民之を耕し皆河水を別て灌漑の用に供す

勒奇河

塔勒奇河は塔勒奇山の南谷口外に出でゝ西南流すること百二十里、亦伊犁河に入る察罕烏蘇は塔勒奇河の西に在り三源あり合して一河となり南流甚だ遠からずして亦伊犁河に入る

阿里瑪圖河

阿里瑪圖河は惠寧城北の阿里瑪圖山より出づ河邊に果樹多し因て名づく河里瑪は菓子の義なり南流して伊犁河に入る亦漑灌に便なり

和爾郭斯河

和爾郭斯河（或は霍爾果斯）は拱宸城の西二十里に在り北境松山より出で南流して伊犁河に入る此河以西、光緒七年、割て露領に歸し復た清國の版圖に非ず故に今記せず

特克斯河

特克斯河は伊犁河南の大水にして伊犁界南面の水皆之に入り初、北流し先づ哈布哈克河を併せ折れて東流し喀喇河、阿爾雜木素爾、格登、噶克察哈爾海、喀喇烏蘇諸水、南より來りて之に注ぎ哈升、沙喇諸海、哈爾罕圖諸水、北より來りて又之に注ぎ是に於て始て東北流して又華諾輝、華托羅海等の羅來諸水を併せ察罕烏蘇、阿圭雅斯、古爾班特勒克等の南來諸水を併せ漸く東流し又北、雪爾圖、塔爾巴札圖博爾諸水を併せ南、庫克烏蘇を併す而して莫霍爾、濟爾噶朗諸水も亦西北流して之に入り伊克濟爾噶朗河は東より多木達濟爾噶朗河は南より俱に來りて之に入り遂に北流して空格斯河に會し伊犁河となる源より此に至る屈曲行凡そ九百里と云ふ

賽喇木諾爾

賽喇木諾爾は惠遠城の正北二百里、松樹頭嶺の下に在り形狀南に鋭にして北に豐なり南北百二三十里、

東西五六十里、又察罕賽喇木と云ふ其の東北隅に二小池あり俗に海耳と稱す布哈布拉克、博碩圖河等の水之に注ぐ

塔爾巴哈台界内の水

塔爾巴哈台界内の水は額爾濟斯河より大なるは莫し然れども科布多界より來り又西に過ぎ去りて露境に入る其間甚だ長遠ならず其の源を塔爾巴哈台界内に發せる者は唯〻額密爾河を推して最と爲す

額密爾河

額密爾河、(或は葉米爾河に作る)は兩源あり一は鄂爾和楚克山の南麓に出て錫伯圖河と云ふ此を塔北源とす其の東南源を固爾圖河と云ふ固爾圖は塔爾巴哈台城の東南二百餘里の郭哲爾德山に出て西北流して茂海柯凌山の下に在りて錫伯圖河に會し始て額密爾河と稱す楚和楚河、楚和楚山より出でゝ之に注ぎ遂に邊外に走りて阿拉克諾爾に歸す

額爾濟斯河

額爾濟斯河は東北、科布多の阿爾泰山下より出で西流して界内を過ぎ齋桑諾爾に歸す齋桑諾爾、阿拉克諾爾は均しく哈薩克界に在りて今、露領に屬す

阿克哈巴河

阿克哈巴河は阿爾泰山の西麓に出て西南流して哈拉哈巴河に會し露清交界の河となり南流して遂に額爾濟斯に入る兩河會する處の西を薩斯山灣と云ふ薩斯山灣中の諸泉、合して阿拉克別克河となり亦額爾濟斯に入る今此を露清の分界とし其西皆割て露領に歸す

哈納斯河、孫都魯克河、皆阿爾泰山の西南麓に出て合て博爾集河となり庫魯河、克木齊克河も亦阿爾泰の西南麓に出て南流して奇蘭河に入り俱に額爾濟斯河に歸す

嚕勒札巴什諾

特里諾爾

嚕勒札爾巴什諾爾(或は奇薩勒比斯、乞則里八寺、赫色勒巴什等に作る)は科布多界の烏倫古河の滙する所にして又烏隴古諾爾の稱あり科布多、塔爾巴哈台兩界に跨り東西七十里、南北三十里、或は云ふ大小二湖、相連なりて形、葫蘆に似たりと

特里諾爾は嚕勒札爾巴什諾爾の西南沙磧中に在り正圓にして鏡の如し(特里は鏡なり)大さ嚕勒札爾巴什に次ぐ界内納木河、和博克薩里河の滙する所なり

乙、府縣城堡

天山北路は漢に於て西域三十六國の外に在り初、武帝、博望侯張騫をして西域に通せしめ三十六國皆至る然れども當時往來多く南道に在り北道の北、猶ほ別國あるを知らざりしなり其後征和四年、重合侯馬通をして四萬騎に將として匈奴を擊たしむ道、車師の北を過ぐ蓋し北路の通せしは此より始まる其後、白龍堆の阨を避け新道を開き里程の半を減ず車師後王國、正に其衝に當る是に於て山北六國も亦通ず

案ずるに漢の西域に通する南北兩道あり俱に今の天山南路に屬し今の所謂る南路、北路と異なり而して北道は古の所謂る北山即ち天山山脈に沿て西する者にして所謂る白龍堆は哈密吐魯番南の大戈壁なり北道を行く者、初之を避くることを知らずして人馬の阨に遇ふ者多し後、其の避くべきを知りて始て車師後王國に到り是よりして今の巴里坤、烏魯木齊地方に通ずることを得たりしなり但當

烏孫の地
北匈奴の地

時の所謂る山北六國と云へる者、其の名稱未だ詳ならず徐松は卑陸の前後、蒲類の前後、且彌の東西、合て六國を指せり果して然らば此外の單桓、劫國、烏貪訾離、郁立師等の國は山北諸國に非るか李光廷は卑陸、單桓、劫國、烏貪訾離、且彌、郁立師を指せり此說是に近し然れども蒲類は竟に何れに屬すべき此亦定論と爲す可からざるに似たり

蓋し今の巴里坤、烏魯木齊は車師後王庭及び山北諸國の地なり伊犁は烏孫の地なり塔爾巴哈台は北匈奴の地なり

案ずるに李光廷は前後蒲類、車師後城長、郁立師諸國を巴里坤に配し車師後庭、前後卑陸、單桓、東西且彌、烏貪訾離、劫國等の地を烏魯木齊に配せり然れども此も亦的確と爲す可らず蒲類國は蒲類海に因て名づき蒲類海即ち巴里坤の巴爾郭勒諸爾なりとせば此說當れるに似たれども蒲類は本と大國にして匈奴に憎まれ國を徙されたる事實あり漢の西域に通せし時は既に天山の西谷に在りしこと漢書に詳明なれば之を車師の東に置くこと能はず大抵此等諸國は皆小國にして多くは天山の東西谷中に在り今確に其地を指すこと能はず唯〻巴爾郭勒諸爾の蒲類海なることは殆と疑ふ可き所なし後漢書西域傳に呼衍王と蒲類海に戰ひしことを載せたるに清朝となりて雍正七年、大將軍岳鍾琪の兵を巴里坤に駐せし時、石人子（巴里坤城東五十里の地）に於て一漢碑を得たり其文に惟漢永和二年八月、敦煌太守雲中裴岑、將郡兵三千人、誅呼衍王、斬馘部衆、克敵全師、除西域之疾、

闢四郡之害、邊境艾安、振威至此、立海祠以表萬世とあり其事符合し且つ所謂る海祠は蒲類の海神祠と聞ゆれば此は確據ありと謂ふべし又古城に於て乾隆四十年、烏魯木齊都統索諾穆策凌、唐の金滿縣の殘碑を得たり金滿は唐の庭州の縣名にして庭州の名は車師後王庭と云ふに取りて名づけたること明かなれば此も亦證左とすべし其他は的確なる者無し故に人々皆大略此の如きを推言せるのみ又徐松は烏孫を以て南路阿克蘇庫車の北境に在りと爲せども想ふに此も亦當れりと謂ふ可らず烏孫は大國にして戶十三萬と稱す當時三十六國及び山北六國を合算するも戶數此に及ばず天山々南、庫車以北に此の大衆を容るゝの餘地無し南路に在りとすることを得ず既に此の餘地無しとすれば之を北路伊犁に求めずして何處にか其地を得ん其實は伊犁も亦窄小にして此衆を容るゝに足らず漢書に據れば焉耆に於て北與烏孫接とあり喀喇沙爾を以て焉耆に配せば（第五編に詳なり）此れ烏魯木齊界の一半も亦烏孫の地たりしなり蓋し烏孫の地は烏魯木齊界のみならず塔爾巴哈台界、哈薩克界にも跨りしならん其の南路より烏孫に通ぜしは伊犁の始、阿克蘇より往來せしに異ならず凌山の道、或は當初より開けたりしも知る可らず未だ此をのみ取て直に南路に在りと爲すことを得ず其後屢々變遷あり唐初、西突厥に入る太宗の貞觀十四年、侯君集をして高昌を征せしめ其地に即ち庭州を置く即ち烏魯木齊の地に在り又高宗の永徽五年、蘇定方を擢てゝ伊麗道總管と爲し賀魯可汗を擊たしめ之を平げて崑陵、濛池の二都護を置く伊麗は蓋し今の伊犁なり其後、西突厥、庭州を攻めて之

を取り西突厥滅びて回鶻徙りて之に居る元、回鶻を滅し又北庭都護府を置く其地に回鶻の五城あり因て別失八里と稱す（陶宗儀の輟耕錄に別失八里、譯言連五城也とある是なり）即ち亦烏魯木齊界なり其の伊犂は西遼の有たりしこと八十年、元、西遼を滅し察合台王を封す明代に至りては北路一帶、悉く瓦拉（即ち額魯特）に據有せらる是に於て分れて四大部となり和碩特は烏魯木齊に居り準噶爾（或は綽羅斯特）は伊犂に居り土爾扈特は塔爾巴哈台に居り杜爾伯特は額爾濟斯に居る清朝之を截定し伊犂將軍、烏魯木齊都統を置て之を分轄し今に至りては二府四廳六縣を置き悉く郡縣となる其の鎮西廳は東に在り伊犂府は西に在り廸化府は南に在り塔爾巴哈台廳は北に在り庫爾喀喇烏蘇、精河西廳は廸化府の西に在りて伊犂府と塔爾巴哈台廳との間に挾れり鎮西廳、廸化府、伊犂府の南は皆天山南路にして伊犂府及び精河、塔爾巴哈台兩廳の西北は今悉く露領に屬す又塔爾巴哈台廳、廸化府の東北は即ち科布多界にして鎮西廳の東北は喀爾喀部札薩克圖汗の轄境たり此れ其の概略なり

鎮西廳は原と巴里坤の地たり清朝の雍正九年、大將軍岳鍾琪始て城を此に建つ即ち所謂る漢城なり乾隆三十八年、巴里坤廳を升せて鎮西府と爲す此より府城たり同城に宜禾縣を置き又巴里坤協標を駐す後、道光中に至り府を改めて廳と爲し今に至りて仍ほ鎮西廳たり哈密の北三百三十里、烏魯木齊の東一千二百八十里に在り其の滿城は乾隆三十七年の築造にして廳城の東南に在り會寧城と名づく城垣高さ一丈六尺、周り六里三分、領隊大臣の駐劄せし所なり

廸化府は原と烏魯木齊の地、初、唯〻土城ありしのみ乾隆三十一年、紅山の側に一城を創築す此を廸化城とす高さ二丈一尺、周り四里五分、三十八年、廸化州を內に置き提督此に駐す此れ亦所謂る漢城なり其の滿城は三十七年、都統索諾木策凌の築造に係り漢城の西八里に在り此を鞏寧城とす高さ二丈二尺、周り九里三分、都統此に駐す今此の二城を合築して一と爲し新疆省の首城とし巡撫此に駐す廸化縣は同城の內に設けらる

奇台縣は鞏寧城の東五百二十七里に在り舊堡あり周り僅に一里、乾隆四十年、縣を此に設く四十一年、之を改築し高さ一丈五尺、周り二里七分と爲し靖遠城と名づく舊、鎮西府に屬し府廢するに及び廸化府に屬す光緒十三年、一時、縣を古城に移しゝも今は其舊に復せり

孚遠縣は原と古城の地、其の漢城は奇台の西北八十里に在り乾隆三十五年の築造に係り其の滿城は四十年の築造に係る滿城高さ一丈六尺、周り四里、孚遠城と名づく領隊大臣の駐せし所なり一時、奇台縣を此に移し今は孚遠縣を此に置く

阜康縣は原と特訥格爾の地、鞏寧城の東百三十里に在り乾隆二十八年の築造に係り阜康城と名づく高さ一丈六尺、周り三里五分、四十一年阜康縣を此に置く

昌吉縣は鞏寧城の西北九十里に在り乾隆二十七年の築造に係り寧邊城と名づく高さ一丈五尺、周り三里五分、是より先、通判廳を此に置き三十八年、州同を置き尋て改て縣と爲す

綏來縣は原と瑪納斯の地、霍寧城の西二百七十里に在り左右兩城あり均しく乾隆四十二年の築造に係り各〻高さ一丈六尺、周り三里三分、左に在るを康吉城と曰ひ右に在るを綏寧城と曰ひ中に一關を設く高さ二丈三尺、南北長さ四千四百二十三丈、此を靖遠關と名づく康吉城には瑪納斯協標を置き綏寧城には右營都司を置く

以上は皆廸化府屬縣治の在る所にして此外城堡、縣治に非る者猶ほ多し

城堡

木壘城

木壘城は霍寧城の東六百里に在り雍正十年の初設にして乾隆三十七年に改築せり地を以て城に名づく

愷安城は原と吉木薩の地、霍寧城の東三百七十里に在り乾隆三十七年の築造にして高さ一丈一尺、周り二里六分、愷安城と名づく四十二年、之を展築し一面愷安城に倚り三面の城垣を築くこと長さ一里餘、此を保惠城と名づく阜康縣の屬城にして初、縣丞を分て此に駐す今唯〻巡檢を設くるのみ其の地巴里坤、烏里雅蘇台往來の衝に當る故に曾て提標參將を分駐す

時和堡は霍寧城の東三百六十里、柳樹溝に在り乾隆三十六年の築造、育昌堡は霍寧城の東三百四十里、雙岔河に在り高さ一丈一尺、周り一里五分、惠徠堡は霍寧城の東三百里、三台に在り高さ一丈二尺、周り一里六分、以上三堡築造年代詳ならず輯懷堡は霍寧城の東四十里、古牧地に在り高さ一丈五尺、周り二里七分、屢豐堡は霍寧城の東二十里、七里灣に在り高さ一丈二尺、周り一里七分、惠來堡は霍寧城の東五里、六道灣に在り高周前に同じ以上三堡は皆乾隆二十七年の築造、此れ皆霍寧城の東界に

景化城

在る者にして其の西界に屬するは

景化城は原と呼圖壁の地、霍寧城の西百四十里に左り乾隆二十九年の築造に係り高さ一丈六尺、周り三里五分、昌吉縣の屬城にして巡檢を設けて之を管し又提標右營都司を駐せし所なり

宣仁堡は霍寧城の西二里に在り兵屯の在りし所にして此を頭工と稱す懷義堡は城西十里に在り此を二工と稱す樂全堡は城西十五里に在り三工と稱す寶昌堡は城西二十里に在り四工と稱す以上四所屯堡は均しく乾隆二十七年の建置にして造堡各〻高さ一丈一尺、周り一里七分、此外、屯堡三所、頭屯所は城西六十里、蘆草溝所は城西百二十里、塔西河所は城西百八十里、戶屯を置きし所にして乾隆四十二年、之を築き各所に千總一人を置きて管理せしむ

又綏來堡は城西二百七十里、遂成堡は城西五百五十里、豐潤堡は城西八百里、唯〻此三堡は屯兵の自築に係り官の建造に非ず故に其の年代大小俱に詳ならず以上城堡皆霍寧城の西に在り

嘉德城は原と喀喇巴爾噶遜の地、霍寧城の南二百三十里に在り乾隆四十七年の築造にして高さ一丈六尺、周り二里五分、吐魯番通路に當り要阨の地たり提標守備を駐せし所とす以上均しく廸化府界に屬す

伊犂府

伊犂府は新疆省城（霍寧城）の西一千五百四十里に在り綏定城と曰ふ原と準噶爾部烏哈爾里克の地、乾隆二十七年、參贊大臣阿桂の築造に係り高さ一丈七尺、周り四里三分、屯鎮總兵の駐せし所にして

西六城の總鎮たり光緒十三年、伊犁府を此に置き綏定、寧遠二縣を管せしむ

綏定縣は綏定城内に設けられ綏定、廣仁、瞻德、拱宸、熙春、塔爾奇等六城の事務を管す

廣仁城は將軍駐劄の惠遠城の西北八十里、烏克爾博羅素克に在り俗に大蘆草溝と云ふ城垣高さ一丈三尺、周り三里六分、瞻德城は惠遠の西北七十里、察罕烏蘇に在り俗に清水河と云ふ高周前に同じ拱宸城は惠遠の西北百二里、霍爾果斯に在り高さ一丈七尺、周り三里七分、熙春城は惠遠の東八十里、巴彥岱に在り俗に城盤子と云ふ高さ一丈、周り二里二分、以上四城は俱に乾隆四十五年、將軍伊勒圖の建置せし所なり

塔爾奇城

塔爾奇城は惠遠の西北四十里、塔爾奇に在り伊犁戡定の後、第一起手の建置にして乾隆二十六年、參贊大臣阿桂の築造に係り高さ一丈、周り一里餘、最小にして別に佳名無し嘉慶七年、其の北面を展築せること四十丈、二十一年、又東面を展築せること三十丈、綏定以下六城は皆所謂る漢城にして綠營屯田兵の駐防せし所なり

寧遠縣

寧遠縣は寧遠城に在り寧遠城は府域の東南百二十里、固爾札に在り初、準噶爾の噶爾丹策凌が時、西藏を襲ひ其の重器を遷して歸り海脅克、固爾札の兩廟(所謂る金頂寺、銀頂寺なり)を建て以て喇嘛坐床の地と爲し五集賽を置て輪班供養せしむ而るに阿睦爾撒納の亂に喇嘛多く之に附和し官軍進剿し寺遂に兵燹に罹れり亂後、阿桂、回子を率て阿克蘇より入り乾隆二十七年、之を築造して以て回子を置く故に俗に回城と稱す高さ一丈六尺、周り四里餘、寧遠縣は東三城を管し今、伊塔分巡道此に駐劄す

惠遠城

惠遠城は伊犁將軍の駐處にして伊犁河の北岸に在り初、阿桂が參贊大臣たりし時は綏定城に駐す明瑞之に代りて將軍となれるに及び乾隆二十九年、別に地を相して之を築く高さ一丈四尺、周り九里三分五十八年、將軍堡寧、更に城の東偏を展築せること百二十丈

惠寧城は惠遠の東北七十里、巴彥岱に在り乾隆三十一年、將軍伊勒圖の建造、嘉慶十年、將軍松筠、西に向て移築し南北各〻接築せること百九十丈、西面新に築けること三百丈、惠遠、惠寧二城は皆滿城にして旗營の駐防せる所、領隊大臣此に駐す

精河廳

庫爾喀喇烏蘇廳は庫爾喀喇烏蘇の變綏城に在り慶綏城は鞏寧の西五百五十里に在り乾隆三十七年の初建にして四十八年、之を東北八里に移築す高さ一丈六尺、周り三里一分、舊、烏魯木齊都統に隷し領隊大臣を置て之を管せしも今、撫民廳を此に置き之を伊塔分巡道に隷す

塔爾巴哈台廳

精河廳は鞏寧の西九百零五里、精河の安阜城に在り亦乾隆四十八年の建造にして高さ一丈六尺、周り二里二分、舊、庫爾喀喇烏蘇の屬城たり今、專城となりて各〻一撫民廳を置き皆伊塔道に隷す

塔爾巴哈台廳は綏靖城に在り塔爾巴哈台は漢の北匈奴の地、唐に於て西突厥たり後、鐵勒諸部之に居る明代瓦拉に入り土爾扈特原と此に居る土爾扈特去りて露國に往き輝特之に代る清朝戡定の後、參贊大臣阿桂、乾隆二十八年、雅爾に築き未だ成らずして明瑞之に代り明年、城成る高さ一丈五尺、周り

肇豐城
綏靖城

二里四分、此を肇豐城と名づく綏靖城の西、約二百里に在り(今露領入る)三十一年、阿桂再たび來りて伊犂將軍たり雅爾の守り難きを以て城を楚呼楚に移築す高さ一丈八尺、周り二里七分、即ち綏靖城なり參贊大臣此に駐す今仍ほ其舊に依る其の廳務は撫民同知、理事衙を兼ねて之を管し伊塔分巡道に隷す

丙、軍台驛站

南道
北道

天山北路に軍台路あり營塘路あり驛站あり軍台路は首尾貫穿し營塘路は哈密より精河に至り驛站は寧城を中とし東は巴里坤に至り西は瑪納斯に至り南は吐魯番に至る此れ其の大略情形なり蓋し哈密より烏魯木齊に入るに南北兩道あり南道は直に吐魯番に至り折れて喀喇巴爾噶遜を經、烏魯木齊に達す此れ軍台路なり北道は巴里坤を繞り奇台を經、烏魯木齊に達す此れ營塘路なり兩道合一し以て西奎屯台に至る軍台營塘均しく一路の上に在り唯々軍台路は是に於て分れて二支となり一支は西走して伊犂に達し一支は北走して塔爾巴哈台に達し營塘は精河に至りて止まる今其の地名及び里程を擧ぐれば

哈密より烏魯木齊に至る軍台里程

哈密底台	六十里	頭堡台	六十里	三堡台	七十里
鴨子泉台	八十里	瞭墩台	八十里	橙槽溝台	三十里
肋巴泉台	六十里	陶賴台	八十里	托賴井子腰台	六十里
胡桐窩台	七十里	惠井子台	五十里	鹽池台	百八十里
齊克騰木台	五十里	蘇魯圖台	六十里	闢展台	六十里
連木沁台	六十里	勝金台	九十里	吐魯番底台	八十里
根特克台	百十里	哈必爾罕布拉克台	五十五里	白揚河腰台	五十五里
喀喇巴爾噶遜台	百十里	昂吉爾圖淖爾台	百二十里	鄂倫拜星底台	—

以上二十四台、共計一千七百三十里

烏魯木齊より伊犂に至る軍台里程

鄂倫拜星底台	百里	洛克倫台	百里	呼圖壁台	六十里
圖古里克台	九十里	瑪納斯台	八十里	烏蘭烏蘇台	百十里
安集海台	九十里	奎屯台	八十里	庫爾喀喇烏蘇台	七十里
布爾噶濟台	六十里	墩木達台	七十里	固爾圖台	六十里
托多克台	七十里	噶順腰台	八十里	精河台	九十里

托里台	百十里	托霍木圖台	百二十里
鄂勒著依圖博木台	八十里	鄂博勒齊爾台	四十里
沙喇布拉克台	七十里	伊犁惠遠城	—

以上二十二台、共計一千七百七十里

奎屯台より塔爾巴哈台に至る軍台里程

奎屯台	九十里	庫爾必喇台	九十里
鄂倫布拉克台	九十里	烏蘭格圖布拉克台	百二十里
沙喇瑚魯素台	百二十里	色特爾莫多台	百二十里
瑚素圖布拉克台	八十里	沙喇烏蘇台	七十里
塔爾奇阿滿台	六十里	雅瑪圖台	百二十里
塔爾巴哈台底台	—		

以上九台、共計六百三十里

烏魯木齊より塔爾巴哈台に至るは一千二百六十里、伊犁より塔爾巴哈台に至るは軍台路奎屯台を經れば一千七百七十里、卡倫より行けば一千四百三十里なりと云ふ

又伊犁より阿克蘇に至る軍台あり其の里程

伊犁惠遠城	十五里	巴圖蒙柯台	九十里
海弩克台	九十里		

索果爾台	八十里	博爾台	百里
特克斯台	八十里	沙圖阿滿台	百里
塔木哈塔什台	八十里	瑚斯圖托海台	五十里
和約伙羅克台	八十五里	阿爾巴特台	八十里
阿克蘇底台	—		—
	—		—
	—		—
霍諾海台	百里	噶克察哈爾海台	百二十里
圖巴喇特台	七十里	札木台	八十里
	—		—

以上十六台、共計一千二百二十里

哈密より烏魯木齊に至る營塘里程

哈密底塘	五十里	黑帳房塘	四十里
羊圈溝塘	三十里	松樹塘	八十里
巴里坤底塘	九十里	蘇吉塘	九十里
務塗水塘	九十里	噶順塘	八十里
烏蘭烏蘇塘	九十里	阿克塔斯塘	九十里
奇台塘	九十里	古城塘	六十里
南山口塘	四十里	奎蘇塘	九十里
肋巴泉塘	七十里	色必塘	六十里
木壘塘	九十里	濟木薩塘	九十里

三台塘	九十里	清水塘	七十里	大泉塘	五十里
阜康塘	七十里	黑溝塘	六十里	迪化底塘	—

以上二十四營塘、共計一千六百六十里

營塘は猶ほ四、綿河に至るまで之を設けられたれども里數、軍台路に同ければ之を略す

鞏寧城より巴里坤に至る驛站里程

鞏寧驛	六十里	黑溝驛	七十里	康樂驛	九十里
白揚驛	八十里	三台驛	九十里	保惠驛	六十里
孚遠驛	九十里	屏營驛	九十里	白水驛	九十里
三泉驛	九十里	三泉腰站	四十里	磐安驛	四十里
磐安腰站	六十里	巨溝驛	九十里	湧泉驛	七十里
助巴泉驛	九十里	望山驛	九十里	會寧驛	—

以上十八驛、共計一千二百九十里

烏魯木齊より吐魯番に至る驛站里程

鹽池驛	百二十里	望墩驛	百里	達巴罕根腰站	六十里
山陽驛	八十里	通津驛	九十里	蘆溝驛	八十里
吐魯番陽和驛	—	—	—	—	—

以上七驛、共計五百三十里

烏魯木齊以西、瑪納斯に至る驛站は軍台路と里程全く相同くして其名を異にせるのみ故に今亦之を略す

凡そ里程は諸書頗る異同あり準據とし難し今暫く新疆識略の所載に依る

二　青海、西套地理

青海の義

青海の地たる挾まりて甘肅省と前藏との間に在り前藏、南に當り甘肅、其北及び東を擁し東南は四川たり西面一帶は新疆たり地勢甚だ高くして四面殆ど山を以て圍繞せらる唯々其の西北のみ沙磧草地多くして稍々平夷なりとす而して青海は今に至りて大半は蕃族の居る所にして蒙古は其の東北邊庫克淖爾一帶肥沃の地に駐牧するに過ぎず青海を以て名と爲す者は此が爲めなり（庫克淖爾は即ち青海の義）其の全境の山脈、至て大なる者を巴顏喀喇山脈とす西、天山南路の南面崑崙山脈より來り邐迤として東南に走り遂に四川界に入る其側の山脈、多く此と並行し皆東南走す唯々東北邊の山脈或は東西行し少しく此と趣を異にせるのみ然れども終に一の南北行せる者無し故に其間の大水、金沙江の如き鴉龍江の如き怒江の如き皆東南に趨き直流奔放、一瀉千里の勢あり而るに黃河獨り大屈曲あり初、少しく

東南流せりと雖、既にして山脈斷處より缺口を求て東に注ぎ凡そ三大屈曲して始て甘肅の河州に入る此を異例とす諸大水、皆黄河の上源以西以南に在りて一も以北以東に在らず而して諸爾は多く以北以東に在り青海の富饒は諸爾の側近に在りて大水の兩岸に在らず此れ蒙古の多く東北邊に住し西南邊は棄てゝ蕃人部落に委せる所以なり此れ其の疆域山川の概觀なり

巴顏喀喇山

巴顏喀喇山は阿克塔沁山及び阿爾布哈山と偕に三山並峙し總稱して庫爾坤山と謂ふ此山最も高大にして山石黑色なり故に巴顏喀喇と稱す(巴顏は大の義喀喇は黑の義)然れとも巴顏喀喇は獨り此山の專稱にあらず西、新疆交界に在りて西金烏蘭拖羅海山あり山脈、和闐の南山より來り東南行して此山となり更に二支となり並行して四川に入る凡そ此脈に屬する諸山大抵巴顏喀喇の稱あり之を要するに巴顏喀喇は青海界内に於ける崑崙山脈の通稱にして此山獨り其間に冠絶せるが故に此名を專有することを得しのみ其地殆ど青海全境の中央に位し青海驛路(西寧より拉藏に至る)の西に在り其南に金沙江あり其北に黄河あり諸大水の上游にして青海形勝の處を占む其の最も著名なるは蓋し此に由る

西金烏蘭拖羅山

西金烏蘭拖羅山は新疆の東南、碩什達爾達布遜山の東、噶斯池の南に在り此より東南諸山皆巴顏喀喇と稱せらる少しく東北行して巴顏喀喇得爾奔巴山となり又東北して諸木齊圖山(諸木齊は佛教信徒の義、此の山下の居民皆黄教を奉す故に云ふ)となり固爾班波羅濟山となり巴顏喀喇西倫山となり更に東南折し三百里にして庫爾坤三山となる

十三阿木尼山

阿拉巴顏喀喇山は庫爾坤の東南、黄河上游の南岸に在り其東を雜佛洛巴顏喀喇山とし其の東南を匝巴顏喀喇山とす鴉龍江は此山に發源す其脈延て東南行して金沙、鴉龍兩江の間に挾まれり

瓜胡爾巴顏喀喇山、巴顏禿胡馬領も亦巴顏喀喇山脈の一支にして亦東南行し四川界に入る其脈、黄河と鴉龍江との間に挾まり嶺南は水皆鴉龍江に入り嶺北は水皆黄河に入る

勒斜爾烏蘭達布遜山は青海、前藏及び新疆の交界に在り紫鹽を產す故に烏蘭達布遜と名づく(烏蘭は紅、達布遜は鹽の義)西金蘭托羅海山の南四百里に在り喀七烏蘭木倫、其の北に發源す

巴薩通拉木山は勒斜烏蘭達布遜山の東五百里に在り其山高大にして前藏に跨り形、乳牛に類す故に又犂石山の稱あり金沙江の出つる所なり

洞布倫山は金沙江上游の西に在り亦高大にして崑崙の支脈たり以上皆西南境に在り

十三阿木尼山は青海著名の山にして皆庫克諸爾附近に在り至て遠きも三百餘里に過ぎず阿木尼は祖の義、皆蒙古人の瞻仰して祖と爲す所なる阿木尼塞爾秦山は東南に在り阿木尼末倫山は東に在り阿木尼那凌通布山は西南に在り阿木尼巴延尊崔、阿木尼洞舒、阿木尼天沁察罕、阿木尼兀善通布諸山は西北に在り阿木尼額枯山は西北最も遠くして甘州に接す其山高大にして甘、肅二州の南屏を成せり阿木尼巴爾布安山は西に在りて最も高嶮なり阿木尼岡噶爾山は東北に在り甘、凉二州邊界に接し漢人呼て龍壽山と爲す阿木尼巴延哈拉山は凉州界に近く漢人呼て大荒山と爲す阿木尼扣肯古爾板山は黄河上游の

東岸に在り九峰あり其の最高峰を阿木尼麻禪母孫山(或は阿木尼瑪勒古穆遜山と作る)とす四時積雪消えず漢人呼て大雪山と爲す禹貢に所謂る積石山にして西傾山其東に在り十三阿木尼唯々大雪山を推して最尊と爲す

庫克諾爾を圍みて又十三小山あり土俗均しく之を烏爾圖と稱す即ち十三角山なり

漢陀羅海山は庫克諾爾の南二百餘里、曠野の中に在り索克圖山は其の西南五十里に在り又別に一の索克圖山あり地に瘴氣多く又毒草を生す往く可らずと云ふ烏克陀羅海山は諾爾の西南に在り高峰壁立し殆ど登る可らず庫克諾爾を距ること西南三百餘里に固爾班伊瑪圖山あり黄河の西岸に在り三山相接す故に固爾班の目あり其の東北に蘇羅巴顏喀喇山あり此外、青海の山甚た多きも大抵蕃人棲息の地に在り故に其詳なるを得難し今唯々此の知るべき者を擧げしのみ

黄河の本源は巴顏喀喇山の北麓、北極出地三十五度五分の處に在り衆山環拱し南に古爾班圖勒哈あり西南に布瑚珠勒赫あり西に巴爾布哈あり北に阿勒坦噶達蘇齊老(或は阿克塔齊勒に作る)あり東北に烏蘭都什あり皆庫爾坤山の支脈なり而して阿勒坦噶達蘇齊老に大石あり其下飛泉噴出し其色、黄金の如し蒙古語に於て阿勒坦は黄金なり噶達素は北極星なり齊老は石なり蒙古此石を以て北極に擬せるなり溪流皆黄色、故に亦阿勒坦郭勒と稱す小泉數道を合せ南に向て行くこと百餘里、鄂敦搭拉に至る鄂敦搭拉は平甸にして廣さ數百里、湧泉甚た多く大小無數、之を望むに列星の如し故に稱して鄂敦搭拉と爲す

鄂敦は星なり搭拉は平甸なり元史に所謂る火敦腦兒是なり漢人譯して星宿海と云ふ西寧邊外一千二百里、官道の西北に在り新疆の羅布諾爾を距ること東南大約一千五百里、漢人云ふ黄河、羅布諾爾に伏して又此に出づと(羅布諾爾は古の蒲昌海にして其南源は和闐の南山に出づ和闐の南山は美玉を產す即ち所謂る崑崙なり故に云ふ河出ニ崑崙一と或は云ふ崑崙は即ち庫爾坤と)西藏人之を稱して噶爾瑪沁尼と云ひ古爾班圖勒哈山より出る者を稱して噶爾瑪塘と云ひ巴爾布哈山より出る者を噶爾瑪楚木朗と云ひ總て之を稱して古爾班索里瑪勒と云ふ三河相合し水色稍々淡く東南流すること百三十里にして瀦して札凌淖爾(又查靈海、札陵湖等に作る)となる或は阿拉克淖爾と云ふ淖爾形長くして水色白し土語に札は白なり凌は長なり故に札凌と稱す又東南流し折れて南すること五十里にして又瀦して淖爾となる水色此に至り化して青となる土語鄂は青なり故に此を鄂凌淖爾と云ふ或は車克諾爾と稱す淖爾の水、更に東北流し折れて東南流し巴顏禿胡馬嶺北に至り東西諸水を合せ南流すること百五十里、水色始て變じて綠中に黄を含み又東南流凡そ屈曲行七百餘里にして東、阿木尼麻禪母孫山の南を繞り折れて東流し又折れて北流し三坤鄂崙河の水を併せ水勢益々大、烏藍莽乃山下に至り殆て折れて西北流し納林通布諸山を經、四百餘里、稍々西北流して大雪山の東北を經、又百餘里、西南諸水を合せ折れて東北流すること百三十里、又正北流すること百餘里、又東北流すること數十里にして甘肅省河州貴德堡界に入り水色全く黄にして始て黄河と稱す本源より此に至る行くこと既に二千七百餘里

金沙江

金沙江は土語此を木魯烏蘇（或は木嵩烏蘇に作る）と稱す即ち通天河なり其の上源最も遠くして青海の西南界巴薩通拉木山の東麓より出づ三烏蘭木倫あり偕に北より之に注く拜都河、南より來て又之に注く拜都河は巴薩通拉木山の東南拜都嶺より出で三烏蘭は一を托克托奈烏蘭と云ひ一を喀七烏蘭と云ひ一を那木七圖烏蘭と云ひ皆勒斜爾烏蘭達布遜山北方諸山より出づ木魯烏蘇、此の諸源を會して東南流すること數百里、那木唐龍山の北、固爾班博羅濟山の西南に至て始て折れて東南流し土虎爾河、烏揑河等の諸小水を合せ水勢益〻大、黄河上源以西の水、悉く之に入る東南流すること凡そ一千二百里にして四川界に入り始て布賴楚河と云ふ西藏人、河を楚と云ふ布賴楚は蓋し西藏語なり

鴉龍江

鴉龍江は古の瀘水、其の上源を鄂格布拉格と云ひ匝巴顏喀喇山の東麓に出づ東南流すること數百里にして四川界に入り雜楚と稱す鴉龍は下流の名なり

怒江は前藏に發源し東北流して青海界に入り折れて東流し僅に數十里にして他念他翁山の山脉に觸れ又折れて東南流し再たび前藏に入る青海に於ては此を索克河と稱す

青海

以上は皆青海西南界の水にして其の東北界には一も大水無く又諾爾に歸せざるの水無し

二山島

諾爾の大なるは庫克諾爾に過ぎたるは莫し庫克諾爾は古の卑禾羌海にして又鮮水と稱す西北海無し湖海を以て海と爲す故に此諾爾を稱して青海と云ふ周回七百五十餘里、中に二山島あり一を魁孫托羅海と云ひ一を察罕哈達と云ひ東西、水中に對峙す島に寺あり喇嘛之に住し終年出ること能はず唯〻嚴冬水凍る時、氷を蹈て出で物を買て入る島中時に名馬を出す俗稱して龍種と爲す哈爾濟河、伊克烏藍和碩、巴哈烏藍和碩、和爾等の諸等の諸水皆來りて諾爾に注く諾爾の四邊、皆沃壤にして魚鹽の富あり青海人、此を美利と爲す故に河西二十六旗蒙古多く此の側近に遊牧す

布哈河（或は布噶音噶爾河）は諾爾の西北三百餘里阿木尼額枯山の西南英額池より出づ池の周り二百餘里、喀喇細納河之に會し東南流して諾爾に入る

哈拉諾爾は黄河上源の西北に在り周り百六十里、拜噶爾河、那莫渾河等小水の滙せる所なり

拖孫諾爾は庫克諾爾の西南三百五十餘里黄河水源の東北に在り周り百九十里、釵打丁河之に入る

達布遜池は周り百餘里、鹽を產するを以て名あり西拉庫特兒山の莫和爾河、布拉克地の察罕烏蘇二水合流し瀦して此池となり池の東南より溢出して又巴爾呼河、柴集河を合せ達布遜河となり更に功額諾爾に注ぐ功額諾爾は克特爾黑諾爾及び殷德爾圖諾爾と偕に鼎足の狀を成し三池相近けれども其水相通せず其北に細納池あり西南に奇爾多克池あり地皆斥鹵にして鹽池の水之に注く皆小池なり此外、小池多けれども悉く擧くるに堪へず

青海の北境は戈壁にして嘉峪關外の安西州に接し西北境は草地にして新疆の東南噶斯池地方に接す其間亂山藪澤ありと雖、著名なる者無し

其の蕃人部落は地域甚だ廣濶にして四川、青海、西藏に跨り玉樹、納克樹等の蕃人、合て七十九族あり雍正三年、悉く之を招撫し十年の夏、其の西寧に近き者は之を西寧辦事大臣の管轄に歸し西藏に近き者は之を駐藏大臣の管轄に歸し千人以上の部落には千戸一名を設け百人以上の部落には百戸一名を設け百戸に及ばざる者は百長一名を設け十戸に十長一名を設け千戸の下には百長五六人を置き百戸の下には百長三四人を置き百戸毎に毎年、貢馬一匹を納めしめ一匹の折銀を八兩とし一戸に毎年折銀八分を收む而して西寧の管轄に屬せる者四十族、其計八千四百四十三戸、三萬二千三百九十人、折徵銀六百六十九兩五錢二分、西藏の管轄に屬せる者三十九族、其計四千八百八十九戸、一萬七千六百零三人、折徵銀三百九十一兩一錢二分其餘、脚巴拉喇布等二處の番子七十餘戸は別に差役を課し馬を貢せしめず此れ雍正中の制なり其後駐藏兵撤退せられ管理に便ならざるを以て悉く之を西寧の管轄に歸し今に至て土司千百戸等の職猶ほ存す但七十九族の稱は載籍詳ならざるを以て一々列擧すること能はず青海には西寧より前藏の拉薩に至る一官路あり今其の里程を示せば左の如し

西寧府	百六十里	阿什漢	七十里	哈爾噶兒	六十里
夥兒	七十里	柴吉口	六十里	苦々庫兎兒	六十里
滾厄爾吉	五十里	依麻兒	六十里	朔羅口	五十里
朔羅達巴	六十里	希拉哈布	七十里	得倫腦兒	五十里
苦々庫兎兒	六十里	阿拉克沙兒	六十里	必流兎	六十里
河牙庫兎兒	七十里	黄河渡	六十里	納木噶	六十里
和多都	五十里	氣兒撒托洛流	六十里	和牙拉庫兎兒查都	七十里
白兒七兒	六十里	喇嘛托洛海	五十里	巴彥哈喇那都	六十里
沙石隆	五十里	衣克阿立各	七十里	鄂蘭厄爾吉	六十里
苦々賽渡	六十里	木魯烏素	五十里	查漢厄爾吉	六十里
忒們苦住	七十里	白兒七兎	五十里	土乎魯托洛海	六十里
東布勒兎口	六十里	東布勒兎達巴那都	五十里	東布勒兎達巴查都	六十里
乎蘭果兒	五十里	得爾哈達	六十里	順達	五十里
多洛巴兎兒	五十五里	布哈賽勒	五十五里	哈拉河洛	四十五里
呵木達河	四十五里	因達木	四十五里	吉利布喇克	七十五里
依克諾木漢烏巴什	五十五里	索克東邊	七十里	巴木漢	五十五里
泡河老	七十里	沙克因果爾	四十五里	蒙咱	四十五里

蒙古西里克	七十里	綽諾果爾	九十里	楚木拉	五十五里
求郭隆	五十五里	哈拉烏蘇	七十里	噶欠	七十里
什保諾爾	七十里	克屯西里克	九十里	達木	七十里
羊拉	七十里	夾藏墊	四十五里	達隆	五十里
沙拉	七十里	甘定郡科爾	九十里	都們	五十五里
郎拉	四十五里	拉藏	—	—	—

共計六十八站、四千百二十里（或は云ふ三千七百餘里）

西套

西套は河套の西に在り故に名つく即ち今の阿拉善、額濟納の地なり其地内外蒙古の南界に在り其の東を鄂爾多斯とし東南よりして西南に至るは甘肅省の北境に包まれ西は鎮西廳に接し東北は烏喇特に接し北面一帶、賽因諾顏、札薩克圖二部に接し地形狹長にして青海と俱に腹背より甘、肅二州を壓笞するの狀を成す明代此に居りし者を套夷と稱す西土默特の盛なりし時、套夷、海夷と偕に河西の巨患を爲せり然れども其實は甘肅二州の爲めに遮斷せられ兩者相交通すること能はず故に貫連一氣なること を得ず彼等も亦是を以て憾とす漢の武帝が匈奴の右臂を斷ちし所以の者、今に至て猶ほ其驗あり界内甚だ廣からず而も又沙地多し分て兩部と爲し其の南に在りて賀蘭山に依れる者を阿拉善部と爲し西、

阿拉善部
額濟納部

居延澤に依れる者を額濟納部と爲す兩部均しく平衍にして山少し獨り賀蘭山、半月形を成して東南界を爲し其脉北行、分れて兩岐となり一は東南、陰山の脉に接し一は東北行し沙磧に入りて止む其水、一も大水を成すこと能はず潴して諾爾となり大抵鹽を產す故に界内の鹽多く界外に販運す此れ西套の概觀なり

賀蘭山

賀蘭山は即ち阿拉善山、山外は寧夏の平羅縣に屬す初は河外悉く套夷に屬す清朝、其の寧夏に近きを以て蒙古人の山前に駐牧することを許さず山を以て限界と爲し山後を以て阿拉善部とす山脉綿連、約五百里、絕て復た續き東、烏喇特の陰山に接す

阿濟山

阿濟山は額濟納部の西北界に在り山脉遠く科布多の阿爾泰より來る其の西套の最北に在るを以て俗呼て北套山と云ふ然れども其實は蓋し別篤山なり歸化城の商民、古城、烏魯木齊に赴き貿易を行ふ者多く道を此に取り二閱月にして達す新疆人之を稱して北套客と謂ふと云ふ

霍爾霍圖山、烏丹哈拉山、楚琿山等の諸小山あり皆沙磧中の阜岡にして起伏綿亘、以て哈密界に達す然れども一大山無し此外、甘肅界上には亦不拉山、北大山、合黎山、大花山等あり

吉鹽

吉蘭泰池は界内鹽湖の大なる者にして賀蘭山の西に在り其の產鹽潔白堅好にして世の愛用する所たり俗に吉鹽と稱す

札喇台達布孫湖は吉蘭泰の東南に在り小鹽池なり

古の休屠澤

三岔河は甘肅省涼州府城の東より東北流して界内に入る土人之を郭河と稱す白亭海子に歸して瀦す蒙古人此を哈喇鄂模と云ふ唐代涼州の都督郭振元が白亭軍を置きし所とす或は云ふ古の休屠澤なりと水磨川一名雲川は涼州永昌縣の西より東北流して界内に入り沙地に止まりて澤となる蒙古人之を沙喇鄂模と云ふ哈喇鄂模の西二百餘里に在り廣さ三四十里

青鹽池

昌寧湖は涼州永昌縣の東北百二十里に在り四邊水草多し明末、套夷此に居りて屢〻邊に寇せし所なり青鹽池、鴛鴦白鹽地、皆涼州鎭番縣邊外百二三十里の地に在り紅鹽池は甘州山丹城北三百里に在り紅鹽の根は以て器を製すべし明の洪武中、曾て採りて貢せしむ其後、邊外に在るを以て之を停む

古の居延澤

昆都倫河は額濟納部に在りては唯一の大水たり然れども甚だ大ならず甘肅省肅州より北流して北に至り額濟納河と稱す分れて二道となりて各〻沙中に停まりて湖澤となる其の西に在る者を索廓克鄂模と云ひ周り九十里、其の東に在る者を索博鄂模と云ひ稍〻小にして周り六十餘里、皆古の居延澤なりと云ふ凡そ西套界内の水は皆甘肅省中より來る者なり

此外大苦水潮、騙馬潮、沙棗瑚等の小湖あり皆甚小にして數ふるに足らざるなり

第二十一章　天山北路の額魯特

一、明朝の瓦拉

禿綿斡亦剌

瓦剌も亦當初林木中百姓の一種にして今の露境貝加爾湖の西に在り其内數種あり總稱して禿綿斡亦剌と謂ふ元の太祖即位の二年、其の長子朮赤を遣りて之を征せしむ其の部長忽都哈別乞迎へて降り遂に林木中百姓諸部を平く斡亦剌は即ち瓦剌なり

案ずるに祕史卷十二に兎兒年、成吉思命二拙赤一、領二右手軍一、去征二林木中百姓一、令二不合引一路、斡亦剌種的忽都合別乞比二萬斡亦剌種一、先來歸附、就引二拙赤一、征二萬斡亦剌一、入至二失黑失惕地面一、斡亦剌禿巴思諸種都投降了とあり拙赤は朮赤なり萬斡亦剌は禿綿斡亦剌なり（禿綿は即ち萬の義）聖武親征錄に斡亦剌を猥剌に作る斡亦剌、猥剌、瓦剌皆一語の異譯のみ瓦剌又瓦拉に作り又衞拉特に作り衞喇特に作り又轉じて厄魯特、額魯特に作る皆同じ元史譯文證補（北赤補傳）の注に祕史作二斡亦剌惕一、今改二衞喇特一、即厄魯特、西域書亦稱二衞喇特一、謂謙河之源有二八河一、衞喇特居二於左近一、其東有二烏拉速特、帖楞郭特、客失的迷三族一、居二拜喀勒湖西一、與二衞喇特一、乞兒吉思一爲二隣と云へり謙河は克木河にして下流を昂可剌河とす拜喀勒湖は即ち貝加爾湖なり然らば瓦剌が初、貝加爾以西昂可剌附近に居りしこと知るべく且つ萬斡亦剌と稱すれば其の種族の多かりしことも亦灼し然るに新疆識略に厄魯特之先、故有二四衞拉特一、華言四大部也と云へるは此れ四部となれる後の事にして譯語未だ正確ならず又額魯特を以て明の阿魯台部と爲す者は最も非なり額魯特は元代以前の斡亦剌惕の異譯にして明後の名に非ず或は云ふ額魯特は元の牧奴にして元代、馬、駝、牛、羊の四牧廠を設け額魯特人をして之を倭養せし

馬哈木を順寧王となす

む元室疑く微にして額魯特漸く盛强、遂に其主に叛くと此れ蓋し憎みて之を甚だしくせるの語のみ其の眞實に非るなり

案ずるに此れ後出塞錄、松漠草等に出でたる說なり古に聞く所なし且つ此も亦後世四部に分れたるより後の說にして四部を四項の性畜に附會したる者なり元の太祖既に其女を其の部長に與ふ其の奴僕賤人に非ること知るべく之を四部となれる後に觀るも和碩特は太祖の弟哈薩爾の後裔なり之を如何ぞ牧奴とは謂ふべき

初、喀爾喀部の西北に在り漸く移りて天山北路に入る太祖、西域を滅し次子察哈台を封す海都の亂後、天山北路遂に主無し蓋し是に因りて瓦剌代て之に據れるなり元の滅びしや元の嗣君、漠南に安んずること能はず遠く去りて漠北に走り道にして弑に遭ふ是より嗣て立つ者多く瓦剌に依る而して瓦剌是を借りて以て盛なり時に瓦剌分れて三部たり三部各〻渠帥あり明の成祖の立ちしや使を遣りて往て告げしむ是より時に來りて馬を献ず成祖、其の渠帥馬哈木を封して順寧王と爲し太平を賢義王と爲し把禿孛羅を安樂王と爲す然れども馬哈木獨り强くして他部多くは著はれず後脫懽か時に至り遂に之を併す蓋し都沁、都爾本二部落是なり

案ずるに明史瓦剌傳に正統元年冬、成國公朱勇言、近瓦剌脫懽以兵迫逐韃靼朶兒只伯云々、未幾、脫懽內殺其賢義、安樂兩王、盡有其衆、欲自稱可汗云々とありて部落の名は詳ならず蒙古源流を閲するに額森(即ち明史の也先)が都沁、都爾本を併せたることを記して都沁、都爾本兩部落、已爲屬下、今請濟農爲我等汗、即將濟農之號、賞給額森、と云ひまた其時額森汗已即位、估據都沁都爾本矣などあり額森、脫歡父子の相異はあれど此の年紀の亂れたるは既に云へるが如くなれば(第二編察哈爾の條に詳なり)其實異なること無く同く明の正統中の事にして蓋し其事相同じ但賢義、安樂何れが都沁、都爾本の主なるを知らざるのみ而して馬哈木、脫歡、額森等は後の準噶爾の先にして此時、和碩特、杜爾伯特、土爾扈特三部は未だ顯はれず都爾本は或は杜爾伯特にはあらざるが後考を待つ

土剌河の役

元の遺臣阿魯台、故主の子本雅失里を別失八里(今の烏魯木齊地方)より迎へて之を奉ず馬哈木之と相善からず因て明朝と通じ謀りて與に之を攻めんと欲す明朝も亦因て厚く之を遇して其勢を分ち以て相合はざらしむ成祖是に於て屢〻出て〻本雅失里、阿魯台を親征す本雅失里君臣、東西に分竄し阿魯台遂に明に降る明亦封して王とす、馬哈木、阿魯台を除かんことを請へども聽かず然れども其の部屬多く功あるを以て其の賞賜を加ふ是より馬哈木士馬强精、心驕りて入犯の意あり兵を臚朐河に擁し聲言すらく將に阿魯台を襲はんとすと成祖之を聞き又親から出て〻之を征す馬哈木來り戰ふ成祖、鐵騎を率て縱擊し大に之を破り土剌河に至る馬哈木乃ち師を班し其後、詞を卑くして來献す既にして馬哈木死して脫懽嗣ぐ脫懽、阿魯台を襲殺し其子朶兒只伯を迫逐し其衆を併呑し頗る强大を致し自立して汗た

らんと欲すれども衆聽かず是に於て自から丞相の位に居り其權を擅にす韃靼可汗ありと雖、徒に虛器を擁するのみ既にして又朶顏三衞を誘脅して塞下を窺伺せしむ未だ幾くならざるに脫懽死し也先嗣ぎ益〻恣にして君臣相制すること能はず韃靼、瓦剌殆ど兩國の如く均しく使人を發して明朝に致す明も亦雨汗を以て之を待し賞賚甚だ厚く並に其の妻子部長に及ぶ蓋し雨汗をして相抵制せしめんことを欲してなり初、瓦剌の使人至る明朝約して五十人を過ぐること無からしむ後、瓦剌、其の賞賜を利とし漸く增して二千人に至り屢〻飭戒を加ふれども曾て約束を奉せず且つ往來多く殺掠を行ひ沿途之に苦しむ時に他部の人を狹みて俱に來り貴重得難きの物を求め少しく饜かざれば端を借りて滋擾す然れども明朝已むことを得ずして常に其幣物を重くし以て無事を冀ふ也先是に於て更に哈密を攻め其王と王の母とを執へ又婚を沙州赤斤(或は赤金に作る)の蒙古諸衞に結び又兀良哈を破り朝鮮を脅す是時に當りて漠の南北東西を問はず悉く其の威福に從ひ復た天山の北に居らず出でゝ漠南に往來す邊將其の久しからずして大患を爲さんことを憂へ疏奏すれども報あらず明朝唯〻敕戒して嚴に防禦を加へしむるのみ正統十一年(我文安三年、西一四四六年)冬、也先、兀良哈を攻め使を大同に致して糧を助けんことを乞ひ且つ守備大監郭敬を見んことを求む明朝許さず又書を宜府の守將楊洪に致す楊洪以聞す明朝、洪に命して其使を禮して之に報せしむ既にして其の部衆來歸する者あり言ふ也先入寇を謀り其主脫々不花之を制すれども聽かず又諸蕃に約して偕に明朝に背かしむと明朝詔問すれども報せず而して明使、瓦剌に至れば

瓦剌の要挾する所、許さゞること無し瓦剌益〻驕り使人の數、增して三千人に至り甚しきは其數を虛冒して廩餼を貪ることあり禮部、其の實數を按し僅に其の請ふ所の五分の一を與ふ是に於て也先大に慙憤し十四年七月(我寶德元年、西一四四九年)遂に諸蕃を脅誘し分道大舉し脫々不花、兀良哈は遼東に寇し阿剌知院は宜府に寇し赤城を圍み又別騎を遣りて甘州を寇せしめ也先親から大同に寇す大同の參將吳洪戰死し羽書相踵て至る大監王振帝を挾みて親征せしむ群臣固く爭へども得ず大同の守將宋瑛、武進伯朱冕、都督石亨等出てゝ陽和に戰ふ大監郭敬監軍たり諸將皆其の制を受け意の如くなること能はず軍遂に覆沒す瑛冕皆戰死し敬は草中に伏して僅に免れ亨は奔り還る帝大同に次す風雨連日、軍中夜驚き人心恟懼す郭敬密に王振と計り遂に師を旋し宣府に至る敵衆、軍後を襲ひ吳克忠之を拒て陣歿す朱勇、薛綬等四軍の衆を率て繼て往き伏に陷りて亦沒す次日、帝、土木驛に抵る諸臣多く懷來に保せんことを議す而する王振、輜重を顧みて遽に止まる也先の軍之に追及し其の圍む所となる敵、汲道に據り軍渴すれども水を得ず敵騎益〻至る然れども大軍の悉く止まりて行かざるを見、僞て退て兵を緩くす王振急に令して營を拔て南せしむ軍方に動くとき也先急に騎を集めて四面より之を衝く士卒先を爭て走り行伍大に亂る敵騎跳り入り六軍皆潰え死傷數十萬、英國公張輔、駙馬都尉井源、尙書鄺埜、王佐、侍郎曹鼐、丁鉉等五十餘人之に死し振も亦脫すること能はず帝遂に漠北に蒙塵す從官皆死し中官喜寧獨り隨ふ也先、始、其の報を聞て未た俄に信せず既にして其衆、帝を奉して至る也先喜、望外に出で之を其

弟伯顏帖木兒の營に置き前に掠めし所の校尉袁彬をして來り侍せしめ擁して大同に至り金幣を要索す都督郭登之に白金三萬を許し因て帝を奪て城に入らんことを謀る然れども帝之を沮して果さず也先遂に帝を奉して北行す此を土木の變と稱す

明朝是に於て帝の弟監國郕王を推して帝位に升らしめ先帝を尊みて太上皇と爲し以て宗社、別に主あるを示し以て也先の非望を斷つ也先再たび太上皇を擁して至り大同より進み紫荊關に抵り攻て之に入り直に前みて北京を犯す兵部尚書于謙、石亨、孫鏜等を督して之を禦く也先乃ち大臣の出て〻太上皇を迎へんことを求む亨等之を拒み與に戰ひ屢〻之を敗る也先夜走り良鄕より紫荊に至り大に掠て出つ都督楊洪大に其の餘衆を居庸關に敗る也先又上皇を奉して北走す然れども上皇居る所の幄上、常に異光あり奕々として龍の如し也先等驚異し敢て犯すこと無し

案するに此事獨り明史の之を記せるのみならず蒙古源流も亦之を記すれば此れ決して史家浮誇の潤飾せる所に非ず元の太祖曾て言へることあり我聞く中原皇帝は只〻天上人のみ做ると唐代突厥、回鶻諸部、皇帝を稱して天可汗と云へるも亦此意のみ由來北方の番人は中原皇帝を視ること實に天上人も啻ならず元の太祖を以てすら猶ほ此の如し況や其他をや深く佛子を信ずる者には佛後白毫の光を見る焉ぞ知らん瓦剌の目中、中原皇帝の幄上、龍光赫奕たる者あるを視ざるを余想ふに今の蒙古も亦常に此念を抱て北京朝廷の宮闕を瞻仰せるのみ此念の去るときは即ち彼等か背叛の日ならんと

景泰元年（我寶德二年、四一四五〇年）又上皇を奉して大同に至る郭登納れず仍ほ上皇を奪はんことを謀る也先覺りて引き去る然れども也先既に上皇を得て志愈〻驕り人を視ること蔑如たり脫々不花、阿剌知院等心益〻之を忌み私に使を遣はして明朝に和せしめ皆兵を撤して去る也先も亦要挾することを得ず大に望む所を失ひ上皇を還して兵を息めんことを欲す明朝乃ち侍郎李實等をして往て脫々不花及ひ也先を諭さしめ尋て楊善を遣りて上皇を迎ふるの意を致さしむ也先是に於て上皇を還す是より脫々不花君臣相和せず也先遂に脫々不花を攻めて之を殺し其の妻子を執へ其の人畜を以て諸部に分給し遂に勝に乘りて諸番を迫脅し東は建州（即ち今の滿洲）兀良哈に至り西は赤斤蒙古、哈密に及ひ一時、霸を漠の南北に稱し書を明朝に致して自から大元田盛大可汗と稱す（田盛は蓋し天聖なり）明朝報書して瓦剌可汗と爲す然れども强を恃みて日に驕り未た幾ならざるに阿剌知院に殺さる也先死して漠の南北皆叛き瓦剌遂に衰ふ是より窮北の野に僻處し時に往來ありと雖、終に世に大關係無く以て清代に推移せり

二、清代の額魯特

上、準噶爾の侵略、和議

明の中世以降、瓦剌衰へ分れて四大部となる曰く和碩特、曰く準噶爾（又綽羅斯と稱す）曰く杜爾伯特、曰く土爾扈特、此を四衛拉特と稱し和碩特は烏魯木齊に居り準噶爾は伊犁に居り杜爾伯特は額爾濟斯河に居り而して土爾扈特は雅爾に居り最も準噶爾に迫近す四部均しく喇嘛を尊奉し最も西藏の達賴を

準噶爾の祖

渴仰す明末清初の際に當り和碩特、準噶爾兩部均しく强盛にして並に侵略に志あり和碩特は襲て青海、西套に據り遂に西藏を併有す（事は下章に詳なり）而して土爾扈特、準噶爾と相容るゝこと能はず避けて俄羅斯に往き額濟勒河邊に住牧す是に於て四衛拉特餘す所は準噶爾、杜爾伯特の兩部のみ此の兩部は原は同族にして俱に也先（今額森に作る）より出つ也先の長子を博羅給哈勒と云ひ此を杜爾伯特の祖とす次子を額斯墨特達爾漢諸顏と云ひ此を準噶爾の祖とす

案するに也先、都沁、都爾本二部落を併せ長子を都爾本に置きたりしには非るか都爾本、杜爾伯特聲音相近し

二部同族たりと雖、準噶爾、巴圖爾琿台吉に至り最も强くして地を占むること獨り多く天山北路復た肩を並ぶる者無く杜爾伯特自から雁行の地に立ち和碩特、土爾扈特二部の支屬に至りては存する者ありと雖、膝を屈して附隨するを免れず

顧實汗

清朝の察哈爾を滅しゝや林丹汗、青海に奔り途にして大草灘に死す青海の顧實汗之を聞て懼れ使をして來て好を通ぜしむ是時に當りて和碩特猶ほ四衛拉特に長たり故に準噶爾、土爾扈特諸部も亦、顧實汗に因て名を清廷に通ず既にして準噶爾の巴圖爾琿台吉死して其の子僧格嗣く異母兄車臣、卓特巴巴圖爾之と產を爭ひ僧格を殺す僧格の同母弟噶爾丹幼にして西藏に入り喇嘛教を學ひ達賴の第巴（達賴の財政を管する者）と相好し達賴因て噶爾丹に命し歸て準噶爾の衆を轄せしむ噶爾丹乃ち準噶爾に歸り車臣を執て之を殺し自立して所部の長となる卓特巴巴圖爾出てゝ青海に奔る時に顧實汗既に死て西套の鄂齊爾圖汗、四衛拉特に長たり鄂齊爾圖汗の孫女を阿努、阿海と云ふ阿努、僧格の妻たり噶爾丹既に立て其嫂に因て室と爲す所謂阿努哈屯是なり（昭摩多の役に戰死せる者、既に第二編に詳なり）阿海は僧格の長子策妄阿喇布坦に許嫁し未た娶らず噶爾丹又之を奪ふ然れども鄂齊爾圖が汗位を覬覦し遂に西套を襲て之を破り鄂齊爾圖を殺し其の汗位を奪ひ以て達賛の賜ふ所と稱し自から博碩克圖汗と號し諸衛拉特を脅かして其命を奉せしむ準噶爾の汗を稱する此より昉まる

察琿多爾濟と噶爾丹

案するに諸書大抵四衛拉特初より各〻汗あり相統屬せずと爲す然れども此れ未だ四衛拉の故に通せざる者なり準噶爾强大と雖、始未た汗と稱せずして琿台吉と稱す即ち大台吉なり土爾扈特の汗と稱するも亦阿玉奇以後に在り杜爾伯特に至りては乾隆二十年以前に汗號無し獨り和碩特のみは元の太祖の弟哈薩爾の裔たるを以て久しく汗號あり其實此の如し而るに清朝知らず始め四衛拉特に各〻汗ありと爲して其部長を封して悉く汗と爲す諸書因て誤て皆汗ありと爲せるのみ實に然りしに非ず鄂齊爾圖の妻は土謝圖汗察琿多爾濟の祖母と僧に土爾扈特の阿玉奇の姉なり故に噶爾丹の鄂齊爾圖を攻めしや察琿多爾濟、兵を遣りて之を援く及ばず乃ち其の貢使を劫す噶爾丹之を清廷に訴ふ清廷諭して相爭はざらしむ噶爾丹、西套の俘を献ず清廷卻けて受けず時に康熙十六年なり（我延寶五年、西一六七七年）明年、噶爾丹、其弟溫春台吉をして表を持して來り献せしむ是より時に往來あり是歲、噶爾丹私憾を以て其

噶爾丹東侵

の從兄巴哈班第を夢殺す巴哈班第は其の叔父楚琥爾烏巴什の長子なり因て楚琥爾烏巴什及ひ其季子羅卜藏額璘沁を執へて之を禁す巴哈班第の子罕都、年甫て十三、族人額爾德尼和碩齊之を携て逃れ兵四百を以て行き途にして烏喇特の人畜を掠め罕都の舅和囉理の處に奔る和囉理は西套和碩特の族人なり鄂齊爾圖死してより其の族人分散、居るに定地なく或は大草灘に居り或は額濟納河に居り游移浮動し以て噶爾丹の侵掠を避く噶爾丹既に四衛拉特に長たり故に清廷、噶爾丹に檄し額爾德尼和碩齊を收捕治罪せしめ幷て和囉理等を收めて其牧を得せしむ

案するに秦邊紀略（此書刊本無く編者所藏の者は寫本にして且つ缺本なり）肅州近疆に坤都崙在=肅州西北七百餘里=云々、今罕頓、無奈素、定合首氣住牧、肅州金塔寺堡に坤都崙在=西北六百里=、今西夷罕頓台吉及無素奈爾定合首氣住牧とあり罕頓は罕都、爾定合首氣は額爾德尼和碩齊の異譯なり（此書は康熙二十三四年頃の著にして清初の人、譯字未た定まらず故に此の如し但定合首氣とあるは爾の一字を脫せる者、又無素奈、無奈素何れか一は誤倒せるならん其人未た詳ならず或は無素奈爾定合首氣一人か）されは罕都、額爾德尼和碩齊は當時肅州邊外坤都崙附近に住牧せしなり

然れとも當時噶爾丹方に侵掠を事とし未だ之を收むるに暇あらず既に西套を破りて又青海を窺ひ清廷の之に備ふるを知りて果さず是に於て天山南路を侵略し回子を移して北路烏魯木齊に開墾せしめ凡そ租賦糧食は皆回子に取る既にして又憾を察琿多爾濟に修め兼て喀爾喀を併有せんと欲し帳を移して阿

策妄阿喇布坦

爾泰の科布多、烏蘭古木の間に居る

案するに秦邊紀略甘州近疆に平頂在=板答口南馬蹄寺之巔=、山頂平衍、故名、爲=龍首居人隙地=、往=牧其地=者、黃番也云々、在=甘肅間=、謂=之黃達子=、平頂其一族也、今黃番之納=添巴=、遠輸=金山=云、また仄稜在青犵塔西南楡木山之南山=也、黃番皆臣=服金山=、獨仄稜以=親姻=不=與焉云=、注に黃番羅兒家族住牧、其目之妻、嘎爾丹妹也とあり金山は即ち阿爾泰山にして嘎爾丹は即ち噶爾丹なり是に由て之を觀れば噶爾丹、西套を破りし後、甘肅黃番も亦添巴を噶爾丹に納めたりしなり添巴は番語贈遺の物を謂ふ猶ほ租稅の如し（黃番の事は下章に詳にせん）

二十四年、清廷、四衛拉特貢使の例を定め噶爾丹の使額は二百人、餘は張家口及ひ歸化城に留めしむ其餘諸部の長皆同し時に喀爾喀の土謝圖、札薩克圖二部、隙あり噶爾丹乃ち札薩克圖汗を唆使し間を伺て已、之に乘せんと欲す適々庫倫伯勒齊爾の會あり哲卜尊丹巴胡圖克圖、達賴の使人噶爾丹西勒圖に讓る所無し是に於て噶爾丹、口に藉て端を發し突として土謝圖汗を襲ひ且つ其の弟を遣りて哲卜尊丹巴か帳を劫さしむ喀爾喀支ふること能はず全部奔りて漠南に移り清廷之を征して噶爾丹を昭摩多に敗る（事は既に第三編に詳なり）

初、僧格に三子あり長を策妄阿喇布坦（或は策妄那布坦に作る）と云ひ次を索諾木阿拉布坦と云ひ又次を丹津鄂木布と云ふ噶爾丹か立ちしより諸姪を善撫せず索諾木阿拉布坦を虐殺し又策妄阿喇布坦が

議聘の妻を奪ふ故に策妄阿喇布坦之を怨み父の舊臣七人と奔りて額琳哈畢爾噶に徙り噶爾丹が帳を阿爾泰に移せるに乘し徙りて博羅塔拉に居り遂に伊犂に入て之に據る既にして又其の喀爾喀を侵すに乘りて兵を潛めて科布多に赴き噶爾丹か妻孥牲畜を掠めて去る然れとも噶爾丹方に喀爾喀を爭ひ兼ね顧ること能はず是に因りて阿爾泰以西大抵策妄阿喇布坦が有に歸す清廷其の叔姪相善からざるを知り因て二人を構へんと欲し其の使者の來る特に厚賜して之を遣る噶爾丹既に敗走し諸台吉皆叛く噶爾丹性本と殘虐、故に親信する者少し諸台吉唯々丹濟拉、阿拉布坦、丹津鄂木布、格類固英四人のみ相親し而して丹濟拉最も信用せられ事ある毎に必ず與に謀る故に是に至りて獨り從へり噶爾丹、阿拉布坦を召す往かず其屬、前に已に清廷に降れる者あり往て降を阿拉布坦に勸めんことを請ふ清廷之を許す阿拉布坦が妻は札薩克圖汗成袞が女なり親王策旺札布郡王袞布、固魯什喜等皆其の姻戚たり清廷命して偕に往て之を招かしむ時に阿拉布坦、丹津鄂木布皆策妄阿喇布坦に歸せんことを欲して未だ果さず清廷の使者至り之を諭して曰く內附すること能はずんば往て策妄阿喇布坦に歸せよと阿拉布坦、其妻と謀り將に內に徙らんとす噶爾丹か其間に介在せるを以て恐れて又果さず乃ち策妄阿喇布坦に就かんことを請ふ丹津鄂木布は去りて吹河に在り噶爾丹之を召す亦往かず反て召使の騎を奪ひ布顏圖果爾(或布延圖鄂勒に作る)を渡り阿爾泰の喀喇伊齊思呼里木圖に徙り尋て奔りて策妄阿喇布坦に投す是に於て丹濟拉亦心動き格類固英をして降を清廷に乞はしむ清廷乃ち格類固英をして歸て噶爾丹、丹濟拉

二人に諭さしむ丹濟拉私に格類固英に告て曰く我、噶爾丹に降を說けとも從はず反て我を疑ふ爾、今往て之に說き噶爾丹若し從はば我、其の使者となりて往かんと然れとも格類固英、噶爾丹が終に降志無きを知り說かずして去る既にして丹濟拉、噶爾丹と嫌あり屢々召せとも往かず清廷之を聞き人を遣りて之を招かしむ丹濟拉、降を欲せざるに非れとも私恩も亦遂に絕つ可らず故を以て即ち降らず噶爾丹親信皆散し左右、人無く進退俱に窮す是に於て遂に藥を仰て死す丹濟拉乃ち其の屍と其女鍾濟海とを携へ巴雅恩鄂爾に至り奇齊宰桑をして降を大將軍費揚古に請はしむ然れとも前に即ち降らざりしを以て降後の討を懼れ既に奇齊宰桑を遣りて後、自から布隆吉爾に竄し尋て巴里坤に奔る初、策妄阿喇布坦か博羅塔拉に在りしや丹濟拉の弟達爾札札木揚は之に歸し丹濟拉は歸せずして噶爾丹に附く故を以て策妄阿喇布坦之と相善からず丹濟拉往て濟木薩に至る策妄阿喇布坦の鄂蠻喇嘛將に兵を以て之を拒まんとす丹濟拉欺て曰く噶爾丹既に死す吾、將に從て策妄阿喇布坦に投せんとするのみと使者をして策妄阿喇布坦に告げしめ自から德伯勒克に駐りて待つ而して清廷其の屢々降を請ひ屢々變するを以て策妄阿喇布坦に命して之を擒獻せしむ策妄阿喇布坦固より丹濟拉に憾あり且つ命を聽かざるの討を懼る是に於て其の族人大策凌敦多布を遣りて之を執へしむ是より先、奇齊宰桑既に降を請て還り將に大將軍の命を丹濟拉に傳へんとす至れば則ち丹濟拉既に竄れて在らず追蹤して郭蠻喇嘛の處に至り方に纔に丹濟拉を見る丹濟拉意始て決す適々大策凌か兵至る丹濟拉之と抗せず馳て哈密に赴く其子多爾濟色布

騰兵に阻せられ遂に相失し九日にして乃ち能く至る大策凌既に丹濟拉を獲ず唯々噶爾丹が屍と其女と
を得て還る清廷、丹濟拉を納れ之に授くるに内大臣を以てし其子多爾濟色布騰に一等侍衛を授け從衆
は之を張家口外に置き尋て察哈爾の正黄旗に屬し多爾濟色布騰に佐領を授けて之を管せしむ丹濟拉は
溫春台吉の子、父死して其の叔父に依る曾て達爾札札木揚と偕に噶爾丹の表に附して入朝せし者なり
丹津鄂木布既に策妄阿喇布坦に歸す策妄阿喇布坦、其の前に兄を棄てゝ叔父に就きしを含み遂に執て
之を禁す阿拉布坦之を聞き策妄阿喇布坦に就かず策妄阿喇布坦又之を怨み其牧を掠む阿拉布坦避て額
納倫果爾に徙り其の屬宰桑等を集め告て曰く我、今心既に内面に決せりと是に於て使を遣はし降を乞
はしめ遂に自から其屬を携て内附す策妄阿喇拉坦之を聞き又大策凌、羅卜藏琳沁等をして兵二千を率
て之を追はしむ阿拉布坦乃ち兵を列して之を御き其の宰桑洪科爾額爾奇木の子車克、羅卜藏琳沁並に
兵四百を擊斬し清廷も亦兵を率て阿拉布坦を迎へしむ大策零乃ち引き去る阿拉布坦七百餘戸を率て
茂岱察罕廋爾に至り洪科爾額爾奇木をして馳せ奏せしめ尋て入覲す清廷乃ち多羅郡王に封し諭して推
河に遊牧せしむ未だ幾ならずして死す其子、長を車稜旺布と云ひ次を色布騰旺布と云ふ車稜旺布、郡主
を尚し父の爵を襲ぐ是より前、阿拉布坦か弟達瑪璘の妻及ひ從兄額琳沁哈什哈等降を乞ふ是に至りて
其子茂海、車稜等皆隨て至る阿拉布坦は巴圖爾琿台吉の弟墨爾根岱青の曾孫なり後、數年、丹濟拉に諭
して同く推河に遊牧せしめ車稜旺布と偕に準噶爾を偵防せしむ丹濟拉是より復た察哈爾に隷せず今、

青海内附す

蓋因諾顏部烏蘭烏蘇駐牧の額魯特前旗は即ち阿拉布坦か後にして其の後旗は丹濟拉か後なりと云ふ
噶爾丹既に死して準噶爾の舊地、悉く策妄阿喇布坦に歸す然れとも策妄阿喇布坦新に其衆を得、未る遽
に鴟梟の姿を顯はさず噶爾丹の屍と其女とを清廷に献し外、恭順を示し敢て復た阿爾泰以東を爭はず
然れとも之を東方に遣くすること能はざれば之を西方に收めんと欲するは自から其勢なり故に阿爾泰
以東の事休みて阿爾泰以西の事起る初、噶爾丹の敗れしや哈密、噶爾丹の子色布騰巴爾珠爾及ひ其屬を
俘にして以て清廷に献す準噶爾入之を慽み哈密回人の吐魯番の市に赴く者を掠む哈密以て告く清廷之
を策妄阿喇布坦に責む準噶爾益々怨む而して策妄阿喇布坦も亦心漸く動く是時、西藏、青海未だ全く清
廷に服せず且つ達賴の第巴久しく噶爾丹に黨す是に於て策妄阿喇布坦、第巴を擊たんとすと聲言し使
を青海に遣り陰に其の强弱を覘ふ清廷知りて防禦の計を爲す青海より内附す策妄阿喇布坦、意を青海
に得ること能はず康熙五十四年(西一七一五年、我正德五年)四月、兵二千を以て俄に起りて哈密を掠む時に肅州の遊擊
潘之善僅に兵二百を領して哈密に在り擊て之を敗る甘肅提督師懿德之を聞き一面、總兵路振聲に檄し
て往て救はしめ一面、具疏入奏す清廷乃ち先づ西安將軍席柱及び師懿德に命じ火速救應せしめ尋て吏
部尚書富寧安を派して哈宝に駐紮せしめ又右衛將軍宗室費揚古を派し出てゝ推河に屯せしむ準噶爾逃
れ去る清廷因て使をして西北兩路より往き策妄阿喇布坦に諭せしめ又北路の參贊阿拉善貝勒阿寶をし
て往て席柱等に會し進て巴里坤に駐し準噶爾を烏魯木齊諸地に擊たしめ富寧安をして屯田を西吉木、

布隆吉爾に興さしめ尋て富甯安に命じて肅州に回り軍需錢粮を經理せしむ明年青海の貝勒、台吉等に命して噶斯の路に屯し以て準爾噶に備へしむ準噶爾、沙拉の路より入りて青海を襲ひ台吉羅卜藏丹濟卜か牧を掠め又噶斯口官軍の駝馬を盜まんことを謀る清廷益々防禦を嚴にす策妄阿喇布坦、青海の襲ひ難きを知り乃ち轉して西藏に向ひ遠く戈壁を繞りて之を襲ふ而して清廷未だ之を知らざるなり五十六年（我享保二年、西一七一七年）三月、富甯安に授くるに靖逆將軍を以てし阿爾泰一路より俱に出て〻準噶爾を襲擊せしむ是に於て富甯安謀して噶爾丹が兵を遣り將軍を以てし阿爾泰一路より俱に出て〻準噶爾を襲擊せしむ是に於て富甯安謀して噶爾丹が兵を遣りて唐古特（即ち西藏）に赴くの狀を得、馳疏上聞す然れども清廷未だ以て意と爲さゞるなり六月、富甯安烏魯安等巴里坤より發す七月、散秩大臣阿喇納、烏蘭烏蘇に至り策妄阿喇布坦が哨兵二人を得、富甯安烏魯木齊より兵を回し畢留閣に向ひ額魯特人三百に遇ひ兵を整へて迎へ擊つ額魯特等敗れて深山に奔る又烏魯木齊に至り回子を拿獲し準噶爾の消息を探問し進みて通俄巴錫に至り又回子男女畜六十九人、牛羊馬駝を獲、各處の田禾を踐みて回る傳爾丹も亦兵を派して博羅布爾哈蘇に至り額魯特五人を追斬し四人を擒にし又人を遣り路を分ちて尋探せしむれども終に蹤跡無し乃ち兵を阿爾泰に回る蓋し是時、準噶爾方に兵を西藏に用ゐ大策凌等をして之を侵略せしむ故に深く藏して出でず與に鋭を爭はず諸將軍未だ其の何の故たるを知らず故に亦敢て深く入らざりしなし而して西藏の拉藏汗是時既に害に遭ひ國中の重器多く其の移す所となる（事は下章に詳なり）明年、清廷之を聞き始て皇第十四子允禵を以て

西藏殆ど覆亡す

撫遠大將軍とし大兵を帥て進剿せしむ是時に當りて西藏殆ど覆亡し遽に收む可らず明年四月、大將軍允禵暫く兵を西甯に駐め驛站を設け軍備を整へ敢て直に出で〻之を征せず而して都統法喇副將岳鍾琪をして先づ綠旗兵を率て四川より出で進で巴塘を收めしむ明年、都統延信を平逆將軍とし護軍統領噶爾弼を定西將軍とし入藏進剿せしめ同時に西北南路より出で準噶爾境を襲ひ準噶爾をして首尾相顧みるに能はざらしめ以て其勢を分ち富甯安は三千人を領して烏魯木齊一路よりし阿喇納は四千人を領し吐魯番一路よりし征西將軍祁里德は七千人を領し布隆爾一路よりし傳爾丹は八千人を領し布拉罕一路よりし均しく出で偕に進みて之を擊つ富甯安の兵、杜爾伯特台吉垂木拍爾を獲、垂木拍爾は策妄阿喇布坦が爲めに屬を率て烏魯木齊に駐し哨を伊勒布爾和碩、阿克塔斯諸地に設くる者なり烏魯木齊の衆之を聞て悉く逃る阿喇納の兵は齊克塔木に敵營を擊破し進みて皮禪城（即ち闢展）に至り回子三百餘人を諭降し吐魯番に至る頭目阿克蘇爾坦等迎へ降る富甯安、烏魯木齊に至れば既に敵無し阿喇納等と烏爾烏蘇に會して歸る祁里德の兵は進て額魯特宰桑色布騰を敗り其衆二千餘人を降し傳爾丹が兵は格爾額格に至り額魯特二百餘人を追斬し宰桑貝坤等百餘人を擒にし其餘三百人を降し烏蘭呼濟爾の田禾を蹂躪し糧草を焚て還る而して西藏の軍も亦是歲に於て大策凌敦多布を敗る富甯安乃ち勝に乘て來年を以て大擧進剿せんことを請ふ清廷之を許す明年三月、大將軍進剿を議す阿喇納及び提督路振聲は烏蘭烏蘇より進て吐魯番を取るべし富甯安は之を烏蘭烏蘇に駐紮すべし傳爾丹、祁里德は各〻駐處に於て豫

備すべし又祁里德は所屬の兵二千を派して進て策妄阿喇布坦及び烏梁海の逃衆を收取すべし策妄阿喇布坦が內變の起るを俟ち三路將軍齊く大兵を引て出で其の巢窟を擣くべしと清廷之に從ふ五月、大將軍允禵に命じ甘州に赴きて駐紮せしむ大將軍尋て請て又今年の進剿を停む既にして策妄里喇布坦來て吐魯番城を侵さしむ阿喇納、侍衞克什圖等を遣り擊て之を敗らしむ追捕數十里、擒殺百餘人、富甯安因て奏請すらく前に阿喇納が今冬を以て進襲すべきに因り移て伊勒布爾和碩に駐し之が聲援を爲さんとす而るに今、敵既に敗れ去る必ず恐懼して備を設けん宜しく襲擊すべからず應に阿喇納の進兵を停めしむべし臣は仍ほ兵を統て巴里坤に駐せんと又之に從ひ且つ允禵、祁里德、富甯安を召して入京せしめ明年の大舉進剿の方略を指示す六十一年（我享保六年、西一七二二年）清廷遂に哲卜尊丹巴胡圖克圖に因り喇嘛を簡び敕書を齎して往き策妄阿喇布坦を諭さしめ暫く大舉進剿を停め允禵に命じて再たび軍前に赴かしめ富甯安に命じて大兵を統へ烏魯木齊に移駐せしむ既にして聖祖崩す清廷乃ち允禵を召還し延信をして馳て甘州に赴き代て大將軍の印務を管せしむ

案ずるに康熙の進剿是に於て龍頭蛇尾となれり蓋し史家其事を誇張し常に進剿と稱すれども其實當時進剿に意無かりしなり聖武記に雍正議和の事を叙して云へり上曾奉=聖祖密諭=以=賊巢遙遠我師往則我勞、賊師來則賊困、惟有=嚴=兵誘致邀擊、爲=萬全策=と然らば聖祖の意は誘致邀擊に在りて進剿に在らず然れども進剿と稱せざれば士氣振はざるの虞あり故に陽に進剿を唱へて終に進剿せず允禵の屢〻停兵を請へるは蓋し此の密旨を奉ぜるが故なり其の大舉進剿の方略を指示すと稱せる者も其實は此名を借りて之を召し將軍等の意見如何を徵せしに過ぎず然らずんば方略を指示し將軍未だ其の陣地に復せざるに別に喇嘛をして往て說かしむるの理あらんや是時に當りて帝既に年七十餘、老い且つ病めり英邁の主なりと雖、復た昔時噶爾丹を破りし日の概無し而して策妄阿喇布坦又能く兵を用ゐ進剿するも必しも勝を制す可らず清廷の群臣、干戈を厭へること久しく軍前の將軍、亦動もすれば蹂躪の色あり此れ實に和を議すべきの秋なり然れども我より和を議するは大國の體面に於て碍り無しとせず是に於て一策を按出し喇嘛を用て說客と爲し出でゝ其間に停調せしめ以て彼より和を求めしめんと欲せしのみ讀者、史家の潤飾に眩惑せられざらんこと可なり

雍正元年（我享保八年、西一七二三年）世宗始て立て準噶爾も亦未だ敢て來り侵せず而して青海羅卜藏丹津の亂、意料の外より起る清廷是に於て其の準噶爾と相合はんことを懼れ二年正月、土默特右翼の都統根敦をして滿州兵二千を率て巴里坤に駐せしめ尋て一千を分ち吐魯番に駐せしむ未だ幾ならざるに青海平ぎ羅卜藏丹津、準噶爾に奔る（事は下章に詳なり）三年、策妄阿喇布坦使をして入朝せしむ頗る恭順なり九月、富甯安奏して巴里坤等の兵を撤せんことを請ふ清廷之に從ふ

案ずるに是時、喇嘛既に準噶爾に說き準噶爾も亦心稍〻動きたり蓋し策妄阿喇布坦も亦老いたり死期既に近づけり西藏の役に得る所の重器を徙し伊犁に金頂、銀頂の二寺を造り拜佛諷經に專念とな

噶爾丹策凌立つ

るに至る其の清廷と一大決戰を試むるの勇無きこと知るべし然れども强倔の性、自から和を請ふことを好まず清廷の來使に答へ恭順の使を致し兩下の意既に合ひ議和の兩字に歸著せり唯〻彼此各〻自から進で提起するに懶きのみ是に於て清廷先づ富甯安の請を許して巴里坤の兵を撤し明年、策妄阿喇布坦、其子噶爾丹策凌をして和を請はしむ蓋し大兵、巴里坤に在りて準噶爾より和を請はゞ事、城下の盟に似たり策忘阿喇布坦が和の一字を題せざるも亦理あり清廷の巴里坤の大兵を撤せしは猶ほ禮あるに近し噶爾丹策凌が和を請ひし所以は此に出づ此を之れ察せずして準噶爾の請和を論ぜば正鵠を失すること多からん

明年春、準噶爾台吉噶爾丹策凌遂に和を請ふ噶爾丹策凌は策妄阿喇布坦が子なり清廷乃ち散秩大臣四格等を遣り往て阿爾泰の界地を勘せしむ是より前、清廷、郡王車稜旺布、貝勒博貝をして烏梁海を分轄せしめ其賦を徵す噶爾丹策凌、克木克木齊克の烏梁海は本と準噶爾に屬せしを以て之を還さんことを請ふ清廷許さず尋て其の侵掠を慮り前鋒統領定壽をして特斯に屯し克木克木齊克の烏梁海を防護せしむ是に由て和議懸りて結ばず是歲、策妄阿喇布坦死して噶爾丹策凌嗣ぐ

案ずるに此れ議和より勘界となり勘界よりして遂に戰機を孕むに至れるなり後來、科布多、額爾德尼昭の役、其の起因全く此に在り蓋し阿爾泰以東の烏梁海を二分し一半を喀爾喀に歸し一半を準喀爾に歸せば猶ほ爭ふ所無かるべし然れども此れ清廷の肯はざる所、何となれば噶爾丹死後、準噶爾復た阿爾泰以東を爭はざりしこと二十餘年、不言不語の中に既に清廷の版圖に移れるの情形あり唯〻車稜旺布が阿拉布坦の子にして準噶爾人なるが故に原と準噶爾に屬せし烏梁海を分て之に與へ原と和託輝特に屬せし烏梁海は仍ほ舊に依て博貝をして之を管せしむ此れ固より妥當の處置にして多く難ずべき所を見ず然れども準噶爾よりして之を言はしむれば必ず言はん戰敗の請和に非ず烏梁海原と悉く清廷の版圖に非らず準噶爾久しく之を爭はずと雖、清廷も亦視ること殆と棄地の如くす彼既に干戈を息めんことを願ふ、理宜しく各〻其の舊版圖に復して可なるべし此の如にして和を結ぶを公平の措置と爲すと此れ爭論の決せざる所以なり

六年（我享保十三年 四一七二八年）清廷、噶爾丹策凌をして羅卜藏丹津を縛送せしむ未だ即ち縛送せず、清廷以爲らく羅卜藏丹津、噶爾丹策凌の處に在らば必ず將に青海に及び西藏を擾さんとすと、七年遂に進剿準噶爾の策を決す三月、領侍衛內大臣傅爾丹を靖邊大將軍と爲し北路より出で三等公岳鍾琪を寧遠大將軍と爲し西路より出で俱に準噶爾を剿せしむ六月、噶爾丹策凌使をして來り告げしむ將に羅卜藏丹津を献せんと然れども大軍既に出づと聞き懼れて歸る

案ずるに此れ所謂る節外に枝を生せし者にして阿爾泰の分界未だ決せざるに更に羅卜藏丹津を縛送せざるの事起れるなり然れども此れ決して準噶爾の和を破りしに非ず是時清廷の議、實に一變せしなり清廷の狡獪なる既に請和の我より發するを好まず法を設けて彼をして提起せしめ今又和を破ら

んと欲して我、其名を得んことを恐れ殊に難きを強ひて之に責め破和の咎を彼に嫁せんと欲し故さらに原案を結ばず別案を取て彼をして和を破らしめんと欲せしなり然らずんば羅卜丹津が準噶爾に入りしは二年二月に在り何が故に抛棄すること五年にして俄に命じて之を縛送せしめしか且つ何が故に之を策妄阿喇布坦に責めずして反て之を其子に責めしか此れ自から說あるなり策妄阿喇布坦固より老獪、清廷も亦其の決して命に從はばるを知る命じて從はずんば竟に戰の一字を題せざるを得ず戰の一字は康熙晩年の厭ふ所にして世は唯〻和の一字を題せんとを欲す故に策妄阿喇布坦が時、決して之を强ふること能はず而るに幸にして策妄阿喇布坦死して噶爾丹策凌は新立未だ固からざるの際となれり清廷の議に以爲らく此れ必ずしも和の一字を題するを用ゐず戰の一字にして幸に意の如くならば阿爾泰の東西は爭ふに足らず事、一擧にして決せんのみと毛を吹き疵を求め羅卜藏丹津を隱蔽せるの一事を得、以て開釁の口實と爲さんとせしなり其意蓋し以爲らく羅卜藏丹津を縛送するは噶爾丹策凌の難んずる所、彼若し躊躇の色あらば因て叛逆を隱匿するの罪を問ひ出兵の名を得んと而るに事は必しも清廷の謀る所の如くならず噶爾丹策凌は此の縛送を難しとせず羅卜藏丹津を縛送して至る此より之を視るに此の事本と開釁の理由とするに足らず而も清廷は豫め縛送の難きを期したれば其の如何に來り答ふるかをも待たず早く已に軍議を決して大軍を出す此れ明かに清廷の和を破れるなり當時交通の不便なる往復の歲月を要すること勿論なり而るに應否未だ定らざるに既

嘯亭雜錄の記事

傅爾丹科布多に築く

和通泊の敗

に兵を出す清廷の罪を欲せしこと知るべきなり故に是時若し羅卜藏丹津の縛送にして少しく此より早からしめば清廷は殆ど出兵の名を得るに苦しみしなり惜い哉時機少く遲く清廷をして危き處に於て名を得しめしこと此の事情を道破せる者は嘯亭雜錄に若くは莫し今其の一節を擧げて之を證せん

憲廟踐祚、欲レ竟二仁廟未一、竟之緒一、會策逆死、子噶爾丹策零嗣、噶少年聰黠善馭二士卒一、諸台吉樂レ爲二之用一、憲廟決レ議討レ之、朱文端軾沈總憲近思皆以時未レ至、惟張文和廷玉主レ戰、薦二費直烈英東嗣爵傅爾丹者一爲レ帥、云々、達忠烈編力諫、上曰、策逆新死、噶逆新立、何云二不可一、達曰、策零雖レ死、老臣固在、噶逆親レ賢使レ能、諸酋長感二其先德一、力爲二捍禦一、我以二千里轉レ餉之勞一、攻二彼效レ死之士一、臣未レ見二其可一、況溽暑未レ易レ興レ師、張文和曰、六月興レ師、載二諸小雅一、君未レ知耶、達詞色愈厲、上曰、然則命レ汝、副二傅爾丹一行、尙敢辭耶、達語塞、遂叩レ首出（文中仁廟は康熙帝、憲廟は雍正帝、策逆は策妄阿喇布坦、噶逆は噶爾丹策凌なり）とあり此れ正しく策逆新死、噶逆新立と云ふ間を伺ひ康熙晩年の密旨を翻して此の挑戰を行ひたる者なり余故に曰ふ準噶爾の阿爾泰を爭ふや直、寧ろ清廷に在り其の科布多に戰ふや直、寧ろ噶爾丹策凌に在りと

九年、傅爾丹進て城を科布多に築く噶爾丹策凌、其族人大小策凌敦多布をして兵三萬を以て來り犯さしむ大策凌は噶爾丹が弟布木の子、小策凌は默爾根岱青の曾孫、同族同名、故に大小を以て之を分つ大策凌は勇を以て聞え小策凌は善く謀る噶爾丹策凌能く之を兼ね用ゆ傅爾丹の兵、和通淖爾に敗る岳鍾

琪北路の敗を聞き杞成斌を遣り進て烏魯木齊を攻め以て敵勢を分つ然れども得る所無し九月、大策凌、喀爾喀を侵さんことを謀る喀爾喀親王丹津多爾濟、都王策凌等迎へ擊ち大策凌遁れ去る尋て阿濟嶺を踰え伯格爾、察罕額爾克に至り書を貽りて輝特公巴濟及び推河駐牧の額魯特輔國公茂海、台吉車稜等を誘ふ達什達爾札、濟克濟札布、朋素克岱青等皆之に應じ導て喀爾喀の牧を掠めしむ初、丹濟拉の清廷に歸せしや大策凌の劫掠に遇ひ從者百餘人に過ぎず清廷、牧を推河に與へ之に來歸の額魯特を給す是に至て大策凌、使をして書を携へて多爾濟色布騰に致し以て之を誘はしむ諜者獲て之を献ず清廷以爲らく此れ準喀爾が反間の計のみと書を以て多爾濟色布騰に示し因て其牧を移さしむ台吉索諾木吹濟、其屬四十餘戶を誘ひ準噶爾に附く多爾濟色布騰乃ち大將軍に就き歸化城に徒らんことを請ふ清廷、牧を西喇穆稜に給す明年八月、小策凌、衆三萬を糾し額駙策凌の牧を塔密爾に襲ふ額駙繞りて其の背後に出で擊て之を破り追て又額爾德尼昭に破る小策凌、夜、推河に遁れ輜重牲畜を棄てゝ走る（事は第三編に詳なり）初、岳鍾琪の寧遠大將軍となりしや王師の十勝を策し車騎營の盡善を稱す世宗其の百戰の名將なるを以て其言を信じ滿洲護軍をして其法を習ひ以て陣に臨ましむ既にして又軍機事宜十六條を奏陣し襲擊進剿せんことを請ひ又兵を吐魯番に遣りて糧米を運送せしむ準噶爾、吐魯番を爭ひ屢々來りて運糧を劫す（事は第五編に詳なり）既にして鍾琪又巴里坤より出て木壘に築き兵二萬を駐し敵の來路を截らんと請ふ清廷之を許す適〻敵兵三千、烏魯木齊より入り哈密を掠む鍾琪、總兵曹勳等を

雍正帝の失政

りて之を二堡に拒かしめ又將軍石雲倬等に檄し萬人を率ゐ烏可克嶺に赴き其の歸路を要擊せしむ而るに雲倬遲く發すること一月、敵遂に塔呼、納呼の路より遁れ去る鍾琪之を劾す大學士鄂爾泰幷て岳鍾琪が坐ながら機會を失するを劾す清廷乃ち之を召還し查郎阿を以て之に代へ鄂爾泰に命じ陝甘を督巡し軍務經理せしむ查郎阿未だ任に到らず副將軍張廣泗をして大將軍の印務を護理せしむ張廣泗乃ち岳鍾琪の失を擧げて奏す準噶爾は專ら騎を恃み鍾琪は主として車戰に賴る車は溝塹沙磧の宜き所に非ず且つ木壘は兩山の中に在り形、釜底の如し敵を受くるは甚だ易く敵を制するは甚だ難し屯兵進取の地に非ず請ふ西南の關含圖嶺（或は科含圖に作る）に移駐せんと尋て復た奏して巴里坤に駐す

案ずるに雍正帝は守成の主なり創業の才に非ず故に將を擇び帥に任ずる盡く其人を失へり張廷玉に聽て傅爾丹を用れば傅爾丹は徒に父の書を讀む趙括一流の人、唯〻其の風采の古名將に似たるのみ岳鍾琪が西藏青海の役に功ありしを以て之を用れば鍾琪も亦柱に膠して瑟を鼓くの徒、才壁沙磧の車戰に可ならざるを知らず一意、車戰を以て進勦せんとす此の如くにして此の二大將軍は俱に罪を負ふに至れり夫れ準噶爾は康熙帝の英邁を以てして猶ほ其の晩年には和を以て得策とす而るを況や雍正帝をや然るに雍正其の新立の始政、天下の耳目を一身に集めんと欲し功名の念に驅られ敵人の新立固からざるを侮り群臣の苦諫を聽かず以て此の未了の局を結ばんと欲す固より既に難し而も用し所、其人に非ず將を代へ兵を增すも未了の案、終に結ぶ可らず是に於てか事局依然、康熙の末年の

光景に復せり帝は人を知るの明無きのみにあらず實に自から知るの明をも失へり

十一年、又鄂爾泰をして北路の軍務を經理せしめ七月、定邊大將軍福彭をして大軍を統て烏里雅蘇台に駐せしめ定邊左副將軍策凌をして科布多に屯せしむ十二年五月（我享保十九年西一七三四年）論すらく今年の進兵を停止し使を遣して前往し利害を宣示し敵若し懼を知て和を求めば即ち定議完結し若し游移推諉せば大兵を整備して明年を以て進剿せんと七月、遂に科布多の軍を撤し八月、侍郎傅鼐、內閣學士阿克敦等を遣り往て噶爾丹策凌に諭さしむ九月、西路の副將軍張廣泗、將を遣りて鄂龍大阪に戰ひ四百餘級を斬り三十六人を獲、餘衆皆遁る

案ずるに此れ正しく清廷の請和なり彼未だ一使を發して來らず清廷先づ使を發し且つ先づ軍を撤す此れ準噶爾に一步を讓れる者なり明年進剿の言は徒に其外を飾れるのみ蓋し帝も亦當初の輕擧挑戰の非を悔いたり故に傅鼐が說に耳を傾け準噶爾に赴き平和を訂せしむ（事は既に前篇に詳なり）然れども淸朝の史家は此の屈辱を掩はんが爲めに種々の文を舞し務めて請和の彼より出でしを粧はんとす故に藩部要略は喀爾喀部に於て十二年の遣使を記せず唯〻十三年の噶爾丹策凌の請和を記し厄魯特に於て十二年の遣使を記したるも猶ほ諭「降噶爾丹策凌」と云へり諭降の兩字、用得巧なりと謂ふべし嘯亭雜錄は會賊有「求」降意」而盈廷諸臣皆欲「罷」兵とあり諸臣の兵を罷めんと欲する前に於て先づ敵の降意あるを揣摩す此亦措辭に巧なる者、而して新疆識略に至ては遂に彼此を轉倒し噶爾丹

策凌衰弱、亦不「復敢援」邊、尋遣「人來議」和、十二年、傅鼐及阿克敦報「之」と云ひ十二年遣使の前に於て準噶爾の議和を叙し傅鼐、阿克敦を以て報使と爲す報之の二字、苦心の狀、思ふべく察すべし而も其の起因を噶爾丹の衰弱に歸するに至りては揑造も亦甚し聖武記は之に據り遂に十二年に於て是年準噶爾遣「使請」和と記す歷史も是に至りては殆ど信を措くに足らず聖武記は猶ほ此に止まらず一欵「干烏蘭布通大捷之後」再款「干西藏大捷之後」三款「干鄂爾昆河大捷之後」皆制「款之權在「中國」乞款「之誠在「外夷」と論せり然れども笑ふ可きは烏蘭布通の請和は噶爾丹が詭計に欺かれたる者、大將軍此が爲めに劾奏せられ功過相抵するに因て僅に治罪を免かる款を乞ふこと噶爾丹より出でたらんも何の誠かあらんや再款三款に至ては皆淸廷より先づ款を通せしめたる者而も再款は未了の案となりて三款に推移せり又何の乞款の誠か噶爾丹策凌に在らんや此れ所謂る掩「耳盜」鈴の甚き者なり阿克敦は云へり大皇帝の仁慈なる無罪の人をして干戈の下に苦しまむるに忍びず故に來て和議を媾すと此れ初次使準噶爾奏中の語なり此言公明正大寧ろ史家の誇りとすべき所、而るに反て其事を曖昧にす雍正帝の盛意を解せざるに似たり然れども其實、阿克敦も亦飾辭、史家其の此を以て誇と爲すに足らざるを知る故に言はざるのみ聖武記又云く準噶爾遣「使請」和、詔「策凌查郎阿」來「京、與「王大臣」議「之」、莊親王允祿與「兩將軍」、皆主「進討」、大學士張廷玉等言、且撫「之」、若不「順則進討」、兩議上云々と此れ當時の狀なり進討を主張せる者、兩大將を除けば莊親王僅に一人のみ何れ

盈廷諸臣皆欲罷兵

入藏熬茶を許す

の國、何れの世にか大將軍、敵に臨み進討を否とせる者あるべき兩將軍の如きは進討主張の外に置て可なり況や策凌は豪突豪勇の將に非ず寧ろ公平の見を持せる人、必しも進討を主張せし人に非るをや而して張廷玉は最初、帝の意を迎合し進討を慫慂し傅爾丹を蹶め達福を折きし人、今又帝の悔心あるを見、兩可游移の說を立て且撫之の三字を提起し來る而も此輩、等の一字に隱れて其の幾十百人ありしを知らず禮親王之を明記して盈廷諸臣皆欲罷兵と云ふ然らば莊親王以外、一人の進討を主張せし者無かりしなり即ち罷兵の決して帝の仁心より起りし者に非ること亦知るべし史家之を知る故に帝の意に出でたるを明言すること能はず而も請和の我より出ることを恥づ因て文を飾て醜を掩へるのみ其の窮狀寧ろ憐む可きに非ずや

十三年三月、使者還る噶爾丹策凌、其臣垂納木喀をして偕に來て之に報せしめ且つ哲爾格西喇呼魯蘇より巴里坤に至るまでを限りて界と爲んことを請ふ清廷許さず議成らず六月、垂納木喀還る清廷、西路より出で去らしむ是年、世宗崩し高宗立つ乾隆元年（我元文元年、四一七三六年）清廷遂に兩路の大軍を撤す二年十二月、準噶爾の使人哈柳至り固く前說を執る議又結ばず明年、清廷、阿克敦等を遣り再たび噶爾丹策凌に就て商議せしむ噶爾丹策凌の意、額魯特は阿爾泰を踰えず喀爾喀は札布堪を踰えず其間を以て隙地と爲し阿爾泰を以て分界と爲さゞるに在り議、故を以て亦決せず哈柳をして阿克敦等を送り且つ來て之を清廷に請はしむ清廷聽かず然れども之に入藏熬茶を許し通市を許し又札布堪を踰えて城垣を築

彼此和の一字に歸す

阿爾泰山は爭點

かざるを約す四年二月、哈柳還り十月、又來り遂に原議の如くにして約成る

案ずるに此の和約は雍正四年以後の懸案にして烏梁海の分屬に事起り中間遂に干戈を執て相見るに至り其極、清廷より先づ和を求めて準噶爾之に應じたる者にして是時、啻に清廷の戰を厭ひしのみならず實は準噶爾と雖、大小策凌等既に死して復た雌雄を爭ふの餘勇無し是に於て彼此の意、再たび和の一字に歸す然らば議約一事甚だ易かるべくして反て然らざりし所以の者は他無し阿爾泰山梁に界の一字を題すると題するを欲せざるとに在るのみ而して清廷は固く執て阿爾泰山梁に主倫を置かんことを欲し其他は準噶爾と多く相爭はず頗る讓步せる所あり遂に阿爾泰山梁を以て分界と爲すことを得しも喀爾喀をして札布堪河を越て游牧せしめず科布多一帶は唯〻烏梁海の游獵を許すのみ是に於て其の境界線は克木克木齊克より阿爾泰山梁を橫絕し哲爾格西喇呼魯蘇（札哈沁旗界）を經、巴里坤を以て清廷の版圖に歸し羅布諾爾を以て準噶爾に歸し直に劃して噶斯口に至る此れ蓋し當時の分界なり懸案是に由りて纔に結び凡そ十四年にして和約成る

中、達瓦齊、阿睦爾撒納の亂、伊犁の戡定

和議成るの後七年（即ち乾隆十年）噶爾丹策凌死して其子策妄多爾濟納木札勒、嫡出を以て汗位を襲く是時に當りて準噶爾方に强くして二十四鄂托克、九集賽、二十一昂吉あり鄂托克は汗の部屬にして大小一ならず大なる者は五千戶、小なる者は五百戶、宰桑を置くこと多少又齊からず多き者は三四人、少

扣肯汗

き者は一人、集賽は以て喇嘛一切の事務を辦理するに供す喇嘛凡そ六千餘人、一集賽各〻一千戸、一宰桑を置く準噶爾宰桑共に六十二人、昂吉は諸台吉の屬戸にして杜爾伯特、和碩特、輝特の諸台吉皆之に隷し凡そ戸二十餘萬、人口六十餘萬、策妄多爾濟納木札勒既に立ちて童昏にして國事を治めず是に於て國中亂れ遂に達瓦齊の簒立あり初、策妄多爾濟納木札勒の立ちしや年尚ほ幼し同母姉あり鄂蘭巴雅爾と云ふ毎に善言を以て之を開導し以て過無きを得し者十年、漸く長じて遂に其言を用ゐず既にして讒者あり云ふ此れ俄羅斯に效て扣肯汗たらんと欲するのみと（扣肯汗は蒙語女帝なり時に露國の女帝エリサベスの時に當る故に云ふ）策妄多爾濟納木札勒察せず其姉を執へ又多く宰桑を殺し惡を行て復た忌憚する所無し姉夫薩音伯勒克之を怒り喇嘛達爾札に因て亂を作し策妄多爾濟納木札勒を殺し喇嘛達爾札を立つ喇嘛達爾札は噶爾丹策凌が庶長子にして立つことを得ざりし者なり喇嘛を以て汗位を篡す衆皆附かず噶爾丹策凌に幼子あり策旺達什と云ふ小策凌敦多布の子達什達瓦、輝特台吉阿睦爾撒納、和碩特台吉班珠爾等皆之を立てんと欲す喇嘛達爾札覺りて之に先だち策旺達什及び達什達瓦を殺す達什達瓦の昂吉は南路喀喇沙爾に在り其子圖魯巴圖遠く竄れて往く所を知らず其妻昂吉の衆數千人を率て清廷に降る

案ずるに此衆、始、巴里坤に至る清廷命じて阿爾泰に移し後更に鄂爾昆に游牧せしむ乾隆二十二年、清廷、熱河に安遠廟を立て其の喇嘛を移して之を居らしめ其の父母兄弟の同く來ることを願ふ者は

阿睦爾撒納、達瓦齊を汗となす

之を許す今の熱河の額魯特兵は即ち其の同く來れる者なり

時に大策凌敦多布の孫達瓦齊、其の昂吉額密爾に在り阿睦爾撒納乃ち之に告げて曰く喇嘛達爾札既に達什達瓦を殺す禍、將に子に及ばんとすと達瓦齊之を聞き懼れ和通呼爾哈に走り將に五千の衆を携て清廷に降らんと欲す清廷之を聞き定邊左副將軍成衮札布に諭して云く達瓦齊來らば善く之を遇せよと而して達瓦齊中變し折れて哈薩克に奔る喇嘛達爾札乃ち人をして之を哈薩克に索めしむ達瓦齊居るに地無く已むことを得ずして復た舊牧に歸り遂に班珠爾、阿睦爾撒納に會し相謀りて喇嘛達爾札を殺し其位を奪ふ班珠爾は西藏拉薩汗の子噶爾丹丹衷が策妄阿喇布坦の女博托洛克を娶りて生む所なり策妄阿喇布坦、丹衷を留むること三年、遂に之を殺し（事は下章に詳なり）博托洛克を以て改て輝特台吉韋徵和碩齊に嫁す時に既に娠めり阿睦爾撒納を生む韋徵和碩齊養て子と爲し遂に輝特台吉を冒す輝特原と杜爾伯特の附庸たり土爾扈特の去て俄羅斯に避けしや輝特出でゝ之に代り四衛拉特の列に入り塔爾巴哈台に居り是に至て準噶爾の一昂吉たり班珠爾既に長し亦一昂吉の衆を得、和碩特台吉たり阿睦爾撒納生れて巧慧、權勢遠く其兄に過ぐ故に汗位に意無きに非ずと雖、其の和碩特の出なるを以て衆の未だ遽に附かざらんことを慮り先づ達瓦齊を推して汗と爲し異日取て之に代るの地を爲す而して達瓦齊庸愚之を悟らざるなり會〻達什達瓦の姪訥默庫濟爾噶爾、達瓦齊と偕に分て準噶爾を有せんと欲し兵一萬を率ゐ猝に伊犁に至る達瓦齊其の所を失はんことを懼れ之と戰て破れ舊牧に奔り阿睦爾撒納の計を

阿睦撒爾納入覲す

用ゐ納默庫濟爾噶爾を誘殺す是に由りて益〻阿睦爾撒納を重んず而して阿睦爾撒納功を恃みて心驕る衆宰桑等之を憎み私に達瓦齊に告ぐ達瓦齊聞て喜ばず阿睦爾撒納之を知り班珠爾、納噶察及び外姪訥默庫等と哈薩克に會し達瓦齊か舊牧を劫掠し且つ額爾齊斯に耕種して自衛の計を爲す（是より先、杜爾伯特既に清廷に降る故に此を居ることを得、事は前編に詳なり）達瓦齊兵を以て之を攻めしむること三たび皆克たず乃ち自から三萬の衆を領して來り擊つ阿睦爾撒納勢窮して支ふること能はず是に於て班珠爾と偕に其屬を携へ間道より來り降を清廷に請ふ時に乾隆十九年（我曆四年、西一七五四年）なり其の十月、阿睦爾撒納等、熱河の山莊に入覲す清廷、阿睦爾撒納を封して親王と爲し班珠爾を郡王と爲し納噶察を輔國公と爲す納噶察は班珠爾の從弟、其父索爾札は噶爾丹丹衷が弟なり準噶爾の西藏を襲ひしや索爾札其父拉薩汗と偕に之を防ぎて擒となる噶爾丹策凌が時、十戸を與へて之を資養す索爾札死し納噶察、班珠爾に依て處る是に至て偕に至る（索爾札が事は下章に見ゆ）是より先、達什達瓦の殺されしや其の宰桑薩拉爾（或は薩喇勒に作り薩賴爾に作る）千戸を携へて降る高宗固より蒙古語を善くす乃ち之を召見し親しく問ふに亂の故を以てす薩拉爾悉く以て對ふ高宗悅び之に散秩大臣を授く是に至て又以て阿睦爾撒納に問ふ阿睦爾撒納、清廷の力を借りて之を平げ己因りて之に代らんと欲す乃ち準噶爾代つ可きの狀を說くこと甚だ悉せり帝益〻喜び之を朝に詢る舉朝、前事の失に懲り皆師を勞し衆を動すことを願はず唯〻大臣傅恒一人之を贊す帝是に於て其の內亂乘る可きを察し意を決して兵を出す二十年二月、北路は班第を以て定北將軍と爲し阿睦爾撒納之に副たり西路は永常を以て定西將軍と爲し薩拉爾之に副たり諸〻新降の徒、之に分屬す兩副將軍各〻前鋒三千を領し舊纛を建て、前進し將軍參贊之に繼ぎ北路は烏里雅蘇台より出で西路は巴里坤より出で各〻兩月の糧を携へ相約して博羅搭拉河に會し伊犁に向ふ達瓦齊始より戰意無く又戰備無し兩副將軍皆準噶爾の虛實に通ず故に毫も遲疑する所無くして進み數千里の行軍、殆ど寂寞無人の地に入るが如し準噶爾の兩副將の舊纛を認知せる者或は來て羊酒を献じ降者紛々として途に相踵ぐ薩拉爾の軍、途にして達瓦齊が入貢の使に遇ふ薩拉爾之を叱して曰く我、欽命を奉じ往て達瓦齊を討するのみ其他を知らずと其使を執へ其書を献じ進て察罕烏蘇に抵り侍衛塔齊圖を遣り達瓦齊を招かしむれば既に格登に竄れたり五月、運進みて伊犁に抵り羅卜藏丹津を擒にす羅卜藏丹津、初、準噶爾に奔り策妄阿喇布坦に依る策妄阿喇布坦死して其女婿和碩特台吉羅卜藏車凌、將に其屬を率て土爾扈特に往かんとす噶爾丹策凌知りて之を擒にし其妻を奪ひ亦革徵和碩齋に與ふ丹津乃ち車凌に因りて亂を作し噶爾丹策凌を殺さんと欲す噶爾丹策凌又知て之を拘ふ適〻清廷來て羅卜藏丹津を索む乃ち縛送して至る中途にして清廷既に兵を出すと聞て止む是に至て猶ほ伊犁に在り故に擒に就く

案するに雍正の罪を準噶爾に問ひしや其の羅卜藏丹津を隱匿せるを以てす然れども此れ强て以て名と爲ししなり其實は之を借りて和を破りしのみ噶爾丹策凌亳も隱庇の意無く反て縛送を以て其利と

午門の献俘

爲しし者あり雍正其意を知らず以爲らく噶爾丹策凌必ず躊躇の色あらんと其使の還るを待たず先づ兵を發す其心知るべきなり清朝の史家、其の我より和を破り我より和を媾ずるの醜を掩はんとして責を噶爾丹策凌に歸す何ぞ其れ陋なるや乾隆御製文準噶爾全部紀略は我世宗憲皇帝索ニ羅卜藏丹津一、噶爾丹策凌稱ニ已縛送至一中途一聞レ進レ兵而止一者、非レ詐也と云へり蓋し當時已に兵を出せり故に縛送を聞て師を返すこと能はず遂に其言を詐と爲して兵を進めたりしなり乾隆其實を知る故に云く非レ詐也と此れ以て噶爾丹策凌が寃を雪ぐべし此事前に漏せり故に今此に附記す

達瓦齊の衆、猶ほ萬餘人、格登に在り山を負ひ淖爾を前にして營を結び肯て即ち降らず侍衛阿玉錫、二十二騎を率ゐ大呼して直ちに其營を斫て入る衆驚き潰ゆ達瓦齊、千餘騎を携へ庫魯克嶺を踰えて走る諸軍分道追躡し皆馬疲れしを以て獲ること能はずして返る達瓦齊陰に計る烏什の伯克霍集斯は已の立てし所たり必ず我に負かじと百餘騎を隨へ逃れて回疆に赴く霍集斯偵して之を知り其弟を遣り酒を携へて往き欺て之を迎ふ達瓦齊及び其子羅卜札、宰桑愛爾齊等七十餘人盡く縛せられ蓋し是より先、霍集斯既に定北將軍班第の檄を承けしが故なり霍集斯馳て伊犂に告ぐ班第、兵五百人を遣り之を穆素爾嶺に迎へしめ械して北京に致し羅卜藏丹津と先後相繼て至る清廷乃ち献俘の禮を行ひ皇帝、午門の樓に御して之を受く是に於て方碑を格登山上に建て四體の文を刻し以て成功を表す然れども其の敢て大軍を抗せず且つ庸懦憫む可きの故を以て特に達瓦濟の罪を宥し恩を加へて親王の封を授げ第を寶禪寺

瘴氣近づくべからず

街に賜ひ又誠隱郡王の孫女を擇て之に配し命じて御前侍衛と爲す今、京旗に額魯特王爵あるは即ち此爲なり達瓦齊身體極て肥え面、盤より大に腰腹十圍、瘴氣近づく可からず平生爲す所無く庭の大池を作り日に鵝鴨を驅り自から其中に浴して以て娛樂と爲せりと云ふ

案するに達瓦齊は實に庸懦爲すこと有る能はざるの人、乾隆の言ふ所の如し其の汗となりしは全く阿睦爾撒納等の力に賴る阿睦爾撒納去りて復た智囊を得ず遂に手を束ねて擒に就く故に兩路の軍、一刃に血ぬらず一矢を失はずして大功を奏せり若し庸懦爲すこと有る能はざるの人に非んば康熙雍正の覆轍を再蹈すること無きを保し難し乾隆は眞に福運の會に當れりと謂つべし

余、前に北城樓園に在りし日、同寓の吉津生余か爲めに說く園內曾て土爾扈特人數名を暫住せしむ其室、一種言ふ可からざるの臭氣あり殆ど近づく可らず常に鼻を掩て過ぐと今、達瓦齊が事を叙して瘴氣近づく可らずと云ふに至り覺えず破顏一笑せり汗すら尙は此の如し況や其餘の末輩底下人を

や

達瓦齊の亂始て定まりて阿睦爾撒納の反形漸く顯はる阿睦爾撒納本と和碩特の出たり曾て異母兄沙克都爾を襲殺し遂に輝特の衆を領す其の達瓦齊を助け喇嘛達爾札を殺しゝや固より其の與みし易きを知る而も推して汗と爲す其意豈に測る可けんや清廷の準噶爾を平定するに當りて其意、原と悉く之を郡縣にせんと欲せしに非ず其の平定を待ちて復た四衛拉特の後を立て以て四汗と爲し其力を分ち其勢を

削り之を内外蒙古各部に比せんと欲せしに過ぎず蓋し班珠爾を以て和碩特汗に擬し車棱を以て杜爾伯特汗に擬し阿睦爾撒納を以て輝特汗に擬し準噶爾に至りては噶爾丹策凌の子姪にして若し降附する者あらば擇て之に汗を授けんとするに在り阿睦爾撒納窃に之を聞き心甚た慊せず札哈沁宰桑禡木特新に降りて參贊大臣たり曾て達瓦齊か爲に阿睦爾撒納を追し者なり固より其の異志あるを知る密に奏すらく阿睦爾撒納は豺狼なり降ると雖、往かしむ可らず往かば必ず殃を爲んと帝以爲らく額駙色布騰巴爾珠爾は言語相通じ氣味相同じ以て其の好心を察するに足ると隊を同じくして遣る何ぞ料らん阿睦爾撒納狡獪、同隊相親み數日の後、額駙既に其の牢籠する所とならんとは阿睦爾撒納乃ち額駙を以て奥援と爲し之に語て曰く禡木特は心を傾けて降れる者に非ずと額駙以聞す帝、額駙に諭して曰く疑を滋くすること勿れと而して班第に飭して相忌むこと勿からしむ大軍既に伊犂に克つ清廷、阿睦爾撒納に親王の雙俸を賜ひ護衛の員を增し將に入覲を待て輝特汗を授けんとす阿睦爾撒納意、特に此に在らず隱然、總汗を以て自から處り擅に兵を調し擅に人を誅し清廷の賜服を服せず副將軍の印を用ゐず自から渾台吉の菊形篆印を用ゐ其の哈薩克に移檄せる自から蒙古漢軍を統へ伊犂に屯すと稱す然れども猶ほ自から之を取りて衆の就かざらんことを慮り必す上命に出でしめて安じて之に居るを得んことを欲す額駙の京に還るに臨み私に其情を以て告げ額駙の代奏を冀ふ時に將軍班第、參贊鄂容安皆伊犂に駐し善後事宜を籌す心之を疑ひ先後密奏數次、帝始、未た信せず既にして逆形全く具はる帝乃ち其の未た發せ

阿睦爾撒納自恣

ざるに乘りて之を誅せんと欲し班第に命し密に之を圖らしむ而るに是時大軍既に撤して留れる者僅に五百のみ班第等事の成り難きを慮り敢て發せず是より先、帝、飲至の禮を行ひ因て四汗を冊封せんと欲し阿睦爾撒納等に命し九月を以て皆熱河に入覲せしむ阿睦爾撒納、上命の其前に在らんことを欲し額駙と約し七月下旬を以て期と爲す然れども額駙も亦之を言ふことを憚り敢て奏せず帝故に知らざりしなり阿睦爾撒納、額駙の約を信じ心、上命の到るを俟つこと一日千秋の如し而して入覲期漸く迫る班第之を促して發せしむ以爲らく邊に入らば阿睦爾撒納を擒にせんこと囊中の物を探るが如きのみと乃ち喀爾喀親王額琳沁多爾濟をして偕に行て之を監せしむ阿睦爾撒納已むことを得ずして程に上る然れども猶ほ額駙の信至らんことを願ひ遲々として行き納噶察をして途より歸りて班第に告げしめて曰く新降宰桑阿巴噶斯、伊犂喇嘛と語る若し阿睦爾撒納をして準噶爾の衆を統べしむるに非ずんば寧ろ腹を割て死せんのみと意、班第の恐れて之を代奏せんことを冀ふに在り班第斥けて應せず阿睦爾撒納詭計遂げず額駙の信も亦至らず八月十九日、行て烏隆古河に至る其の舊牧に近し乃ち副將軍の印を以て額琳沁多爾濟に交して先づ發せしめて曰く暫く家に歸て行裝を治め後二日にして相及ばんと時に其の密計を知れる者あり額琳沁多爾濟に首告す額琳沁多爾濟信せず印を領して先づ發す阿睦爾撒納是に於て額爾濟斯より折回し間道より北に逸し到處、亂を煽す伊犂の諸喇嘛、宰桑等皆叛き軍台を掠奪し群起して之に應ず變、倉猝に起り豫備に暇あらず班第、鄂容安皆圍まる時に定西將軍永常木壘に駐す變を

阿睦爾撒納叛す

聞て救はず俄に退て巴里坤に屯し軍糧を哈密に移す北路の聲援是に因て斷絶し賊勢益〻盛なり班第、鄂容安皆節に殉し禑木特も亦屈せずして死す獨り薩拉爾一人、脱して哈密に還る清廷是に於て阿睦爾撒納の叛を中外に宣示し額駙色布騰巴爾珠爾の爵を貶し力を効して罪を贖はしめ額琳沁多爾沁に自盡を賜ひ永常を捕へて治罪し班第、鄂容安の殉節を褒し策楞を以て將軍とし玉保、富德、達爾黨阿等を以て參贊とし再たび兩路より出て速に往て進討せしむ是より先、清廷、阿睦爾撒納の入覲を俟てども至らず尋て其叛を聞き入覲の台吉を以て四汗を封し車棱を杜爾伯特汗と爲し噶爾藏多爾濟を綽羅斯汗と爲し沙克都爾曼濟を和碩特汗と爲し巴雅爾を輝特汗と爲す皆所部の台吉なり而して班珠爾は阿睦爾撒納が親兄なるを以て執へて其罪を論す是に至りて又沙克都爾曼濟、噶爾藏多爾濟に命し往て策楞が軍に會せしめ班珠爾を械して獄に至る班珠爾固より阿睦爾撒納の謀に與からず乃ち其の族人三濟都、鄂濟爾等に書を與へ和碩特の衆をして之を分剿せしめんことを請ふ清廷之を許す三濟特、書を得て云ふ諾爾布敦多克、沙克都爾曼濟は皆其の鄰牧、又同族台吉瑪尼巴圖、巴蘇泰等皆異志無し當に書を以て之に傳示すべしと鄂齊爾も亦父に告げて偕に逆を討せんとす薩拉爾、伊犁の宰桑等を集め共に議す諾爾布敦多克及ひ沙克都爾曼濟か子圖們に約し兵を以て博羅搭拉、布爾哈蘇台、闥勒奇嶺等の地に至り阿睦爾撒納を協剿せんと諾爾布敦多克、圖們等是に由て各〻使人をして巴里坤に至らしむ達瓦濟も亦奏す阿睦爾撒納は臣か夙讎なり杜爾伯特台吉伯什阿噶什、庫本諾音台吉諾爾布等は臣、其の賊と黨せざるを知る請を書を遣りて其をして協力剿擒せしめんと清廷又之を許し策楞をして其書を轉交せしむ是に於て伯什阿噶什、諾爾布等皆降る二十一年（我寛暦六年、西一七五六年）正月、大兵長驅し特克勒河に至る阿睦爾撒納か處を距る僅に一日程なり將に急に之を追はんとす忽ち報あり云ふ台吉諾爾布巳に阿睦爾撒納を擒にし將に來り献せんとすと玉保、軍を按して之を待ち先つ紅旗を馳て捷を策楞に報す策楞察せず報を受けて即ち轉遞し北京に抵る而して阿睦爾撒納は巳に遁れて遠く哈薩克に入れり二月、將軍參贊相繼て伊犁に至り互に其の欺罔を受けしを咎め兵を頓して進まず五月、清廷、策楞、玉保兩人の職を褫ひ達爾黨阿、哈達哈を以て之に代へ又巴里坤辦事大臣兆惠に命し巴里坤より往て之を援けしむ土爾扈特台吉巴圖爾烏巴什と云ふ者あり噶爾丹策凌か壻たり伊犁に附牧す達瓦齊の亂に大軍を迎へて降を乞ひ阿睦爾撒納か亂作るに及ひ詭て博羅搭拉に赴き大軍を助けて進剿せんと稱し去て來らず阿睦爾撒納が哈薩克に遁れしを知り伊犁を覬覦す既にして大軍伊犁に入る乃ち察宰烏蘇、博羅布爾噶蘇、諸境に竄去し追兵至れば輒ち逸し間を伺て巴爾達穆特、塔本集賽等の諸鄂托克を游掠す達爾黨阿、阿睦爾撒納を哈薩克に追ひ相隔つること一谷、僅に二三里、阿睦爾撒納忽ち一計を出し哈薩克の使人と稱し來り告げしめて曰く即ち阿睦爾撒納を擒にして献せんと欲するも唯〻汗未だ至らず乞ふ暫く師を緩くせよと達爾黨阿之を信し兵を緩くす阿睦爾撒納乃ち徐ろに駝載して去り達爾黨阿、哈薩克に檄して之を索むれども往還數月、終に要領を得ず而して北路の將軍哈達哈も亦哈薩克の兵に巴顏山に遇て進擊せ

ず其の自から去るに任す是に於て新降の諾台吉宰桑等、皆二將軍の能く爲すこと無きを知り漸く輕侮の色あり適〻北路に青滾咱卜の變あり喀爾喀軍台同時に皆撤す是輩乃ち雜然として蠢動し輝特汗巴雅爾先つ叛し詭て稱す其の所部、沙克都爾曼濟が爲めに掠めらると將に兵を引て巴里坤を襲はんとす噶爾藏多爾濟の從子札納噶爾布、噶勒雜特宰桑哈薩克錫喇之に次ぎ噶爾藏多爾濟及ひ布魯古特台吉呢瑪、又之に次ぐ都統和起此が爲めに誘殺せられ策楞、玉保も亦逮問途次に在て害に遭ふ時に兆惠、定邊右副將軍として伊犂に在り兵を領する僅に一千五百、變を聞て軍を旋し濟爾哈朗河より轉戰して南し十一月起行し鄂壘札拉圖に戰ひ庫圖齊に戰ひ達勒奇に戰ひ前後數十戰、敵を殺すこと數百千、然れども軍台撤して羽檄通せず敵人雲の如く進退殆と窮る明年正月、始て烏魯木齊に達すれば敵兵四合し圍、解く可らず十二日より十七日に至る數十百合、寡を以て衆を挫き二十七日、僅に特訥格爾に至る時に軍士飢寒し復た戰ふこと能はず營を結びて死守し以て救援の至るを待つ適〻其の兵を率て途に在り賊の爲めに遮らるゝを傳ふる者あり巴里坤大臣人を募りて往て探らしむれば大雪風に遇ふて敢て應ずる者無し獨り守備高天喜自から奮て赴き探らんと乞ふ時に清廷も亦侍衛圖倫楚に命じ來て兆惠を救はしむ乃ち巴里坤の兵二千を率ゐ間道より往き救ふ圍僅に解く兆惠已に救兵を得、往て巴雅爾が部落を破り始て巴里坤に回る三月、定邊左副將軍成衮札布に授くるに定邊將軍を以てし參贊大臣舒赫德と偕に珠勒都斯より進ましめ右副將軍兆惠に授くるに伊犂將軍を以てし參贊大臣富德と偕に額琳哈畢爾噶よ

阿睦爾撒納露領に入る

り進ましむ成衮札布、過ぐる所皆其衆を撫降し其の駝馬を收めず既に過れば多くは叛き去る乃ち師を旋して之を殲滅す兆惠が軍、庫隴癸に至る地、伊犂に近し叛黨昂克塔爾巴等險に據て抗拒す適〻大軍前行し後隊僅に八十人、曉霧に乘りて奮戰し密に侍衛札延保を遣り其の牧群を收めしむ衆、脫することと能はず敵中に哩宰桑あり其二を斃して其餘衆は悉く之を擒斬す是時に當りて叛黨、主無く互に相呑噬し札納噶爾布は噶爾藏多爾濟を襲殺し呢瑪亦札納噶爾布を襲はんと欲して果さず阿睦爾撒納、哈薩克の馬を盜みて伊犂に歸り揚言して曰く哈薩克、我を助くと諸台吉を博羅搭拉に會し自から汗たらんと欲し各〻長を爭ひ未だ決せず而して大軍猝に至る皆路を奪て去る然れども多くは脫すること能はず侍衛圖倫楚は貝勒納奇木を擒にし海蘭察は巴雅爾を擒にし烏爾登は呢瑪を擒にす札納噶爾布は已に病故し台吉琿齊達瓦其首を斬て來り獻す唯〻阿睦爾撒納は遠颺して獲ること能はず六月、兆惠、富德等之を窮追し哈薩克界に至る哈薩克汗阿布賚、時に阿睦爾撒納と隙あり且つ大兵の討を招かんことを懼る乃ち相約すらく阿睦爾撒納を擒獻せんと而して阿睦爾撒納知らず二十人を率て阿布賚に投ず阿布賚詭て曰く詰朝に相見んと先づ人をして其馬を收めしむ阿睦爾撒納驚き覺り倉皇として遁れ八人を携へ徒步して宵遁れ俄羅斯界に入る阿布賚、阿睦爾撒納を獲ず其兄達什策凌を執へて軍門に至る既にして阿睦爾撒納、樵者の得る所となり馬玉爾(露國官吏)の處に送らる侍衛順特訥、追跡して馬玉爾の處に至る馬玉爾伴て知らざるまねして與へず時に議者或は露國の釁を開かんことを懼る高宗聽かず理藩院

準噶爾の遺孽盡く

をして恰克圖の露官に行文して之を索めしむ阿睦爾撒納遁れし時、已に痘瘡を患ふ是に至て遂に死す故に露官敢て拒まず其屍を送て邊に至る清廷乃ち喀爾喀親王林丕勒多爾濟、侍衛努三を恰克圖に遣りて其屍を驗せしむ果して眞なり是に於て清廷、成衮札布を復して定邊左副將軍と爲し仍ほ烏里雅蘇台に鎮せしめ兆惠、富德に命じ地を擇て過冬の計を爲さしめ將に明年を以て再たび網を漏れたる叛黨を剿せしめんとす二十三年春、兆惠は博羅布爾噶蘇より富德は賽里木より兩翼に分れて圍剿し與に約して伊犁に會し以て額魯特の流れて碼哈沁となれる者を搜剔し悉く洗剿を行ひ山陬水涯、遺す所あることと無し是に於て準噶爾の遺孽盡き叛亂全く絶えたり初、沙克都爾曼濟は未だ亂に從はず巴里坤に依り城に近きて居る輝特汗巴雅爾、亂に從ひ詭て沙克都爾曼濟に掠めらると稱し實は兵を擧げて巴里坤を襲はんと欲す時に參贊大臣雅爾哈善、巴里坤に駐す清廷命じて密に之を察せしむ曰く沙克都爾曼濟若し信ず可くば担懷にして之を待ち疑懼を生せしむること勿れ否らずんば先づ發して之を制し肘腋の患を爲さしむること勿れと時に巴里坤方に餉糧に乏し而して沙克都爾曼濟、糧を請て休まず雅爾哈善本と心に之を疑ふ其の糧を請ふに及び此れ將に叛に應せんとするのみと陰に稗將閻師相を遣り五百人を率て宵、其營に抵らしめ路に迷ひ宿を求むるの狀を爲さしむ沙克沙爾曼濟覺らず羊を屠りて之を勞す閻師相半夜起て笳を吹き號と爲す衆、其の臥廬を襲て之を殺し併て其の部屬四千餘人を殲し一も脫する者無し沙克都爾曼濟の殺されしや殘燼未だ滅せず其妻、睡夢中より驚起し其夫の亂刃の下に斃るゝを見裸身にして之を抱持し穹廬の中に顚撲し宛として白蛇の蜒蜿するが如く遂に併せ殺さる雅爾哈善、謀叛を以て奏し清廷之を褒す然れども世は其寃を傳ふ

案ずるに此事、藩部要略は官書なるが故に沙克都爾曼濟を心懷兩端と書せり然れども下文に疑果叛、宵抵其營殲之と云ひ畢竟嫌疑を以て謀叛と誣ひられたること明かに武功記、嘯亭雜錄等の書は記する所均しく此の如く聖武記も亦其の寃殺を稱す蓋し當時の將軍參贊等が額魯特に於けるは殆ど其種を絶たんことを期したる者にして良莠擇ぶこと莫く玉石同く焚かる寃殺せし者獨り雅爾哈善一人に止まらず寃殺せられし者も亦啻に沙克都爾曼濟が所部四千餘人のみならず武功記は云へり時厄魯特懾我兵威、雖一部有數十百戶、莫敢抗者、呼其壯丁出、以次斬戮、寂無一聲、駢首就死、婦孺悉驅入內地賞軍、多死於途、於是厄魯特種類盡矣と此れ當時の情形なり之れ洗剿と稱し物を洗て餘垢を留めざるが如し然れども之れ獨り當時の將軍參贊の創意に出て專殺を快くせしに非ず蓋し上下の意、均しく此に在り行ふ者忌まず聞く者咎めず清廷も外、慈仁を示して內、實は刻忌、其の雅爾哈善に命ぜし一語、先發制人、毋令爲肘腋患の言、趣味津々、雅爾哈善其意を貼體し敬謹奉行せしのみ之を此人一人に咎む可らず

是より前、杜爾伯特汗車稜は既に科布多の烏蘭固木に移り(事は前編に詳なり)準噶爾汗、輝特汗等は皆叛に應せしを以て誅せられ和碩特汗も亦疑を以て寃殺せらる是に於て數千里の天山北路、復た一

汗を留めず而して土爾扈特族の舍稜獨り誅を逃れて露國に奔り遂に其族人土爾扈特汗烏巴錫の所に歸す

下、土爾扈特の復歸

土爾扈特は原と雅爾の額什爾努拉に游牧し伊犁の準噶爾と相隣し世々婚姻を通じ初、甚だ相惡しからず和鄂爾勒克の時に至り始て準噶爾の巴圖爾琿台吉と相善からず明末清初の際、準噶爾の勢日に盛なり和鄂爾勒克其の逼らんことを懼れ自から避けて露境に往き遂に額濟勒河畔の地を擇て駐牧す然れども未だ此を以て交を準噶爾に絶ちしにあらず諸父或は散して青海に往きしも(事は下章に詳なり)衞袞察布察齊獨り留りて仍ほ故地に在り清朝の順治十二年(我明曆元年、西一六五五年)土爾扈特部長書庫爾岱青始て使人錫喇布鄂木布をして和碩特の鄂齊爾圖汗に因て來て方物を献せしむ書庫爾岱青は和鄂爾勒克の子なり明年、伊勒登諾顏又使人錫喇尼和碩齊をして繼て來らしめ又明年、羅卜藏諾顏及び其子多爾濟も亦使人沙克錫布特等をして來て駝馬二百餘を献せしめ因て歸化城に於て馬千匹を互市せんことを乞ふ清廷之を許す伊勒登諾顏、羅卜藏諾顏は皆書庫爾岱青の弟なり蓋し當時皆道を準噶爾に假りて來り通ず書庫爾岱青子あり朋楚克と云ふ巴爾布琿台吉が女を娶りて阿玉奇を生む養はれて準噶爾に在り書庫爾岱青、西藏に赴て佛を拜し歸るとき伊犁を過り因て携て去り以て嗣と爲す阿玉奇立て土爾扈特始て汗と稱す準噶爾の噶爾丹、西套の鄂齊爾圖汗を殺す鄂齊爾布の妻は阿玉奇の姉なり其女を携へ奔りて土爾

阿玉奇の使人來賀す

阿玉奇の使人方物を献す

扈特に歸る是に因て道路梗塞し土爾扈特久しく來らず噶爾丹の滅るに及び康熙三十六年(我元祿十年、西一六九七年)阿玉奇、其屬諾顏和碩齊、色布騰蒙克等をして策妄阿喇布坦の使人と偕に來て捷を賀せしむ三十八年阿玉奇又使人額里格克遜等をして來らしむ其の歸るや準噶爾を過ぎ策妄阿玉喇布坦の殺す所となる初、策妄阿喇布坦が未だ伊犁を得ざりしや婚を阿玉奇、其の世婚なるに因り女を以て之に嫁し其の弟三子散札布をして多く從屬を率て往き之を送り且つ之を守らしむ既にして噶爾丹敗死し其の遺衆、大抵策妄阿喇布坦に歸す策妄阿喇布坦漸く驕志あり諸衞拉特を併せて悉く之を有せんと欲し散札布を留めて遣らず阿玉奇之を索む乃ち散札布を逐還し悉く從屬を留め以て準噶爾鄂托克に分隷す阿玉奇又其の從屬を索む是に由りて隙を生じ其の使人を殺す道路、故を以て復た塞がる時に阿玉奇の族人阿喇布珠爾、西藏に赴き達賴喇嘛に謁し還て嘉峪關外に至る準噶爾、路を遮り歸ることを得ず已むことを得ずして內附を清廷に請ふ清廷許して之を關外に置き後、移して額濟納河邊に游牧せしむ額濟納土爾扈特是なり(事は下章に詳なり)是より道を露國に假りて來る露國故さらに道を紆曲せしめ恰克特を繞らしむ故に三年にして僅に至る五十一年(我正德二年、西一七一二年)阿玉奇復た使人薩木坦をして來て方物を献せしむ清廷も亦其の能く舊好を忘れざるを嘉し侍讀學士圖理琛(或は圖麗琛に作る)を遣りて報聘せしめ且つ來りて阿喇布珠爾を迎へしむ阿玉奇喜びて使人に接し歡待甚だ至れり時に鄂齊爾圖の妻尙ほ在り使人至ると聞き鄂齊爾圖の舊を念ひ來り訪ひ泣て相語る而して阿喇布珠爾の父も亦大に喜び馬を贈り物を

贈る因て留ること旬日、然れとも阿喇布珠爾か既に清廷の封を受けしを以て復た迎へ去らず五十四年、圖理琛還る蓋し土爾扈特、達賴喇嘛を尊奉し入藏熬茶を得ざるを以て患と爲す準噶爾、道を迴りて以來、久しく入藏を得ず故に清廷に因て西藏に通せんことを欲す是に由りて人時に相往來せるなり既に阿玉奇死して其子沙克都爾札布嗣く使命久しく通せず沙克都爾札布、鄂齊爾圖の女を娶り敦囉布喇什を生む敦囉布喇什立ち乾隆十九年、使人吹札布をして西藏に赴かしむ二十一年（我寶曆六年、西一七五六年）來て清廷に入覲す清廷、官を遣りて護往し以て西藏に達せしむ明年、西藏より還る適々天山北路既に平て哈薩克入貢す吹札布之を聞き語て曰く若し哈薩克を經て來り通ずることを得ば繞道の勞無く行李の從來甚た便ならんと因て所部の疆域を述べ繪圖して以て献ず清廷乃ち敦囉布喇什に幣物を給し吹札布をして賚し歸らしむ

和鄂爾勒克の叔父衛袞察布察齊既に故地に留り其の子孫遂に準噶爾の屬台吉となる舍稜は其六世の孫なり戚屬を率て伊犂界に附牧す伊犂平き達瓦齊擒に就けとも舍稜は抗して降らず既にして阿睦爾撒納叛し清廷再たび大軍を動し道を分て進剿す舍稜間に乘りて出で其從父兄巴圖爾烏巴什と偕に其黨を糾合す阿睦爾撒納敗る其黨綽和爾、烏喇特、昂吉岱等は巴圖爾烏巴什沙拉伯勒に竄伏し敦多克、布庫察罕等は舍稜に附きて庫克烏蘇、喀喇塔拉境に匿る清廷、定邊將軍成袞札布、右副將軍兆惠等に命し又往て其の巢穴を掃はしむ是に於て巴圖爾烏什は哈薩克界に遁れ痘を患て死し舍稜は獨り博羅塔拉に竄れ道にして哈薩克の游騎に遇ひ與に兵を交へて戰ふ俄にして大軍來る逼ると聞き棄てゝ走る將に露國に赴かんとし人をして先づ往かしむ哈薩克、路に要して之を殺す舍稜乃ち間道より阿固爾阿爾海に赴く副都統唐喀祿、厄魯特散秩大臣和碩齊二人偕に之を尾追し布古什河原に抵り舍稜の從弟勞章臺札布を射て之を擒にす舍稜詭て罪に服し勞章札布を釋さんことを請ふ唐喀祿曰く此れ信ず可らずと將に兵に命し併せて之を擒にせんとす和碩齊が曰く之を擒にするも益無し若かず招て降らしめんにはと勞章札布を釋還す既にして舍稜、三宰桑を遣し軍に至り約して往て降を受けしむ唐喀祿愈々之を疑ふ和碩齊が曰く彼、我か軍威を畏る故に敢て來らざるのみ何ぞ往て降を受けざると唐喀祿を强ひて共に往かしめ馬に乘して河を渡り既に舍稜か營に近づき從者をして皆下りて靈鞬を解かしむ舍稜、使者をして酒を持して來り勞せしむ和碩齊受て之を飲み急に起て舍稜か營に入る唐喀祿立て待つこと時を逾ゆれとも和碩齊返らず舍稜再たび衆二千を遣はし駝馬を携て來り唐喀祿を迎へしむ唐喀祿之に赴き甫て河を渡れば其衆輙ち旋り擊ち營中の敵皆起る唐喀祿之に死し和碩齊は服を易へて舍稜か隊に投す後、擒に就て戮せらる舍稜是に於て馳て喀喇瑪嶺を踰え又使を露國に遣る露官之を禁ず間道より將に土爾扈特に額齊勒河歸せんとす露官之を聞き途にして之を森博羅特圖喇に縛す清廷、兵を遣りて之を奪はしむ未だ至らざるに露官移して其の境内に入る是より先、清廷の露國と恰克圖界約を訂するや互に捕逃の人を納れざることを約す故に清廷、理藩院をして薩那特衙門に檄し舍稜逐回せしむ露官、舍稜を放

舍稜烏巴錫に訓く

回す舍稜乃ち道より折れ遂に額濟勒河に奔る巴圖爾烏巴什か子沙喇扣肯も亦從ふ

是時に當りて敦囉布喇什既に死して其子烏巴錫嗣く露國、其の異教の故を以て動もすれば之を虐使し事あれば重く之を勞苦せしむ烏巴錫固より之に困しみ懷土の念あること久し適々舍稜至り甘言以て烏巴錫に說て曰く今伊犂舊居の準噶爾、和碩特、輝特皆既に蕩滅せられ天山北路數千里の地、空曠にして主無し其の此に在りて坐ながら困を受けんよりは若かず彼に赴きて之據らんにはと烏巴錫心動き遂に諸台吉、喇嘛を召しに密に東歸を議す時に額濟勒河に移りて既に七世、百三四十年、戶口蕃息し殆と二十萬、乃ち河北の台吉、嘛喇に約すらく河氷凍結の後を待ちて同く伊犂に還らんと舍稜因て流言して曰く今、俄羅斯、鄰國に事あり兵を土爾扈特に徵し凡そ男子、年十六歲に上れる者は數を盡くして敵に赴かしむ此れ我か土爾扈特族を殲滅せんと欲せるなりと衆皆惴々として去らんとを願ふ烏巴錫乃ち大小宰桑を集め諭すに伊犂に赴くの利を以てす皆悅て之に從ふ時に乾隆三十五年（我明和七年、西一七七〇年）の十月なり是歲、冬暖にして河水結ばず烏巴錫、河北の人を待つに暇あらず遂に盡く露國の匠役及ひ貿易人等の土爾扈特に在る者を殺し河南の衆を携て東に走る沿途劫掠し露の城池を攻破せる者四、露國之を聞き將軍をして兵を率て之を追はしむれば烏巴錫の衆、既に杭格勒圖喇を逾えて哈薩克境に入れり烏巴錫乃ち巴勒喀什諾爾を經て進み戈壁に入る行くと五日、水泉ありと雖、寸草無し携ふる所の牲畜倒斃する者算無し行て青可斯察漢（或は慶吉斯察罕に作る）に至る哈薩克等、一面其の游牧を擾さんとを慮り一

額勒里、納拉里

面土爾扈特の牲畜人口を得るを利とし群起して之を遮り相持すること二十餘日、互に殺傷あり然れとも衆既に多し其の前進を阻すること能はず烏巴錫乃ち哈薩克人を捕へて敎導とし克齊克玉子地方に至る哈薩克台吉額勒里納拉里等親から精銳を率て迎へ戰ひ阿布賚汗等に檄して四出截殺す是より先、哈薩克之を伊犂將軍に報す將軍命して之を布魯特に避けしむ烏巴錫乃ち折れて布魯特境に入る布魯特も亦之を聞き衆りて來り掠む往て沙喇伯勒に至る戈壁千里滴水寸草無し時既に春三月、天氣溫煖、人皆牛馬の血を取て飲み瘟疫大に作り死する者數萬、牲畜、十の六七を失ふ戈壁の外には布魯特踊躍して相慶し或は集り或は散し日夜劫掠し僅に他木哈に至りて始て手を歛む凡そ八閱月にして喀什噶爾界に至る

案するに朔方備乘に此事を紀して其隨=巴錫、居=於額濟勒河南=者、四十六萬餘戶、北岸所=居、數亦相當と云ひ瘟疫大作、死者三十萬人と云ひ烏巴錫至=他木哈、所屬男婦大小、猶有三十七八萬口=と云へる其原は椿園氏が土爾扈特人の誇誕を信したるに出で何秋濤察せずして之を取れるなり其實は乾隆御製文の優恤土爾扈特部衆記に方=其渡=額濟勒=而來=也、戶凡三萬三千有奇、口十六萬九千有奇、其至=伊犂=者、僅以=半計=とある是を眞と爲す故に伊犂に至れる者は八九萬人に過ぎざりしなり今之を事實に照して考ふるに南路汗旗五十佐領、中旗二佐領、右旗一佐領、左旗一佐領、北路親王旗四佐領、右旗六佐領、左旗四佐領、東路右旗四佐領、左旗三佐領、西路一旗四佐領、土爾扈特全部十旗七十九佐領、之に中路和碩特三旗十一佐領、新土爾扈特二旗三佐領を加ふるも其に九十三佐領

烏巴錫を伺賴す

のみ一佐領百五十人を以て編むとして合算するを一萬三千九百五十丁に過す一家一丁を出すとするも亦一萬三千九百五十戸を出でず此數大抵所謂る僅以〻牢計と云へるに近し此れ決して誣ふ可らざるの數なり土爾扈特人、由來誇張過大の言多し信ず可らざるなり

六月三日(乾隆三十六年)烏巴錫の族人策伯克多爾濟、主倫に入る時に舒赫德、烏什參贊大臣たり以て伊犂將軍に報す伊犂將軍伊勒圖、報を得て侍衛普濟保、察哈爾領隊大臣納旺、散秩大臣額魯特碩通、滿洲協領全鑑、巴虎、佐領呼圖克を遣りて其の來意を問はしめ一面具疏入告す烏巴錫本と舍稜の言を信し伊犂に據らん欲す唯々其の空曠にして主無きを知れるのみ何如ぞ將軍ありて之に治するを知らん然れとも事已に此に至る退かんと欲すれば既に露の城池を破れり進まんと欲すれば伊犂の守備既に堅し乃ち又諸台吉喇嘛と謀り六七日にして始て計を定め投誠を以て詞と爲し先つ格隆訥木庫、巴勒珠爾宰桑集布賚等をして將軍の處に赴て安を請ひ因て其さに投誠の情節を陳せしむ清廷既に入告を得、廷議紛起す舍稜、前に詭計を以て我か副都統を誘害し因て土爾扈特に投す今其人同く來る恐くは又不測の患あらん然れとも其衆數萬、勁悍にして常に刼掠を事とす納れずんば歸するに所無くして轉〻邊境を滋擾せんと是に於て亦計を決して之を納れ舍稜か已往の罪を宥し舒赫德に命し前往して之を照料せしむ數日にして烏巴錫至る將軍引て之を見る烏巴錫乃ち玉器、自鳴時刻表、定宣窯の甕器、自來火、鳥鎗、拉古爾の木椀、金錢等の物を献じ又其の先世曾て明の永樂八年受けし所の漢篆封爵の玉印一顆を出し

て之を献ず清廷、伊勒圖一人、經理宜しきを得難からんことを慮り舒赫德に命じて伊犂に往て同く事を視せしめ新附の衆を安輯せしめ尋て舒赫德をして代て伊犂將軍たらしむ

案ずるに此も亦史上は甚だ平々坦々たるが如くなれども其實は頗る議論ありしなり土爾扈特全部歸順記に土爾扈特携〻全部〻捨〻異域〻投〻誠嚮〻化〻、跋〻涉萬里〻而來〻是歸順、非〻歸降〻也と頗る事も無げに書きたれども其の下文には長〻事者乃以〻新來中有〻含稜〻其人曾以〻計誘〻害我副統唐都喀祿〻因以竄投〻俄羅斯〻者〻恐〻其有〻詭計〻議論沸起、古云受〻降如〻受〻敵、朕亦不〻能〻不〻爲〻之少惑而略爲〻備焉と云へり筆舌の先は潤飾を得る者なれども而も事實の掩ふ可らざること猶ほ此の如し之を要するに土爾扈特始より歸順の意ありしに非ず清廷も亦之を納るゝに躊躇の色ありし者なり但舒赫德一人は之を納るゝに盡力せるの形跡あり而して乾隆帝遂に舒赫德の議を用ゐて之を納れ且つ舒赫德をして其責を負はしめられし者なり請ふ少く之を證せん先正事略(舒赫德)に群言洶々、謂有〻詭計〻、上慮〻伊犂將軍伊勒圖一人不〻能〻經理〻、命〻公往相度、公力白〻其無〻他〻、上嘉〻之云々、已而俄羅斯邊吏使〻使問〻故、公面〻折之〻、其人悚息去とあり此に由て之を觀れば舒赫德が辯明に由りて納れたる者なりしこと推知すべく土爾扈特全部歸順記に朕聞〻有〻土爾扈特來歸之信〻、慮〻伊犂將軍伊勒圖一人不〻能〻經理得〻宜時舒赫德以參贊〻居〻烏什〻、辦〻回部事〻、因命就〻近前往とある此文一見、事無きが如くなれども其實は將軍伊勒圖は異論の一人なりし者の如し故に一人經理宜さを得ること能はじと云ふに託して專ら舒赫

德をして此事を經理せしめたりしなりされば土爾扈特汗烏巴錫が伊犂に至りしが未だ至らざりしかに既に舒赫德をして伊勒圖に代りて將軍たらしめたり蓋し土爾扈特の始めて至りしは喀什喀爾界にして伊犂の西南數千里に在り時に烏什の亂後にして喀什噶爾大臣は烏什に在り六月三日、土爾扈特の先發隊たる策伯克多爾濟卡倫内に入る先づ此報を得し者は舒赫德にして之を上奏し若くは將軍に報告したる者も亦舒赫德なり烏巴錫の至りしは六月の末に在り烏什より北京に至る約一萬一千里、八百里の急遞を以てするも十四日を經るに非れば達することを得ず其間に廷議あり異論の起るあり加ふるに若し伊犂將軍の議をも待つとせば其間一個月以上の日子を要す故に清廷の議既に之を納るゝに決し復た伊犂將軍の異議を聞くに暇あらず先づ舒赫德をして前往照料せしめられし者にして暫く辭を將軍一人經理宜きを得難からんと云ふに托せるなり尋いて伊勒圖の奏至り異議あり然れども清廷既に之を納るゝに決し異議を容れざるが故に舒赫德をして之に代らしめし者なり然らずんば伊勒圖一人經理に難くば舒赫德一人も亦經理に難かるべし焉ぞ伊勒圖に難くして舒赫德に易きの理あらんや乾隆御製土爾扈特全部歸順の詩の序に舒赫德亦先所命由烏什馳往莅其事者、因令代伊勒圖爲將軍、駐伊犂、安輯新附之衆と云ひ土爾扈特全部歸順記に舒赫德至伊犂、一切安汛設偵、籌儲密備之事、無不悉妥と云へる皆舒赫德をして終始經理の任を負はしめたるを見る烏巴錫の至る既に六月の末に在らん然るに七月は伊勒圖が卸任、舒赫德が接

烏巴錫入覲す

任の時に在り新疆識略伊犂將軍表に伊勒圖乾隆三十五年五月到任三十六年七月卸事舒赫德乾隆三十六年七月署任十月實授將軍三十八年七月卸事伊勒圖乾隆三十八年七月由二哈爾巴哈台參贊大臣一到任とあり此に據れば舒赫德、伊勒圖一時位置顛倒し伊勒圖は塔爾巴哈大臣に貶せられたりしなり故に諸書に烏巴錫等來て將軍を見ると云ふ者、恐くは伊勒圖に非ずして舒赫德ならん然れども諸書記述一ならず的確を得難ければ暫く伊勒圖とせるのみ

又案ずるに明史瓦剌傳永樂六年の事の後に明年夏、封馬哈木爲特進金紫光祿大夫順寧王、太平爲特進金紫光祿大夫賢義王、把禿孛羅爲特進金紫光祿大夫安樂王、錫印誥、とあり八年封爵事無し疑らくは八年は七年の誤にして土爾扈持は賢義王若くは安樂王の後なりしには非るか然れども史の文詳ならず今暫く疑しきを闕く

論者或は露國を云々せる者あり清廷又理藩院をして薩那特衙門に檄知せしめ一面、額駙色布騰巴爾珠爾をして馳て伊犂に至り其の入覲すべき者を迎へしむ是に於て烏巴錫以下台吉頭目等、舍稜を併せ共に十三人、咸く熱河に赴き避暑山莊に入覲す烏巴錫、默們圖、額默根烏巴什、拜濟瑚、伯爾哈什哈、策伯克多爾濟、阿克薩哈勒、巴木巴爾、奇布騰、沙喇扣肯及び和碩特族恭格、雅蘭丕勒、諾海、巴雅爾拉瑚等皆跪謁し舍稜も亦稽首して罪を請ふ清廷乃ち新舊二部に分ち各々札薩克を授け烏訥恩蘇珠克圖盟舊土爾扈特部は烏巴錫を以て長と爲し仍は汗と稱せしめ所屬台吉には親王、郡王、貝勒、貝子等の爵を賜ひ青色特啓勒圖盟新土爾扈特部は舍稜を以て首と爲し封じて郡王と爲し別に貝子一を授く其の

和碩特は自から別に一盟と爲し巴圖色特啓勒圖盟と稱し亦之に貝勒、貝子の爵を授く時に熱河の布達拉廟(西藏の布達拉廟式)新に成りて之を落す土爾扈特族の黄教を崇奉せるを以て往て其禮を贍せしめ又法會に預からしめ高宗親から土爾扈特全部歸順記を製して其事を紀し又優恤土爾扈特部衆記を製し石を熱河、伊犂兩處に立てゝ之を勒し以て後世に傳ふ當時賑恤の費、大約馬牛羊、合て二十六萬五千五百、官茶二萬餘斤、米麥四萬一千餘石、羊裘五萬一千餘襲、布六萬一千餘匹、棉五萬九千餘斤、氈廬四百餘具、帑銀二十萬兩なりと云ふ明年、各札薩克の牧地を定め貝勒默們圖には牧を晶河に賜ひ伊犂將軍をして之を兼轄せしめ汗烏巴錫、貝子恭坦、輔國公拜濟瑚、台吉伯爾哈什哈等には牧を齊爾に賜ひ親王策伯克多爾濟、台吉奇哩布、阿克薩哈勒等には牧を和博克薩里に賜ひ皆塔爾巴哈台大臣をして之を兼轄せしめ郡王巴木巴爾(東遊の土爾扈特王は即ち此子孫にして土爾扈特に於て第三位に在り)貝子奇布騰等には牧を濟爾哈朗に賜ひ庫爾喀喇烏蘇大臣をして之を專轄せしむ以上均しく舊土爾扈特に屬す其の新土爾扈特郡王舍稜、貝子沙喇扣肯等には牧を布爾罕河に賜ひ科布多大臣をして之を兼轄せしめ其の和碩特貝勒恭格、貝子布顏楚克、台吉諾海、巴雅爾拉瑚等には牧を珠勒都斯(或は裕勒都斯に作る)に賜ひ喀喇沙爾大臣をして之を兼轄せしめ其の偖に來る所の沙畢納爾人には別に札薩克を授けず伊犂に附牧せしめ爲めに沙畢納爾營を設け額魯特營の領隊大臣をして之を兼轄せしむ明年、齊爾の牧地を珠勒都斯に移し亦喀喇沙爾大臣をして之を兼轄せしめ四十年、晶河の牧を西路と爲し齊爾哈朗の牧を東路と爲し和博克薩里の牧を北路と爲し珠勒都斯の牧を南路と爲し各路に盟長を置き印を賜ひ和碩特も亦中路と爲し盟長を置き印を賜ふこと土爾扈特に同し和碩特は青海の願實汗に出で本と土爾扈特と族を同くせず其の土爾扈特に附隷せるは何世何故なるを詳にせず然れども其の土爾扈特族と偖に來れるが故に清廷の之を視ること二あらずと云ふ是より四衙拉特悉く清廷に臣服し永く不叛不侵の藩屬たり

案ずるに新舊土爾扈特及び和碩特各路各旗の旗名、爵號、佐領の數は左の如し

南路	爵號	佐領	南路	爵號	佐領
汗旗	札薩克卓哩克圖汗	五十	左旗	札薩克一等台吉	四
中旗	札薩克巴雅爾圖多羅貝勒	二	東路		
右旗	札薩克輔國公	一	右旗	札薩克多羅畢錫時勒圖郡王	四
左旗	札薩克一等台吉	一	左旗	札薩克固山依特勒貝子	三
北路			西路		
北路旗	札薩克和碩布延圖親王	四	西路旗	札薩克多羅濟爾噶朗貝勒	四
右旗	公品級札薩克一等台吉	六	中路		

南路	爵號	佐領	南路	爵號	佐領
中路中旗	札薩克固山阿穆爾畧貴貝子	四	新土爾扈特		
中路右旗	札薩克一等台吉	三	新右旗	札薩克多羅弼里克圖郡王	一
中路左旗	札薩克一等台吉	四	新左旗	札薩克固山烏察喇爾圖貝子	二

第廿二章　準噶爾滅後の天山北路

一　善後施設

甚い哉、天の額魯特に災せること準噶爾の盛なりしや二十四鄂托克、九賽集、六十二宰桑、二十一昂吉、汗の鄂托克のみを以てするも戸數、十萬に下らず昂吉の戸を併すれば二十餘萬に至る而るに喇嘛達爾札、一朝亂を始めて繼ぐに達瓦齊、阿睦爾撒納の簒立背叛を以てし同族相戮し骨肉相嚙み二三載の間に大軍兩次剿討し誅鋤殆ど遺噍無し然れども其實を考ふれば戎馬の間に在りて刀刃矢鏃の下に隕命せし者は僅に十の二のみ其の誅を逃れ亂を避け俄羅斯及び哈薩克、布魯特に奔りし者、十の三、其の最も慘毒を流しゝ者を痘瘡の傳染と爲す餘す所の十の五は大抵此が爲めにして斃る誠に額魯特の一大厄運、慘と謂はざる可けんや

案ずるに蒙古、額魯特、滿洲、西藏原と痘瘡無し其の之あるは漢人に接觸せしより起る故に滿洲語に痘瘡をニイカンヤヲと云ふニイカンは漢人なりヤヲは瘡なり此れ痘瘡を以て漢人特有の疾病と爲したる者にして最も北京に來るを恐る康熙帝の如きも幼時、出痘を避くるが爲に北京に居られざりしことあり蒙古額魯特皆之を畏る故に今に至りて理藩院の則例、未出痘王公の入朝を寛にし唯々熱河に朝覲せしむるの例を存せるは此に由れるなり西藏の達賴、班禪に至りても猶ほ然り班禪の如きは曾て北京に入覲し出痘の爲めに寂せし者あり知らず西藏の活佛、漢土の痘神に敵せざるか達瓦齊、阿睦爾撒納の討伐に大軍數萬、西北兩路より出でゝ天山北路に向ふ其内必ず痘瘡を患ひし者あらん因て額魯特に感染し此が爲めに斃れし者數十萬、阿睦爾撒納も亦遂に此に由りて死せり戰局の終を告ぐる甚だ早かりし者、一半は功を痘神に讓らざるを得ず乾隆の準噶爾戡定は啻に人力に賴りし者にあらず實に神助を荷へる者と謂ふも可なり呵々

然れども此れ實に氣運一新の秋なり破滅殘壞の餘、氊帳穹廬、一物存せず遺す所は河山數千里のみ此れ豈に天の善後施設に便にせる所以に非ずや是時に當りて乾隆の中年、國勢最も張り文武の材、固より其人に乏しからず故に其の善後事宜の如き大に觀る可き者あり蓋し清廷の施設は此地を分て東西兩大段と爲す而して其の東大段を巴里坤、烏魯木齊地方とし西大段を伊犁、塔爾巴哈台地方とす巴里坤、烏魯木齊は逐漸、東よりして西に趨き伊犁、塔爾巴哈台は順次、南より起して北に進み一縱一横、兩

巴里坤
烏魯木齊

準噶爾貿易の地

個の辦法に從ひ各々其人を擇びて之に任じ成るを其人に責めて未だ始より一定の法を立て之を一人の經理に委せざりしなり何を以て之を言ふ請ふ少しく之を詳叙せん

巴里坤、烏魯木齊は東大段に屬し其の施設、東よりして漸く西せし者なり其の西漸の情形に通せば以て清廷勢力の漸く北に展び其の中心も亦漸く之に隨て移れるの狀を得、又以て其の遂に天山北路を併有するに至れる所以の逕路を知るに足らん今、便に順ひ先づ設官の事より說起せん準噶爾滋擾以來、清廷屢々兵を西北に動かす然れども嘉峪關外、初未だ一衞一城を設けざりしなり噶爾丹曾て關外布隆吉爾地方に屯し以て青海西套の和碩特を窺ふ然れども當時爭ふ所は多く北路に在り康熙末年、漸く西に移り雍正二年に至り清廷始て城を布隆吉爾に築き安西衞を設け總兵を置て之を駐守せしむ此を安西鎭と爲す後改めて提督を置き安西提督と稱す鎭を設けし年、又同知を同城に置き地方事務を管理せしむ此を安西廳と爲す

案ずるに之れ今の甘肅省内の事に係る然れども後來鎭西廳の起源は此に在り故に略々此より說起せざるを得ず讀者之を諒せよ

七年、定西大將軍岳鍾琪、軍を巴里坤に進め因て城を築て駐紮し十年、更に城を木壘に築く既にして巴里坤に復歸し既にして又巴里坤の兵を撤し以て和議を訂す和議成るや巴里坤を以て清廷の版圖に歸し市場を此に設け準噶爾貿易の地と爲す清廷、官員を派して之に駐せしむ後來巴里坤辦事大臣の設、實に源を此に發す乾隆二十四年、天山南北兩路の軍休みて始て安西提督を巴里坤に移駐せしめ以て巴里坤提督と稱す同時に安西廳を升せて安西府と爲し仍ほ其の同知を巴里坤に移して安西同知と稱せしめ別に道員を置き之を哈密に駐し以て安西南北兩路を管理せしめ（安西府を南路とし安西廳以北を北路とす）之を安西道と稱す是歲、烏魯木齊に始て廻化同知を置き昌吉に寧遠通判を置き皆之を安西道に隸す而して安西提督、安西道は俱に陝甘總督の管下に屬し伊犂の將軍參贊に統屬せず時に準噶爾の互市絶えて哈薩克の互市起る（事は下頁に詳なり）哈薩克の互市は烏魯木齊に於てして巴里坤に於てせず商民の烏魯木齊に赴く者漸く多く二十七年、烏魯木齊にも亦辦事大臣を置くに至れり是に於てか巴里坤提督の標兵前後二營を割て烏魯木齊に移駐し以て協標の兩營と爲し副將を添設す副將原と陝西固原の城守營叅將たり烏魯木齊に協標を設くるに因て彼に裁して此に添へ以て副將とし明年、又一營を添へ城守營と爲し因て副將を改めて總兵と爲し兵四千人を駐屯せしめ烏魯木齊以東、巴里坤以西の屯田は近に就て烏魯木齊總兵より經理せしめ仍ほ巴里坤提督の節制に歸す既にして塔爾巴哈台城成り哈薩克の市去りて塔爾巴哈台に移り辦事大臣も亦隨て移駐せざることを得ざるに至る然れども是時、烏魯木齊の屯田盛に起り農商の移住する者益々多く轄境廣濶にして大員を置くに非れば之を鎭壓するに足らず是に於てか遂に烏魯木齊總兵と巴里坤提督とを互換し提督始て迪化城に駐す唯々仍ほ巴里坤提督と稱せしむ後遂に烏魯木齊提督と改稱す是より先、烏魯木齊に旗營あり二十六年、滿洲兵二百を駐

辦事大臣

烏魯木齊提督

領隊大臣
參贊大臣

し明年又察哈爾兵二百、索倫兵百を添駐し皆辦事大臣の下に在り辦事大臣の塔爾巴哈台に移りしや悉く之を携へて往く是より巴里坤、烏魯木齊一帶、復た旗營無く綠營の屯兵あるのみ而して專管糧餉道を烏魯木齊に置て其の糧餉を管せしむ是に於て烏魯木齊漸く巴里坤より重し此の如き者始ど十年、土爾扈特復歸し淸廷之を納れ復た故地に居らしめず散して諸處に置き以て其力を分つ其衆凡そ八九萬人、駐防の兵、一時彈壓の用に敷かず是に於て又大に旗營を陝甘二省より轉駐し三十七年、甘肅省の涼州莊浪兩處より三千三百四十四人を移し分て烏魯木齊、巴里坤の兩處に置き各々領隊大臣を設けて之を管せしめ又烏魯木齊に參贊大臣を置きて各領隊大臣を節制せしめ專管糧餉道を廢し安西道を哈密より巴里坤に移し以て哈密、闢展、及び烏魯木齊、木壘等の各地を兼轄せしめ又瑪納斯、庫爾喀喇烏蘇、精河三處屯田をも烏魯木齊の管理に歸し（是より先は伊犂に屬したり）領隊大臣を庫爾喀喇烏蘇に駐し東路土爾扈特及び綠營屯田の事務を管せしむ是に至りて東西兩大段漸く相融合し烏魯木齊參贊大臣は伊犂將軍の節制を受け兩者殆ど打て一丸と成すの勢を現す然れども提督、總兵以下綠營の辨員及び地方理事廳の官は仍ほ陝甘總督の下に隸し未た伊犂將軍の手に歸せず事權一ならざるの憾無きこと能はず明年、遂に察哈爾、熱河の例の如く參贊大臣を改めて都統と爲し綠營の節制、地方官員の管理を以て陝甘總督より近に就て之を都統に委囑し都統是より陝甘總督に代りて武官の提鎭以下、文官の道府以下各員を兼轄す是より常事は都統之を專決し事あれば都統之を陝甘總督に商議し大事は會銜を用て上奏施行す此れ伊犂、塔爾巴哈台地方の專ら將軍に屬する者と異なる所なり都統を置きし歲（即ち乾隆三十八年）安西府を巴里坤に移し別に嘉名を擇びて鎭西府と爲し（原の安西府は仍ほ直隸州として安西州と稱す）同城に宜禾縣を設け又迪化廳を改めて迪化州と爲し鎭西府に隸せしめ尋て升せて直隸州とし寧邊廳を改めて昌吉縣と爲し之を廸化州に隸し阜康に州判を置き綏來に縣丞を置き始て霍寧城を築き巴里坤道を此に移し鎭廸道と稱す是に於て烏魯木齊、重きこと遙に巴里坤の上に在り四十年、奇台は巴里坤、烏里雅蘇台往來の衝に當り住戶一千百十戶に至り商賈の集まる者も亦千百を以て計ふるに至れるを以て通判を改めて（設置年代未詳）奇台縣と爲し兼て古城滿營の理事廳事務を管せしめ其の商民事務は東吉爾瑪巡檢をして之を兼管せしめ皆鎭西廳に隸す阜康も亦住戶一千三百九十八、商民の集まる日に多きを以て同時に州判を改て阜康縣と爲し明年、濟木薩も亦巴里坤、烏里雅蘇台孔道の衝に當り屯兵六百五十、住戶六百餘あるを以て縣丞を置き四十四年、綏來の縣丞を改めて綏來縣と爲し皆之を廸化州に隸す其後庫爾喀喇烏蘇に同知廳を置き四十八年、改めて糧員と爲し同時に精河に於ても亦糧員を置き五十八年、又喀喇巴爾噶遜に糧員を添設す此れ東大段文武官設置の大要にして爾來大變化無く以て道光中に至りて鎭西府を改て鎭西廳と爲し奇台縣を以て廸化州に隸し宜禾縣を廢し鎭廸道を移して巴里坤に駐せしむ此れ其の小變化のみ之を要するに巴里坤、烏魯木齊屬の文武官員は都統、領隊大臣及ひ三糧員を除く外は皆原と陝甘總督管下の官員にして提督道府皆前

の安西府よりして轉輾、西に移りし者なり

又築城駐兵に就て觀んか巴里坤漢城(即ち鎭西廳城)は天山北路第一起手の築城にして雍正九年の建設に係り木壘城之に次ぎて十年に築造せられ其餘は皆乾隆二十年準噶爾平定の後に在り卽ち昌吉の寧邊城は二十七年、呼圖壁の景化城は二十九年、烏魯木齊の廸化城は三十一年(實は此より前、既に小城あり築造年月未詳、此は其の再築)霍寧城は三十七年、庫爾喀喇烏蘇の慶綏城も亦三十七年、濟木薩の保惠城及び瑪納斯の康吉、綏寧兩城は皆四十二年、精河の安阜城は四十八年、築造年代頗る錯綜せるが如くなるも靜に其の前後の事情を考ふれば大體、東に在る者前に在り西に在る者後に在り唯〻巴里坤、古城の西滿城の如き喀喇巴爾噶遜の嘉德城の如き後來の添設に係るが故に此と例を同くせず屯田に至りても亦然り巴里坤に始まり漸く烏魯木齊地方に及ぶ初、康熙中、之を布隆吉爾一帶に設け雍正中、哈密に設けしのみ乾隆二十一年、北路の亂平て始て之を巴里坤に設く明年、將軍兆惠、之を烏魯木齊に置かんことを請ふ二十三年、侍衛努三をして巴里坤屯田を經理せしむ努三因て奏す木壘より洛克倫に至る其間、烏魯木齊、昌吉等開墾す可き者十六處ありと清廷是に於て烏魯木齊屯田の議あり明年、陝甘總督楊應琚、凱旋兵內より三千餘人を留めて烏魯木齊、昌吉に屯田を開かんことを請ひ清廷之に從ふ二十六年、又闢展より烏魯木齊、昌吉、洛克倫等地に赴きて屯種せしむ烏魯木齊の屯務是より盛なり而して瑪納斯、庫爾喀喇烏蘇、精河の屯田は伊犁辦事大臣阿桂に因て創始せられ二十七年

より之を設け後、烏魯木齊の管下に歸す其の木壘の吉布庫の如き濟木薩の如きは亦後年の添設にして此の例外に在り

東大段に在りては大體此の如く東よりして西に進むの趨勢を示し又之を經營する者も亦伊犁將軍に出でずして陝甘總督より出で一官を設け一兵を置くも必ず之を陝甘管內に取りて他處より移し來らず管に緣營兵のみ然るにあらず乃ち旗營に至ても亦猶ほ此の如く閑處に裁して要處に添へ彼に挹て此に注く融通の妙、彊場擴大すと雖、經費の款は殆ど出入無し而して設官駐兵のみ獨り然りとするに非ず其の戶民を移すに當りても二十七年以後、四十三年に至るの間、前後九回、戶凡そ一千四百三十、人口六千百九十四を甘肅省內張掖、東樂、山丹、撫彝等の諸縣より移し之を烏魯木齊地方一帶に置き三十四年七月、甘肅道畢沅、木壘一路に赴き屯田及び古城の工程を視察し九月、陝甘總督も亦親から木壘に赴き屯田を增設し東西吉爾瑪泰より特訥格爾に至る十一堡を建設し四萬餘畝の墾田を得、更に濟木薩に赴て烏魯木齊辦事大臣と會し古城築造の圖を繪て獻せしが如き皆當時陝甘總督經營の跡を視る可し此れ乃ち今に至りて新彊と甘肅と離る可くして離る可からざる所以の原因たり

西大段に至りては頗る此と趣を異にす天山南北西路の平定せしや參贊大臣阿桂、時に阿克蘇に在り阿克蘇の北、木素爾嶺を踰ゆれば則ち伊犁界なり回子既に策妄阿喇布坦の時に於て其の驅使する所となり常に其間に往來す阿桂之を知る其の將に伊犁を經營せんとするや豫じめ回子をして籽糧農具を備へ

しめ計劃既に成り乾隆二十五年二月、察哈爾、索倫の驍騎五百、綠營の兵五百、回子三百を率ゐ氷雪を蹈み入りて伊犂の事を辦ず伊犂の地、肥沃にして耕種に適し回子亦耕種を善くす是に於て綠營兵を西邊に置き先づ城堡を築て以て邊警に備へしめ回子を東邊可耕の地に置き河渠を開て以て灌漑に便せしめ屯田を其中に興し察哈爾、索倫の兵をして馬廠を設け放牧を經管せしむ此れ其の施設の始にして是歲屯田大收あり阿桂因て奏請して益〻南路諸城の回子一千戸を移し又綠營の屯田兵を添へて一千人に至り築城及び屯田の事に從はしめ其の未だ農事に馴れざるが爲めに屯田の事務に熟悉せる總兵一人を烏魯木齊より奏調して屯鎮總兵と爲し大に屯田を開く是歲、塔爾奇城成る伊犂本と城無し是に至りて始て漢城あり明年、綏定、寧遠の二城又成る綏定も亦漢城にして綠營の駐する所、寧遠は回城にして回子をして之に居らしむ察哈爾、索倫は俱に游牧を事とし城中に住せず時に亂離の餘にして伊犂殆ど居民無く旗營、綠營の兵一千五百を除けば有る所は皆南路より移し來れる回子のみ準噶爾遺民に至ては哈薩克、布魯特諸部より復歸する者稍〻聚れりと雖、地主を以て之を目すること能はず猶ほ新附の降虜たるを免れず而して旗營綠營の兵亦當時皆換防に係り永く此地に住する者に非ず故に伊犂開發の骨子は此時實に回子に在り(後來回子の亂、其源遠く此に在り)此の如くにして善後施設は端緒に就くことを得たり唯〻其境域太だ狹窄にして規模定まり易く未だ以て阿桂が千里の才を展るに足らず時に東大段の施設は未だ呼圖壁を踰ゆること能はず實に鞭の長きも馬腹に及ばざるの感あり阿桂乃ち又北山を踰え手を瑪納斯以西に著け二十七年、瑪納斯、庫爾喀喇烏蘇、精河三處の屯田を創始す

案ずるに三處屯田の創始、諸書記する所無し唯〻編者所藏の新彊兵房條例(此書刊本無し編者所藏の者は謄本に係る疑らくは殆ど原本)に乾隆二十七年、欽差大臣旌額里永德會同伊犂參贊阿桂具奏、查本年安設瑪納斯、庫爾喀喇烏蘇、精河三屯案內云々また臣阿桂既經總理庫爾喀喇烏蘇、精河、瑪納斯三屯、即將此三屯所管台站、總統辦理云々などあり以て三屯の二十七年に始まり阿桂より經營せられしを知るべし此時阿桂方に北方塔爾巴哈台に築城の志あり事の順序として先づ手を近より起さゞる可らず精河、庫爾喀喇烏蘇は其間に介在す此れ其の先づ手を著けし所以にして東大段の施設未だ呼圖壁以西に及ばず故に又瑪納斯以西に手を着け以て東西兩大段の連絡を通じ伊犂より台站を設け瑪納斯に至り以て呼圖壁に接したるなり後來此の三屯は烏魯木齊都統の經理に讓りたりと雖、頗る同一管內と辦法を異にし其の屯田兵は綠營なるが故に初より提督の管下に歸すべき理なるに先づ之を都統に屬し四十九年、都統海祿が奏請に因て始て提督の管理となりしが如き烏魯木齊屬の各地は携眷移住を許せるに瑪納斯以西に在ては兵丁も住戸も一切婦人女子を留むることを許さゞりしが如き皆辦法の他地方と異なる所にして初より陝甘總督の手に在りて所謂る一律に辦理せられたる者に非ることを證するに足る

三處屯田既に頭緒あり台站も亦通ず是に於て阿桂更に塔爾巴哈台地方を經營し將に城を土爾扈特の故

地雅爾に築かんとす適〻命あり明瑞之に代る阿桂初、參贊を以て伊犁辦事大臣たり明瑞が之に代るに及び升せて將軍と爲し南北兩路を總統せしむ是より兩大段稍〻融合し脉絡始て貫通す二十九年、雅爾の肇豐城成る明瑞奏請し烏魯木齊辦事大臣を移して雅爾に調駐せしめ又其の察哈爾索倫の驍騎及び綠營の屯田兵六百を帶て之に赴かしむ是歲、伊犁に惠遠城を建て始て將軍の治所と爲し滿營を城内に設け且つ換防を改めて駐防と爲す是より先、明瑞の始て將軍となりしや參贊大臣二人を置き愛隆阿、伊勒圖を以て之と爲す是に至りて伊勒圖、京に回り定めて參贊を以て一人とす而して領隊も亦始、定額無し二十七年に察哈爾營の領隊を置き又額魯特の投降益〻多かりしを以て額魯特營の領隊を置き尋て額魯特營の領隊をして兼て索倫營を領せしむ是に至りて諸營皆駐防となり分て四營と爲し其の索倫營は更に分て兩翼と爲し索倫四旗を左翼として奎屯薩瑪爾地方に遊牧せしめ達虎爾四旗を右翼とし霍爾果斯河一帶に居住せしめ察哈爾營は波羅塔拉、哈布塔海、賽里木淖爾一帶に遊牧せしめ額魯特營も亦分て兩翼と爲し上三旗を左翼とし下五旗を右翼とし左翼は熱河より達什達瓦の舊部五百人を移し特克斯、察琳塔瑪哈地方に遊牧せしめ右翼は諸部より投出の額魯特遺民七百人を以て之と爲し霍諾海、齊吉斯、哈升等の地に安挿せしめ錫伯營は三十年、盛京より一千零十八人を移して伊犁河南に駐せしむ各營均しく領隊大臣一員を置て之を領せしむ而して其の滿營は二十九年以後、三十一年に至るの間に於て熱河及び甘肅省の凉州、莊浪の各處より移駐せしむる者、四千三百七十人、之を惠遠城に置き將軍親しく之を領す是に於て伊犁施設の規模全く成る然れども雅爾城は夏、蠅蚋多く冬、氷雪多く戍守に難きを以て阿桂が再たび伊犁に來りて將軍たるに及び三十一年、奏請して東二百里、楚呼楚の地を擇て新城を建つ即ち今の塔爾巴哈台城是なり而して參贊大臣一人、領隊大臣二人、理事同知一人を此に駐ず三十五年に至り將軍伊勒爾圖再たび滿兵を添駐せしめんと欲し惠寧城を築き西安の滿洲蒙古駐防兵二千二百零四人を移し別に領隊大臣一人を置て之を領せしむ其の綠營の屯田兵も亦漸く增して三十四年には二千五百人に上る然れども猶ほ換防たり四十三年に至り伊勒圖又奏請して綠營の換防を改めて駐防と爲し額を定めて三千人とし陝甘二省の官兵を移駐せしめ四十五年、因て廣仁、瞻德、拱宸、熙春の四城を添築して之を分駐せしむ

案ずるに兩大段是に至りて全く合一せりと謂ふべし啻〻に綠營兵の陝甘總督管内より調移せらるゝのみならず乃ち滿營に至りても亦熱河以外、皆陝甘總督管内より移駐せらる新疆と陝甘二省との關係は益〻密切を加へたり

初、漢民の伊犁に至る者甚だ多からず然れども各城の兵丁あり察哈爾索倫あり投降の額魯特あり移住の回子あり而して又增すに滿營を以てす勢自から命盜脫逃各案及び旗民交涉事件無きこと能はず是に於て三十一年、理事同知一員を置き將軍の城内に在て之を管理せしめ明年又惠遠、綏定の兩城に巡檢各〻一人を置く(綏定城巡檢は後、惠寧城に移さる)綠營の携眷兵陸續として至るに及び商民も亦漸く